

塩治299号線道路新設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

三田谷 I 遺跡

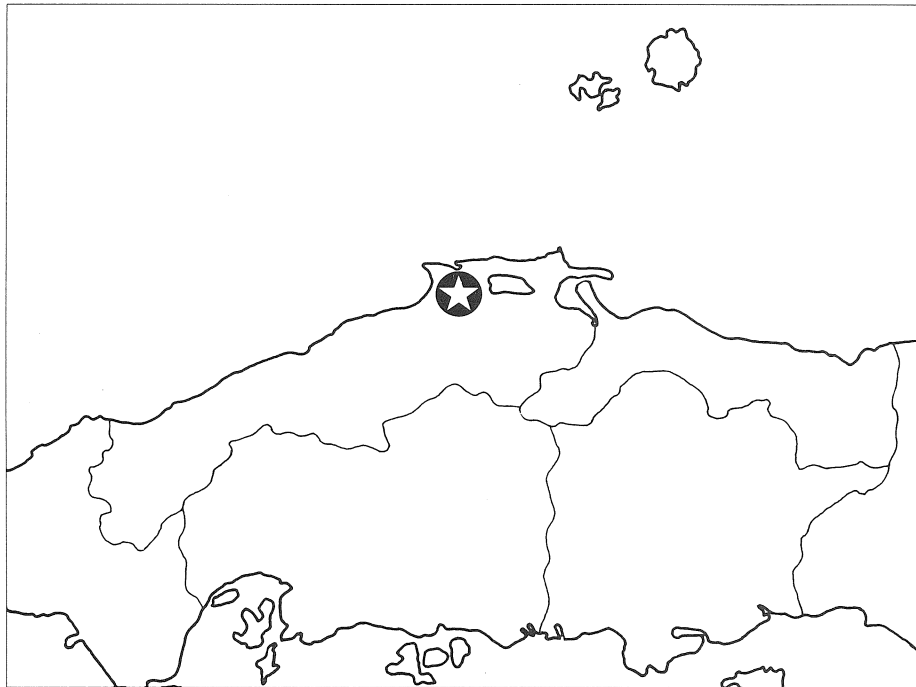


2000年3月

出雲市教育委員会

塩冶299号線道路新設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

三田谷Ⅰ遺跡



2000年3月

出雲市教育委員会



三田谷 I 遺跡出土墨書土器



a区 空撮 東より



b区 空撮 西より



b区 堰堤状施設 空撮



c区 空撮 北より



c区 空撮 南より

序

このたび斐伊川放水路事業に関連して塩冶299号線道路新設工事に伴う三田谷 I 遺跡の発掘調査をいたしました。

今回の調査地は、斐伊川放水路事業により平成6年度から島根県埋蔵文化財調査センターにより継続的に調査が進められている三田谷 I 遺跡の三田谷奥から神戸川の支流へと続く道筋であり、今回の調査により旧河道の片岸を確認しています。

また今回特筆すべき遺構といたしまして、中世の堰堤状施設を、権現山と浄福寺のある丘陵の谷間の最も狭まった位置から検出しました。調査区範囲内での調査ですので、全体像を掴むまでには至りませんでした。検出例の少ない貴重な遺構です。

以上、次々と明るみに出ています三田谷 I 遺跡に、また新たな知見を提供することができました。各方面の研究資料として、また郷土の歴史復元の資料としてご活用いただければ幸いです。

発掘調査にあたり、ご指導、ご協力を賜りました関係者のみなさまに心よりお礼申し上げます。

出雲市教育委員会

教育長 多 久 博

例 言

1. 本書は、出雲市道路河川課から委託を受けて、出雲市教育委員会が、平成10年度に実施した塩冶299号線道路新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録である。
2. 本書で扱う遺跡は、三田谷 I 遺跡である。
3. 発掘調査を行った地番は、次のとおりである。

出雲市上塩冶町半分
4. 発掘調査は、平成10年10月5日から平成11年3月28日までの、6ヶ月間にわたり実施した。
5. 調査組織は、次のとおりである。

調査主体	出雲市教育委員会
事務局	平成10年度 後藤 政司（文化振興課 課長） 平成11年度 大田 茂（文化振興課 課長）
調査員	米田美江子（文化振興課 嘱託員）、佐藤三鈴（文化振興課 臨時職員）
調査指導	田中義昭（元島根大学教授）、守岡正司（島根県教育委員会文化財課）、 鳥谷芳雄（島根県埋蔵文化財調査センター）
6. 発掘調査及び整理作業・浄写については、以下の方々のご協力を得た。

発掘調査	岡 省吉・吉田 栄・鎌田 悟・岡 久男・小玉順子・山根幸枝・神田鶴子・ 高根常代・今岡美恵子・坂根幸子・進藤久吉・塚原立之・昌子良吉・天野重夫・ 佐々木紀明
整理作業	矢田愛子・鶴口令子・河井栄子
7. 調査及び報告書作成にあたっては、前記した方々の他以下の方々から有益なご助言をいただいた。記して感謝いたします。（敬称略）

中村唯史（島根大学汽水域研究センター客員研究員）
角田徳幸・熱田貴保・平石 充（以上島根県埋蔵文化財調査センター）
8. 本書で使用した方位は、磁北を示す。
9. 遺構・遺物の略称記号は、次のとおりである。

Gr：グリッド	P：柱穴状遺構	S X：不明遺構
S：礫・石製品	W：杭・木製品	
10. 石材鑑定は羽木伸幸（文化振興課 臨時職員）が、樹種同定についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、結果を報告していただいた。
11. 遺物の実測及び写真撮影は上記の調査員で行った。
12. 本書の執筆・編集は、米田があたったほか、花粉分析と¹⁴C年代測定を川崎地質株式会社島根営業所に委託し、結果を報告していただいた。
13. 出土遺物及び実測図、写真は出雲市教育委員会で保管している。

目 次

序

例 言

目 次

挿図目次

写真図版目次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	
第2節 調査の経過	
第2章 位置と環境	4
第3章 遺跡の概要	8
第1節 遺跡の概要	
第2節 トレンチ調査の概要	
第4章 a区の調査	11
第5章 b区の調査	20
第6章 c区の調査	30
第7章 自然科学分析等結果報告	55
第1節 樹種同定	パリノ・サーヴェイ (株)
第2節 ¹⁴ C年代測定	川崎地質 (株)
第3節 花粉分析	川崎地質 (株)
第8章 まとめ	72
追加資料	79

図 版

挿 図 目 次

第1図	試掘トレンチ配置図	第33図	三田谷 I 遺跡出土縄文・弥生土器
第2図	試掘トレンチ堆積土柱状図	第34図	三田谷 I 遺跡出土円筒埴輪
第3図	三田谷 I 遺跡と周辺の主要遺跡	第35図	円筒埴輪出土分布図
第4図	三田谷 I 遺跡調査区位置図	第36図	三田谷 I 遺跡出土古銭拓影
第5図	トレンチ調査土層断面図		
第6図	a 区遺構配置図及び土層断面図		
第7図	S X 0 1 実測図		
第8図	S X 0 2 実測図		
第9図	杭列実測図	表 1	a 区出土遺物観察表
第10図	a 区出土遺物実測図	表 2	堰堤状施設構築礫の岩種
第11図	b 区遺構配置図及び土層断面図	表 3	b 区出土遺物観察表
第12図	堰堤状施設実測図	表 4	b 区出土木製品一覧表
第13図	堰堤状施設立面図及び土層断面図	表 5	c 区出土遺物観察表
第14図	b 区出土遺物実測図	表 6	c 区出土木製品一覧表
第15図	b 区出土木製品実測図	表 7	円筒埴輪出土一覧表
第16図	c 区遺構配置図及びコンタ図・土層断面図	表 8	杭施設一覧表
第17図	c 区土層断面図 1	表 9	器種毎の樹種一覧表
第18図	c 区土層断面図 2	表 10	天神遺跡第 7 次調査出土木製品器種毎の樹種一覧表
第19図	杭列 1・3 実測図	グラフ 1	杭施設最大径別使用状況
第20図	杭列 2 実測図		
第21図	杭列 4 実測図		
第22図	しがらみ状施設実測図		
第23図	c 区遺構内出土遺物実測図		
第24図	木クズ集中 1～3 出土状況図	第 7 章	第 1 節
第25図	c 区遺構外出土遺物実測図 1	表 1	樹種同定結果
第26図	c 区遺構外出土遺物実測図 2		第 2 節
第27図	N～Q-30～32Gr内遺物出土状況図	図 1	試料採取位置
第28図	26-18墨書拡大図	表 1	¹⁴ C年代
第29図	c 区遺構外出土遺物実測図 3		第 3 節
第30図	c 区出土木製品実測図	図 1	試料採取位置図
第31図	杭列 4 出土木製品実測図 1	図 2	花粉ダイアグラム
第32図	杭列 4 出土木製品実測図 2		

写真図版目次

- 卷頭 1 三田谷 I 遺跡出土墨書土器
 a 区 空撮 東より
 卷頭 2 b 区 空撮 西より
 b 区 堰堤状施設 空撮
 卷頭 3 c 区 空撮 北より
 c 区 空撮 南より

 第 7 章 図版
 図版 1 木材 (1)
 図版 2 木材 (2)
 図版 3 木材 (3)
 図版 花粉化石顕微鏡写真

 追加資料
 図版 三田谷 I 遺跡出土古銭

 図版 1 a 区遺構外出土朱塗り土師器 内面
 〃 〃 〃 外面
 b 区出土遺物 内面
 〃 〃 〃 外面
 c 区しがらみ状施設出土青磁
 c 区遺構外出土磁器及び青磁
 図版 2 c 区遺構外出土遺物 1 内面
 〃 〃 〃 外面
 c 区遺構外出土遺物 2 内面
 〃 〃 〃 外面
 図版 3 a 区西壁南北土層断面
 a 区東壁南北土層断面
 a 区南壁東西土層断面 (8-9 ライン)
 図版 4 b 区 X X' 土層断面
 b 区 Y Y' 土層断面北側
 b 区 Y Y' 土層断面南側
 図版 5 b 区トレンチ調査 (T9) による
 堰堤状施設検出状況
 b 区 B B' 土層断面 22 層
 c 区南壁東西土層断面上位東側
 図版 6 c 区南壁東西土層断面上位西側
 c 区南壁東西土層断面下位中央
 c 区北壁東西土層断面
 図版 7 c 区 V ~ Y Gr 1 段めの地山検出状況
 c 区 R ~ U Gr 1 段めの地山検出状況
 c 区 N ~ Q Gr 1 段めの地山
 及び杭列 1 検出状況
 図版 8 a 区完掘状況
 a 区西側旧河道への落ち際
 a 区東側旧河道への落ち際
 図版 9 a 区 S X 0 1 検出状況
 a 区 S X 0 1 完掘状況
 a 区 S X 0 2 完掘状況
 図版 10 a 区杭列検出状況
 a 区調査風景
 b 区堰堤状施設検出状況 (北より)
 図版 11 b 区堰堤状施設検出状況 (南より)
 b 区木製品出土状況 1
 b 区木製品出土状況 2
 図版 12 b 区堰堤状施設調査状況 (北より)
 b 区堰堤状施設断ち割り調査状況
 (北より)
 b 区堰堤状施設断ち割り調査状況
 (南東より)
 図版 13 b 区堰堤状施設大礫石積み状況
 (東より)
 b 区堰堤状施設木杭 1・木杭 2 検出状況
 b 区東壁際堰堤状施設大礫調査状況

- | | | | |
|------|----------------------------|------|------------------|
| 図版14 | c 区完掘状況 | 図版24 | c 区遺構外出土遺物 9 |
| | c 区北側完掘状況 | | c 区遺構外出土遺物10 |
| | c 区中央完掘状況 | | c 区遺構外出土遺物11 |
| 図版15 | c 区南側完掘状況 | | c 区出土墨書土器 |
| | c 区杭列 1 検出状況 | | c 区遺構外出土遺物12 |
| | c 区しがらみ状施設検出状況 (全景) | 図版25 | c 区遺構外出土遺物13 |
| 図版16 | c 区しがらみ状施設検出状況 (近景) | | b・c 区出土円筒埴輪 外面 |
| | c 区しがらみ状施設検出状況 (接写) | | 〃 内面 |
| | c 区しがらみ状施設検出状況 (接写) | 図版26 | a・c 区遺構外出土土錘・石製品 |
| 図版17 | c 区杭列 4 板材出土状況 | | c 区遺構外出土石製品 |
| | c 区杭列 3・木クズ集中 1 検出状況 | | c 区遺構外出土鉄製品 |
| | c 区完掘状況 (南より) | 図版27 | b 区出土木製品 1 表面 |
| 図版18 | c 区完掘状況 V Gr より北向きに | | 〃 裏面 |
| | c 区完掘状況 (N~Q Gr) 南より | 図版28 | b 区出土木製品 2 表面 |
| | c 区 N~Q Gr 内旧河道遺物出土状況 | | 〃 裏面 |
| 図版19 | c 区 N~Q Gr 内旧河道遺物出土状況 | | b 区出土木製品 3 表面 |
| | c 区調査風景 | | 〃 裏面 |
| | c 区調査風景 | 図版29 | b 区出土木製品 4 表面 |
| 図版20 | a 区 S X 0 2 及び遺構外出土遺物 1 外面 | | 〃 裏面 |
| | 〃 内面 | | b 区出土木製品 5 表面 |
| | a 区遺構外出土遺物 2 外面 | | 〃 裏面 |
| | 〃 内面 | | c 区出土木製品 1 表面 |
| 図版21 | a 区遺構外出土遺物 3 | | 〃 裏面 |
| | a 区遺構外出土遺物 4 | 図版30 | c 区出土木製品 2 表面 |
| | c 区杭列 3・しがらみ状施設出土遺物 外面 | | 〃 裏面 |
| | 〃 内面 | | c 区出土木製品 3 表面 |
| | c 区遺構外出土遺物 3 | | 〃 裏面 |
| 図版22 | c 区遺構外出土遺物 4 外面 | 図版31 | c 区出土木製品 4 表面 |
| | 〃 内面 | | 〃 裏面 |
| | c 区遺構外出土遺物 5 外面 | | c 区出土木製品 5 表面 |
| | 〃 内面 | | 〃 裏面 |
| | c 区遺構外出土遺物 6 | | c 区杭列 4 出土杭 表面 |
| 図版23 | c 区遺構外出土遺物 7 外面 | | 〃 裏面 |
| | 〃 内面 | | c 区杭列 4 出土板材 |
| | c 区遺構外出土遺物 8 | | |

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

平成10(1998)年7月1日、出雲市道路河川課より、斐伊川放水路事業関連周辺地域整備事業としての塩冶299号線道路新設工事予定地内における埋蔵文化財の有無についての照会を受けた。事業予定地内は、斐伊川放水路事業に伴い平成6(1994)年度から島根県埋蔵文化財調査センターにより継続的に調査が進められている三田谷I遺跡の範囲内であるため、試掘調査を実施することとした。

試掘調査は、同年7月23・24日に計8ヶ所(T1～T8)のトレンチを設定して行った(第1図)。その結果、神戸川からの支流が三田谷に流れ込む旧河道を確認することができた。遺物はT7・8を除く全てのトレンチで、須恵器・土師器が出土した。

また当該地の土質は崩れやすい上、調査区幅5mと非常に狭いため、全体を平面的に深く掘り下げることが非常に困難な状態であることがわかり、同年7月末、島根県教育委員会と調査方法について協議した結果、遺物包含層及び遺構面が比較的浅い部分については平面的な調査(a～c区)を行い、その他の部分については必要箇所にはトレンチを設定し、重機掘削による部分的な調査を行うこととなった。

この結果を踏まえ、事業者である道路河川課と出雲市教育委員会が協議し、平成10(1998)年10月より発掘調査を実施することで合意した。

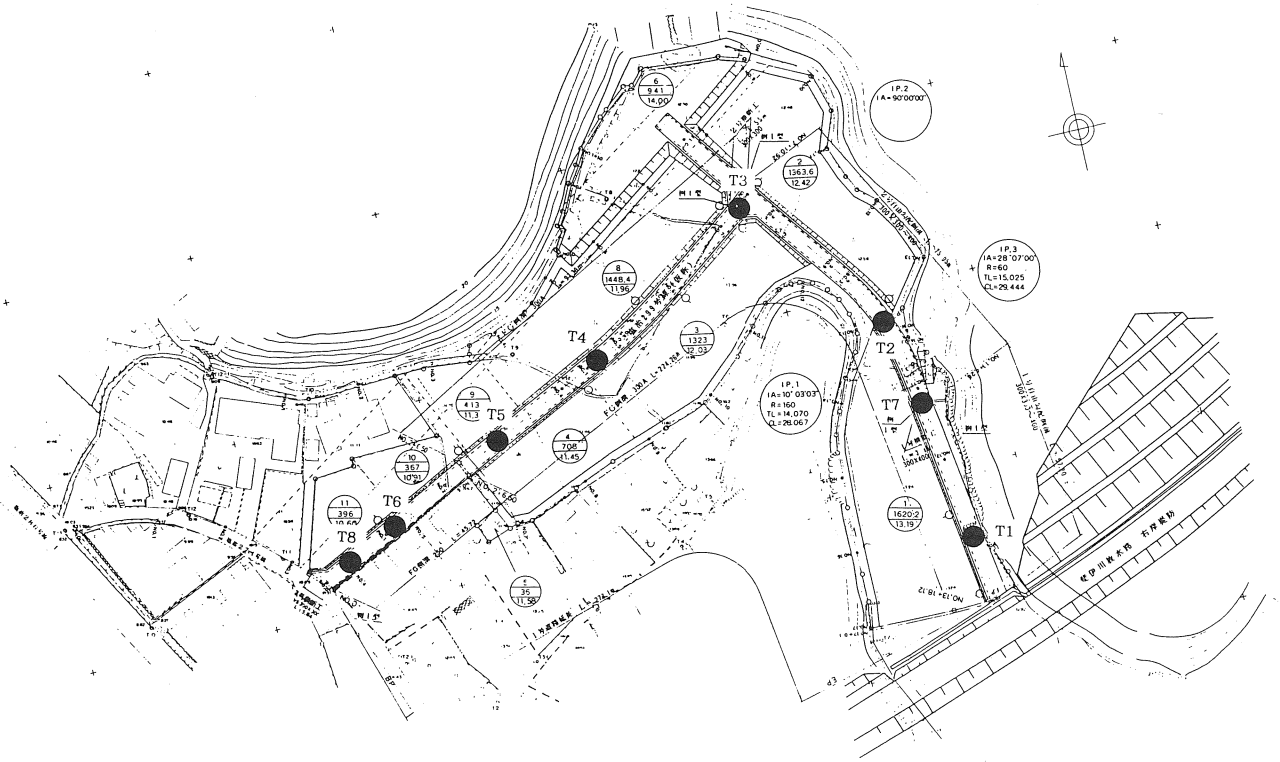
第2節 調査の経過

新設の塩冶299号線道路予定地内はL字状を呈しているため、西側より道路中央線を軸として利用し、碁盤の目状にグリッドを設定した。そのためa区はB・C-2～10Gr、b区はK・L-32・33Gr、c区はN～P-31・32Gr、Q～S-30・31Gr、T～U-29・30Gr、V～Y-28・29Grのように変則的な調査区設定となってしまった。

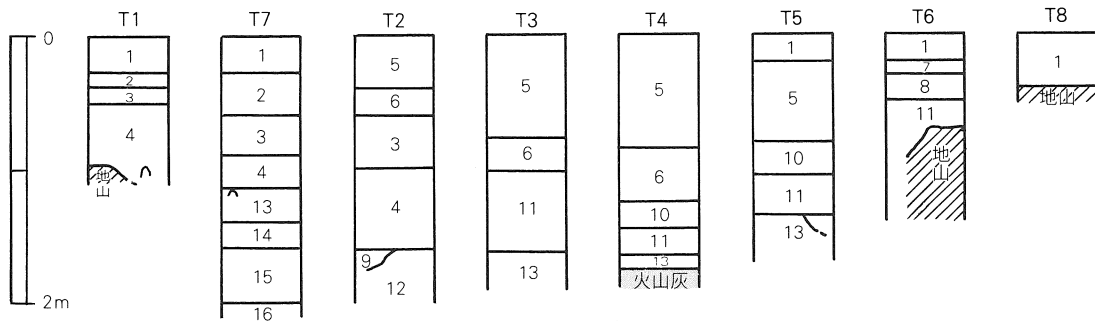
調査は10月5日から開始とし、c区より始めるため、作業小屋のあるa区までの道を仮設した。

c区は権現山側壁面南北土層及び、南壁面東西土層、R・Vライン壁面東西土層、北壁面東西土層を観察しつつ、1層ずつ下げていった。4層を下げた時点で権現山から続く地山が調査区南側より現れ始めた。10月26日にはX28Gr内より2枚の板材が出土した。以後何らかの木製施設が多数出土するであろうと予想をしていたが、この板材の他に杭列4基、12月9日にはしがらみ状施設1基を検出したにとどまった。当区は権現山の山裾が、地山の軟弱なところは段々状に、地山が岩盤になっているところは急傾斜となり、三田谷の旧河道底へと続くことを確認した。調査区幅約5mで最深3m^{注1}まで調査をしたため、ベルトコンベヤの移動に、またベトベトの泥でベルトコンベヤの修理に手間がかかり、予定期間を大幅に超過してしまった。

12月14～21日にはc区調査と並行してトレンチ調査(T9～T13)を実施した。トレンチはc区からa区に向けて計5本(第4図)開け、土層を確認するものであった。c区調査が遅れていたため、



第1図 試掘トレンチ配置図 (工事用図面) S = 1/2000



- | | |
|--------------------------------|--|
| 1層 現耕作土 | 10層 暗灰褐色粘土 (植物の褐色帯が3枚ぐらい観察できる) |
| 2層 褐灰色粘質土 (砂粒子含む、4層より褐色強い) | 11層 暗褐灰色粘土 (砂粒子あまり含まない) |
| 3層 青褐灰色粘質土 (砂粒子2・4層より多く含む) | 12層 淡褐灰色砂質土 (流水層) |
| 4層 褐灰色粘質土 | 13層 暗灰褐色粘質土 (流水層、砂粒子かなり多く含む、12層と対応すると思われる) |
| 5層 現湿地 | 14層 暗灰褐色粘質土 (13層と比して砂粒子なくなりソフト) |
| 6層 褐灰色粘質土 (かなり粘性強い、砂粒子あまり含まない) | 15層 暗灰褐色粘土 (10層より暗い、葉状の植物を含む) |
| 7層 褐灰色砂質土 | 16層 淡黄褐色粘質土 (流水層、砂粒子多く含む) |
| 8層 褐灰色粘質土 | |
| 9層 灰褐色粘質土 (黄褐色ブロック含む) | |

第2図 試掘トレンチ堆積土柱状図

b区をこのトレンチ調査1本で終えようとたくらんでいたものの、初日の1本目(T9)に重機を入れると、人頭大の礫が積み重なった状態で見事に土層断面にひっかかって検出された。応急処置としてシートを被して埋め戻した。他の4本は流水層を確認したところで、崩壊の恐れがあるために終了した。

12月21日には、a区を造成し道として利用していた土を重機掘削した。

調査も年越しをしてしまい、年明け早々にc区の一部が崩壊したため、最終段階に入っていたがピッチを上げ、1月12日にc区の空撮を終え、図面を残すのみとした。

1月13日にb区の、1月14日にa区の調査を同時開始した。

b区は、礫が検出される面まで重機で掘削し、人力による調査を開始した。礫面をきれいに出した状況で礫施設の軸を設定し、平面・縦断面の調査に着手した。

a区は調査区南壁面東西土層、2・7・11ライン南北土層を観察しつつ、1層ずつ掘り下げた。中央以西から灰色砂の地山が確認され、それが東側と西側へ落ち込む状況が検出できた。当区の南側はコンクリートブロックをはさんで民家が直にあるため、旧河道跡は現地表面より約1mの深さまで調査し、3月2日に空撮をして終了とした。

残りb区に主力を投じた。権現山と浄福寺のある丘陵間で最も狭い位置を占めていることと、まわりの層が粘土質で耐水状態にあったことなどを考慮すると、当区にあるこの礫施設は堰堤状施設であろうということとなった。3月終末期までには何とか形となる調査をし、無事終了した。

この間、c区の南隣を平成6年度に調査された鳥谷氏、平成9・10年度に権現山の反対側の地区を調査された熱田氏にも現地を訪れていただき、b・c区で沼地と判断した17層、旧河道と判断した18・19層^{注2}を同様に確認していただいた。

注1 当調査区は道路新設工事のためのものであり、調査区幅5mという制限があることと、道路工事では3m以上深く壊されることはないであろうということを前提に、旧河道である層を確認できた段階での最深3mで調査を終了させた。

注2 詳細は「第6章 c区の調査」に記載

第2章 位置と環境

三田谷 I 遺跡は、出雲市中心地域から南へ約 2 km、神戸川が山間部から平野に出た付け根の丘陵部で、神戸川の支流が三田谷の奥へと入り込んだ位置に所在する。

出雲平野は、斐伊川とこの神戸川による沖積作用によって形成された平野である。約 6～5 千年前頃の縄文時代から徐々に沖積作用が働き、それによって形成された自然堤防、その後背湿地となる沼沢地がいたる所に広がった景観は、風土記の時代までも続いていたようである。

縄文時代から弥生時代にかけて急激な沖積作用により、早くから自然堤防の発達していた矢野遺跡では、平野中央部では希である縄文時代後・晩期から集落が形成され、古墳時代初頭まで連綿として遺跡が続いている。そこから南に位置する蔵小路西遺跡では縄文時代晩期の生活跡が見つまっている。そのまた南に位置する善行寺遺跡からは旧河道らしき跡から縄文時代晩期の遺物が出土している。また海岸砂丘上に立地している上長浜貝塚からは縄文時代早期末の、丘陵部に位置する三田谷 I 遺跡^{注1}からも縄文時代後・晩期の遺物が出土している。

出雲平野に遺跡が急増するのは弥生時代中期中葉からである。自然堤防に立地する白枝荒神遺跡・天神遺跡・古志本郷遺跡・下古志遺跡^{注2}・田畑遺跡・知井宮多聞院遺跡などは、ほぼ同時期から集落を営んでいる。なかでも天神・古志本郷・下古志・田畑遺跡では多重環濠の様相を見せ、出雲平野における集落の在りように一石を投じている。また后背湿地に立地する藤ヶ森南遺跡ではほぼ同時期の水田跡を検出している。

後期中葉、西谷丘陵に築かれた四隅突出型墳丘墓は、この出雲平野に巨大な権力者の存在を、また権力者を中心に集落が発展してきたであろうことを想像させる。

これらの遺跡に遅れて集落を築くのは、山持川川岸遺跡・姫原西遺跡などである。しかし前記した集落も後記した集落も、一部を除き古墳時代初頭にはほぼ姿を消してしまう。

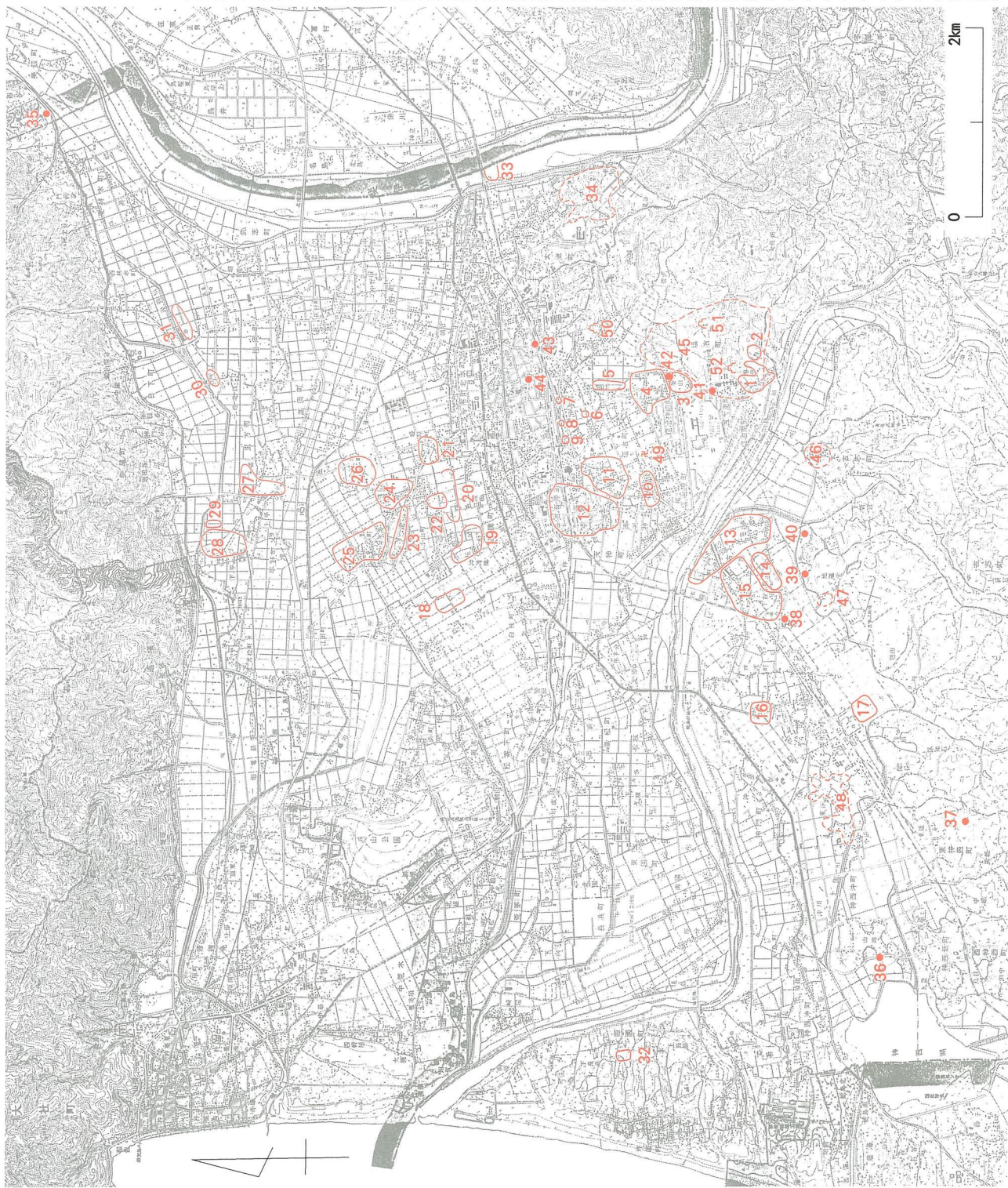
これ以後の出雲平野は前期末に大寺古墳・山地古墳、中期に北光寺古墳など、築かれた古墳は数少ない。このように一時衰退したかのように見えた出雲平野も、後期になると今市大念寺古墳・妙蓮寺山古墳・上塩冶築山古墳などの大型古墳を含む多数の古墳・横穴墓が築かれるようになる。

この時期の集落としては、三田谷 I 遺跡の丘陵部分^{注3}及び出雲平野西部の浅柄遺跡^{注4}が最近の調査で明らかとなった。

律令期の出雲平野は、天平 5 (733) 年に作成された『出雲国風土記』に記載されているように、鳥上山より流れ西流して神門水海に入る出雲大川即ち斐伊川と、琴引山より流れ神門水海に入る神戸川に挟まれた肥沃な土地に恵まれ、神門水海は現在の高松・長浜地区周辺を覆う地域を占し、菌の松山とよばれた現在の園の長浜によって潟湖を形成していた。弥生時代中期に集落が急激に増加したのは、このような肥沃な土地が現れたためでもあろう。

出雲平野は、『出雲国風土記』によると、出雲郡と神門郡にあたる。神門郡家に比定されているものには、墨書土器・緑釉陶器・大型の掘立柱建物跡などを検出した天神遺跡、墨書土器・緑釉陶器・円面硯・腰帯の金具・大型建物跡群などを検出した古志本郷遺跡などがある。また神門郡新造院の比

1. 三田谷 I 遺跡
2. 三田谷 II・III 遺跡
3. 築山遺跡
4. 宮松遺跡
5. 角田遺跡
6. 藤ヶ森南遺跡
7. 藤ヶ森遺跡 I 地点
8. 藤ヶ森遺跡 II 地点
9. 善行寺遺跡
10. 原遺跡
11. 高西遺跡
12. 天神遺跡
13. 古志本郷遺跡
14. 田畑遺跡
15. 下古志遺跡
16. (正連寺周辺遺跡)
17. 知井宮多聞院遺跡
18. 浅柄遺跡
19. 白枝荒神遺跡
20. 渡橋沖遺跡
21. 藤小路西遺跡
22. 姫原西遺跡
23. 小山遺跡第1地点
24. 小山遺跡第2地点
25. 小山遺跡第3地点
26. 矢野遺跡
27. 大塚遺跡
28. 高浜 I 遺跡
29. 高浜 II 遺跡
30. 里方八石原遺跡
31. 山特別所遺跡
32. 山特別所遺跡
33. 上長浜貝塚遺跡
34. 斐伊川鉄橋遺跡
35. 西谷墳墓群
36. 大寺古墳
37. 山地古墳
38. 北光寺古墳
39. 宝塚寺古墳
40. 妙蓮寺古墳
41. 放打山古墳
42. 上塩冶築山古墳
43. 今市大念寺古墳
44. 塚山古墳
45. 上塩冶横穴墓群
46. 井上横穴墓群
47. 地蔵堂横穴墓群
48. 神門横穴墓群
49. 神門寺境内廃寺
50. 大廻城 (向山城)
51. 大井谷城
52. 半分城



第3図 三田谷 I 遺跡と周辺の主要遺跡

定地である神門寺境内廃寺、八野郷の比定地である矢野遺跡などもある。

中世には、鷹ヶ巣城・大廻城（向山城跡）・大井谷城・半分城などが築城されたほか、平野部では、矢野遺跡・蔵小路西遺跡・渡橋沖遺跡・下古志遺跡などで館跡が検出され当時の状況が明らかとなりつつある。また三田谷 I 遺跡^{注5}からは特殊遺構として土師器の焼成土坑などが検出されている。

注1 平成6・7年度島根県教育委員会調査地区

注2 平成7～9年度出雲市教育委員会により発掘調査を行った。

注3 平成8・9年度島根県教育委員会調査地区

注4 平成10・11年度出雲市教育委員会により発掘調査を行った。

注5 注3と同じ

参考文献

川上 稔『古志地区遺跡分布調査報告書』1998 出雲市教育委員会

川上 稔『神門地区遺跡詳細分布調査報告書』1989 出雲市教育委員会

川上 稔「古志本郷遺跡」『出雲市埋蔵文化財調査報告書第4集』1994 出雲市教育委員会

川上 稔・西尾克己「角田遺跡」『出雲市埋蔵文化財調査報告書第5集』1995 出雲市教育委員会

岸 道三「善行寺遺跡」『出雲市埋蔵文化財調査報告書第7集』1997 出雲市教育委員会

川上 稔・岸 道三「角田遺跡」『出雲市埋蔵文化財調査報告書第8集』1998 出雲市教育委員会

川上 稔・松山智弘『出雲健康公園整備プロジェクト事業に伴う 矢野遺跡第2地点発掘調査報告書』
1991 出雲市教育委員会

川上 稔『上長浜貝塚』1996 出雲市教育委員会

川上 稔『山持川川岸遺跡』1996 出雲市教育委員会

岸 道三・川上 稔・米田美江子『出雲市駅付近連続立体交差事業地内 天神遺跡第7次発掘調査報告書』1997 出雲市教育委員会

米田美江子・三原一将『市道松寄下小山線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 白枝荒神遺跡』
1997 出雲市教育委員会

岸 道三『J R山陰本線・私鉄一畑電鉄連続立体交差事業地内 藤ヶ森遺跡（I地点・II地点）発掘調査報告書』1998 出雲市教育委員会

米田美江子『出雲郵便局移転に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 藤ヶ森南遺跡』1999 出雲市教育委員会

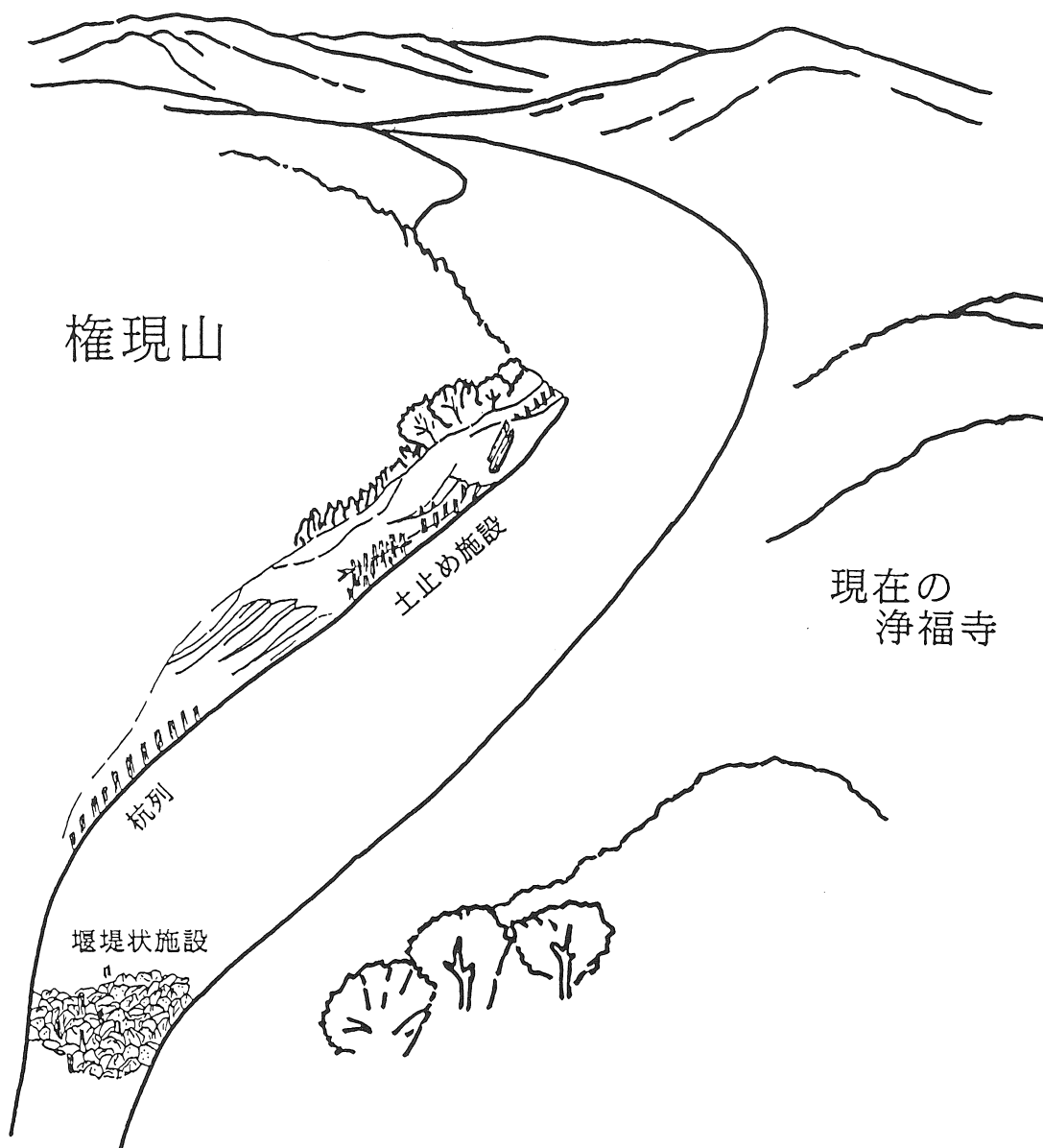
今岡一三「三田谷 I 遺跡」『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書V』1999 島根県教育委員会

平石 充「古志本郷遺跡 I」『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書VI』1999 島根県教育委員会

足立克己「姫原西遺跡」『一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告1』1999 島根県教育委員会

- 間野大丞「蔵小路西遺跡」『一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告2』1999
 島根県教育委員会
- 大庭俊次「渡橋沖遺跡」『一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告3』1999
 島根県教育委員会
- 出雲市教育委員会『出雲市遺跡地図』1993
- 出雲市教育委員会『遺跡が語る古代の出雲—出雲平野の遺跡を中心として—』1997
- 西尾克己・大國晴雄「出雲平野の古墳」『出雲市民文庫9』1991 出雲市教育委員会
- 加藤義成『修訂 出雲国風土記参究』1981

古代の三田谷



第3章 遺跡の概要

第1節 遺跡の概要

a区は、三田谷への入り口に位置しており、旧河道の南岸の一部を検出した。地山の検出標高は10.4～10.6mである。河道へは、地山から東西ともに緩やかに傾斜し深くなっていく。地山上では若干の遺構を検出したがその性格を掴むことはできなかった。また5層に関しては、砂粒子・青くされ石^{注1}碎が帯状に混入している層であり、洪水層であったとの指摘を受けた^{注2}。B9～C8Grにかけての杭列は、この洪水層が埋まったのちか、3層中に打ち込まれたものである。おそらく畦畔に付随するものであろう。また3・5・14層中からは、縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての土器片6点が出土した。検出レベルは深くても標高10m位である。

b区は三田谷旧河道の最も狭まった位置を占めており、そこに堰堤状施設が検出された。調査区範囲内での調査のため浄福寺側の丘陵地まで延びているかは、現状では確認できないが、おそらくはこの三田谷途中に堰堤を築き、水流を止めていたものと考えられる。中村氏により礫の岩種を調べてもらった結果^{注3}、70%以上は三田谷の中で採取可能なものであり、その他の岩石は神戸川からの河原で採取可能なものであるという。

c区は権現山裾にあたり、緩やかに、または急激に三田谷の旧河道へ地山が落ちていく状況が観察され、杭列1～4、しがらみ状施設1などを検出した。また堆積土は、旧耕作土の下（7～12・14～16層）では低湿地状を、その下の17層では沼地状を、その下の18・19層では旧河道（流水層）であることを確認した。

注1 権現山の岩盤である凝灰岩と砂岩が、地下水内での還元的な状況での風化により青色を呈したものを、俗して青くされ石と呼称する。

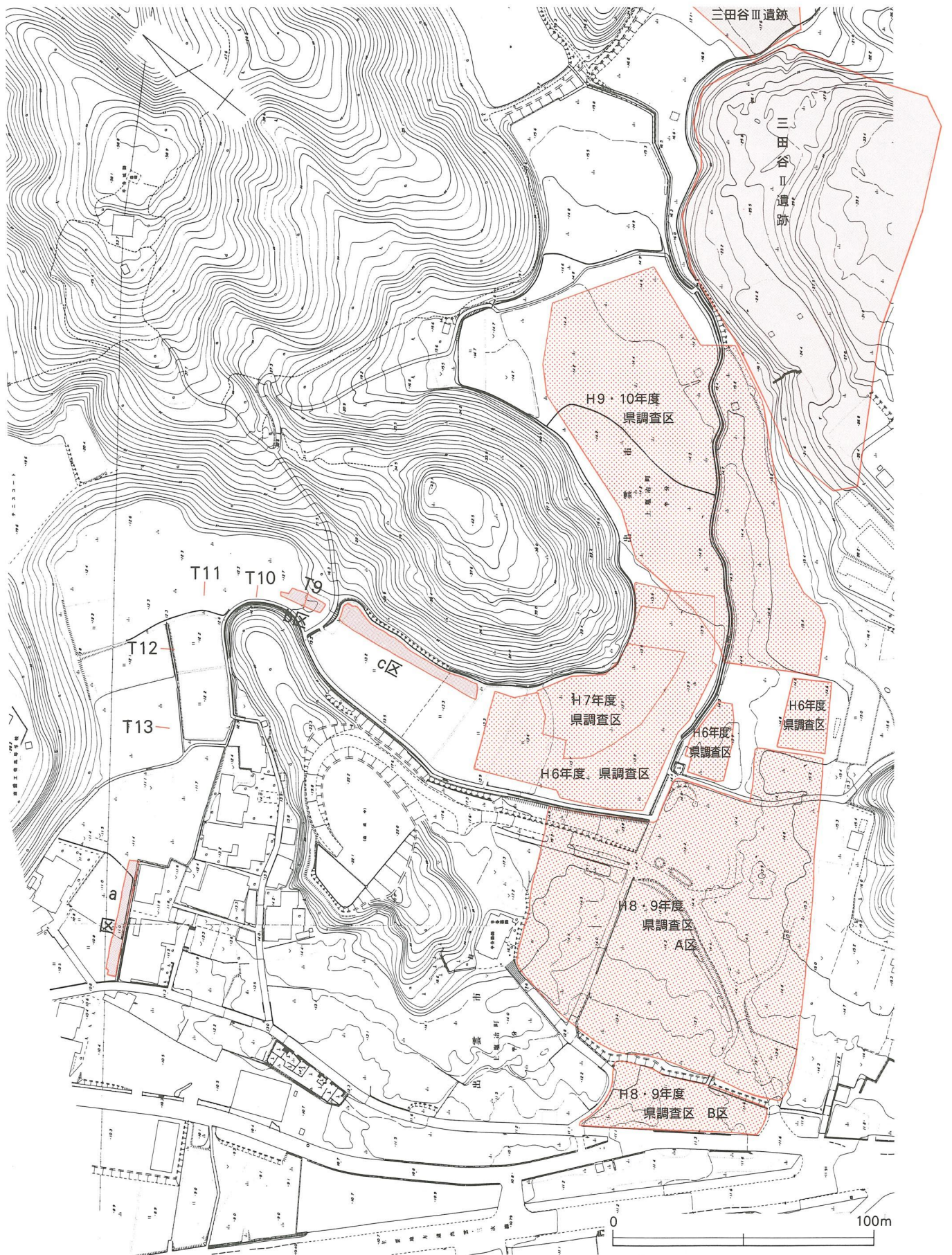
注2 中村唯史氏よりご指摘いただいた。

注3 詳しい結果は、「第5章 b区の調査」に記載

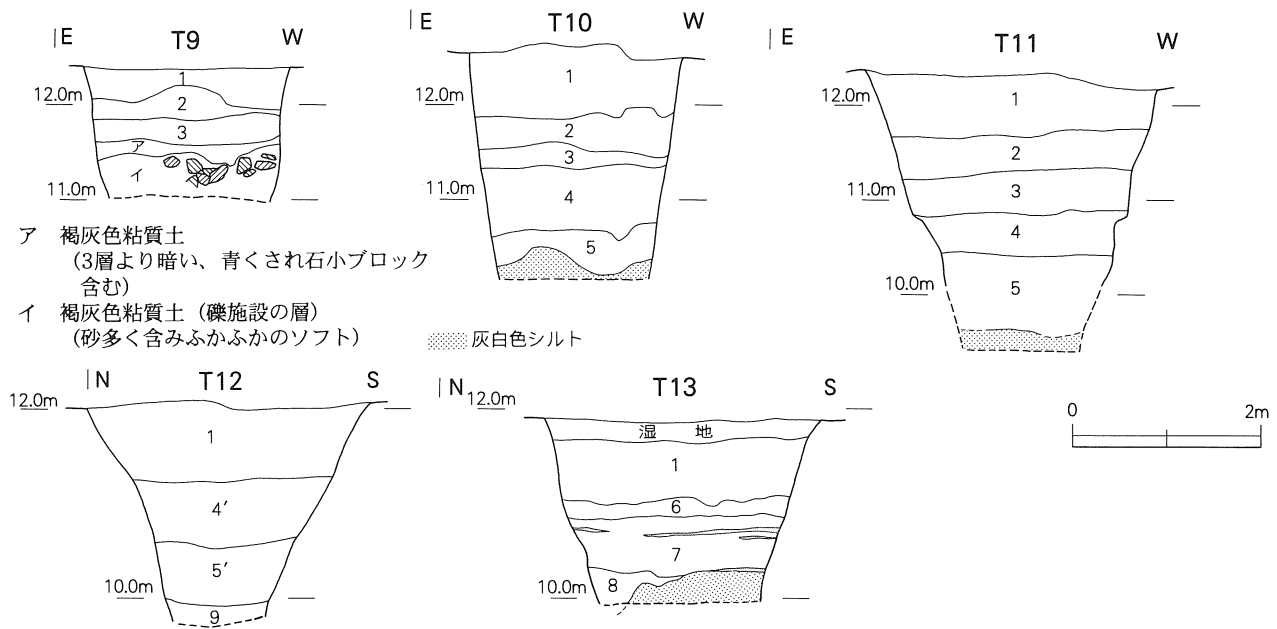
第2節 トレンチ調査の概要

本調査域内でa区とc区の間、5本のトレンチを掘り、土層を確認した。試掘調査のトレンチとだぶらないように、南からT9～T13（第4図）とした。土層はトレンチの南及び東壁面で確認した（第5図）。現耕作土上面レベルからもわかるように、三田谷の奥へ行くほど標高が高くなり、入り口側であるa区が低く自然傾斜している。

T9を除き、火山灰層と考えられる灰白色シルト層を目安にそれぞれ2m強を掘削した。T12のみ



第4図 三田谷Ⅰ遺跡調査区位置図 (S = 1/2000)



- 1 層 橙灰褐色粘質土 (旧耕作土)
- 2 層 褐灰色粘質土 (砂粒子含む)
- 3 層 褐灰色粘質土 (青くされ砂粒子混入、砂が層をなす)
- 4 層 暗褐灰色粘質土 (上位の方には青くされ砂粒子含む、砂粒子がマーブル状に粘質土に入り込む)
- 4' 層 5層と土色あまり変化なく明るい
- 5 層 明褐灰色粘質土 (かなり多量の砂粒子を含みソフト)
- 5' 層 砂質部分がかなりハード
- 6 層 褐灰色粘土
(砂粒子若干含む、所々暗褐色の部分あり)
- 7 層 明褐灰色粘土 (4層と対応するかも)
(植物質を含んだ腐食土の薄い層が何枚も確認できる)
- 8 層 明褐灰色砂層 (5層と対応するかも)
(わずかに土混じり)
- 9 層 明褐灰色粘質土 (5'層と基本的には同じだが、砂粒子ほとんど含まず粘性強)

第5図 トレンチ調査土層断面図 (S = 1/80)

は旧河道の中央位置にあたるのか2 m以上掘削しても灰白色シルト層を確認することができなかった。この灰白色シルト層の上には基本的にソフトな粘土層が載っている。T13で見られるように灰白色シルト層から落ち込む層は、砂層である。これら5～7・9層と8層は、c区で確認している沼地状(c区17層)と旧河道(c区18・19層)にそれぞれ対応すると考えられる。

T9のイ層はかなりソフトな粘土に近い層であったため、当初は、石組みの井戸を廃棄した遺構であると想定した。堰堤状施設の北はずれであり、このイ層はb区の19層に対比すると考えられる。

第4章 a区の調査

a区(第6図)は、現在の耕作土である1層が全体を覆い、それより若干古手の耕作土である8層及び16層が、底面標高東側で10.6m～西側で10.4mに堆積している。その下には、腐植土である3・4・10・11・17層が堆積し、その下B・C-3～5Grにおいて地山を検出した。標高は10.5～10.4mである。地山から西側旧河道へは14・20～22層の砂及び砂質土が堆積している。また東側へは、洪水層と考えられる5層、粘土の6層、砂層の7層が堆積する。6層と7層は、後述する^{註1}がc区で検出し沼地と比定した17層、旧河道に比定した18・19層に対応する可能性がある。

以下、若干の遺構の詳細と出土遺物について述べる。

SX01 (第7図)

B・C-4Gr内、標高10.35mで検出した。長辺272cm、短辺70cm、深さ55cm、N-11°-Eのほぼ長方形を呈している。そのため当初は墓跡と想定し調査したが、出土遺物は皆無で施設もなく、そのうち湧水し、柔軟な地山であるため壁が崩壊し始めた。立ち上がりは直立している。南辺はピット状遺構に切られている。時期・性格は不明である。

SX02 (第8・10図)

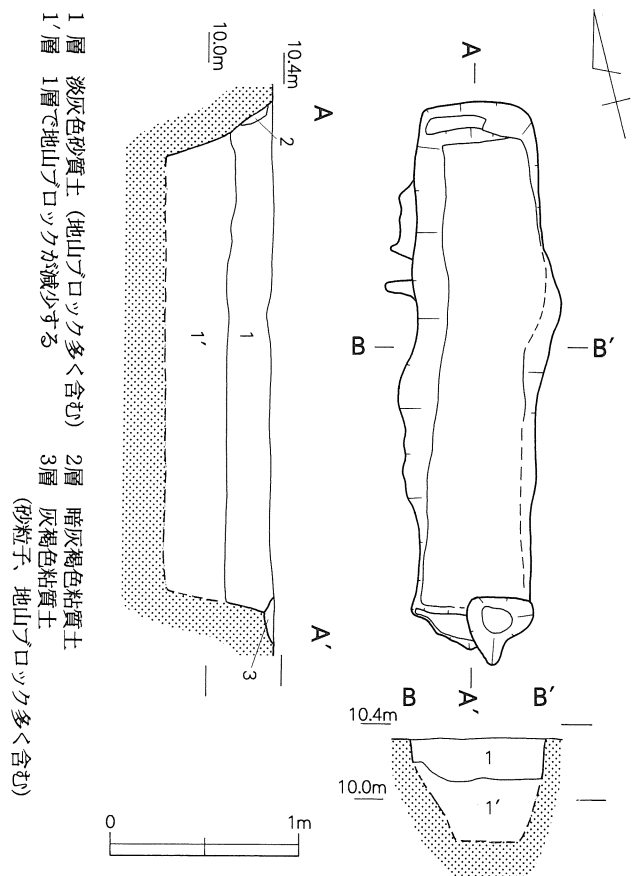
B-3・4Gr内、標高10.4m、調査区北壁沿いに検出した。ほとんどが調査区外なので全容は不明であるが、現存長556cm、現存幅10～100cm、深さ2～42cm、現状では東西方向に長軸あり。

緩やかな浅い立ち上がりであるが、ところどころ凹凸があり、やや東寄りにピットが1基掘り込まれている。

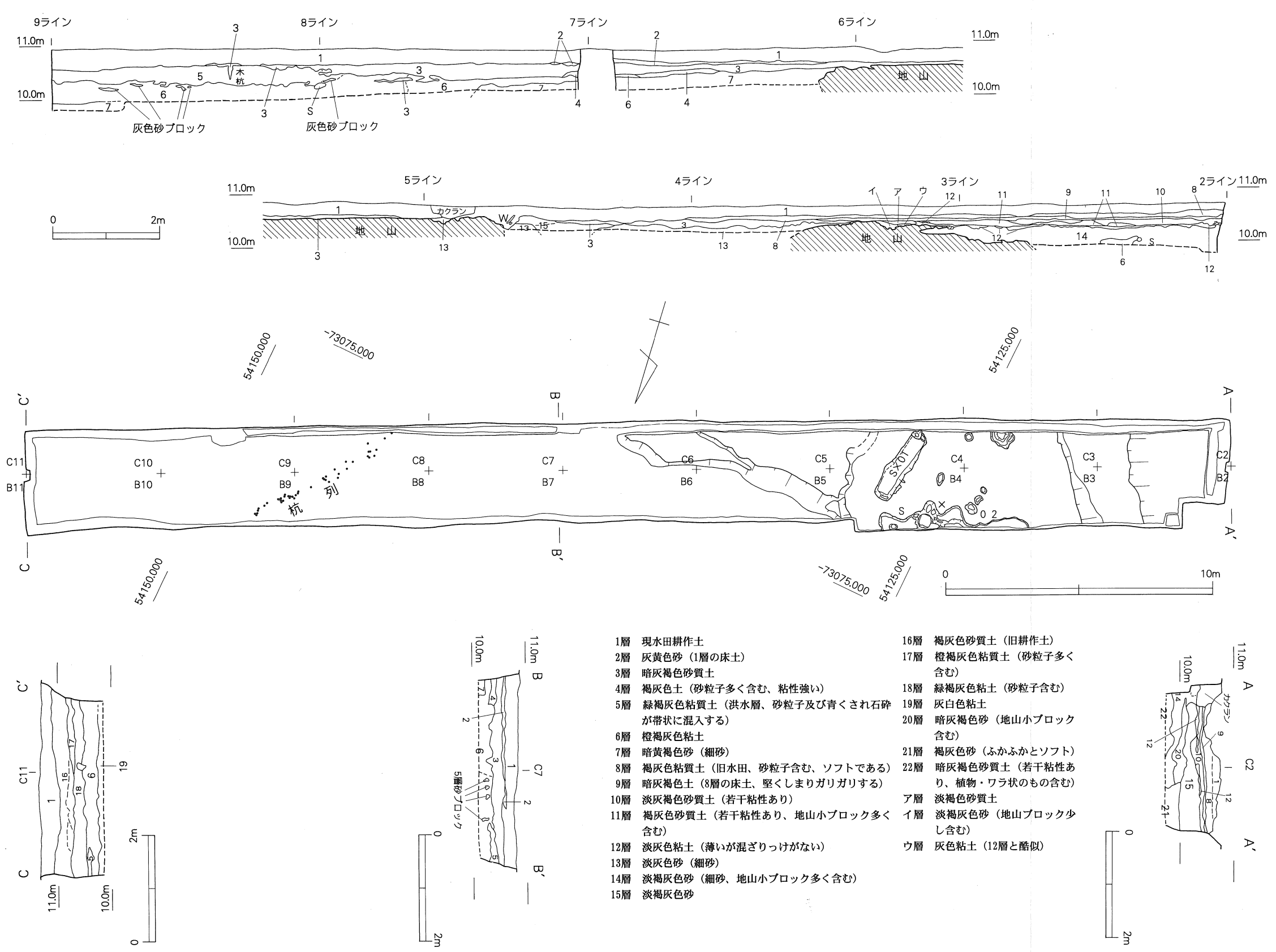
出土遺物は、土師器・須恵器の小片がほとんどである。10-1は須恵器の壺口縁部である。厚手なのでやや大型のものと考えられる。1条の削り出し突帯文をめぐらし、内面には自然釉がかかる。

杭列 (第9図)

B・C-8、B9Gr内、標高10.45mで検出し始めた。N-44°-E方向に無造作に打ち込まれたような杭ではあるが列をなしている。杭の現存長は15～52cmである。第6図の東西土層断面図8ライ



第7図 SX01実測図 (S=1/40)



第6図 a区遺構配置図 (S=1/160) 及び土層断面図 (S=1/80)

ンの東寄りに杭跡を検出しているが、それから判断すると5層が埋まったのちか、3層が堆積している最中に打ち込まれたものと考えられる。おそらく畦畔に付随するものであろう。

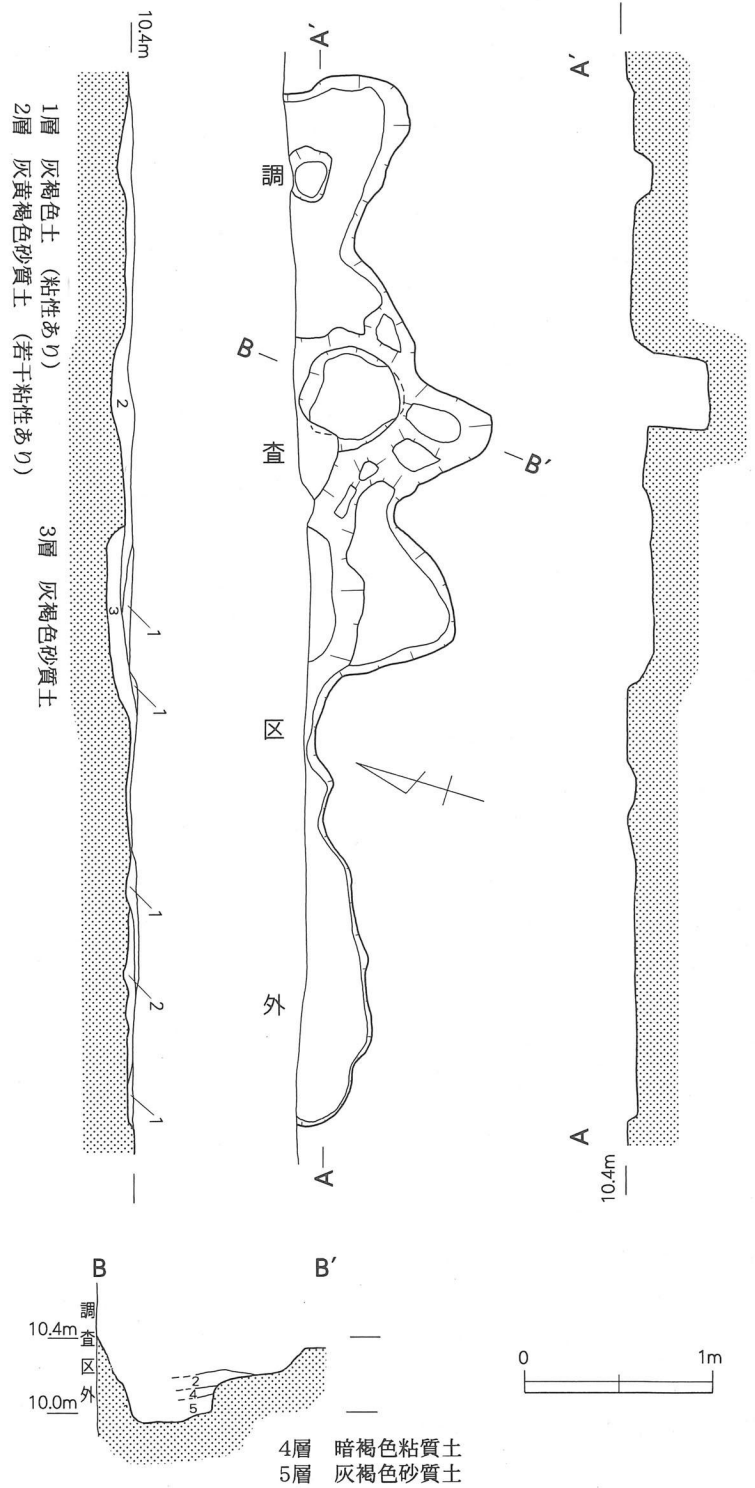
杭列に伴うと判断される遺物は皆無である。

遺構外出土遺物 (第10図)

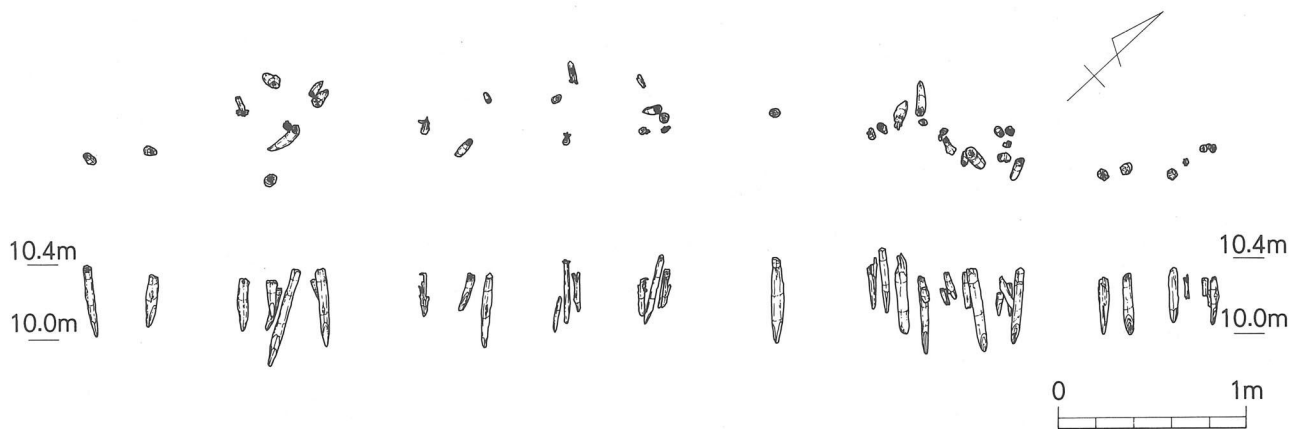
現耕作土からは10-2・3が出土した。2は土師器の坏である。薄手で口縁部が強く内湾し全体に丸みを帯びている。内外面とも朱塗りを施し、内面には暗文らしき痕跡がある。3は蠟石製?で直方体に全面研磨して仕上げている。扁平な面の中央に穿孔を施す。用途は不明である。

3層からは須恵器・土師器を中心に若干の陶磁器類が出土している。10-4・5は弥生前期土器と考えられる資料である。4はあまり厚手ではないが胎土に4mm大の砂粒子を含む。5は直立ぎみの胴部から外反する口縁部へと続き、頸部には3条以上のヘラ描きの平行沈線文を施す。10-6は土師器の高坏の坏部と思われるもので、直線的に立ち上がる破片である。内外面とも朱塗りを施し、内面には暗文を施す。10-7~9は須恵器の坏類である。7は底部で、緩やかな立ち上がりを見せる。8は高台付きの底部で、小さめの高台は外縁寄りに付く。9は器高のやや高い宝珠状の蓋のつまみである。

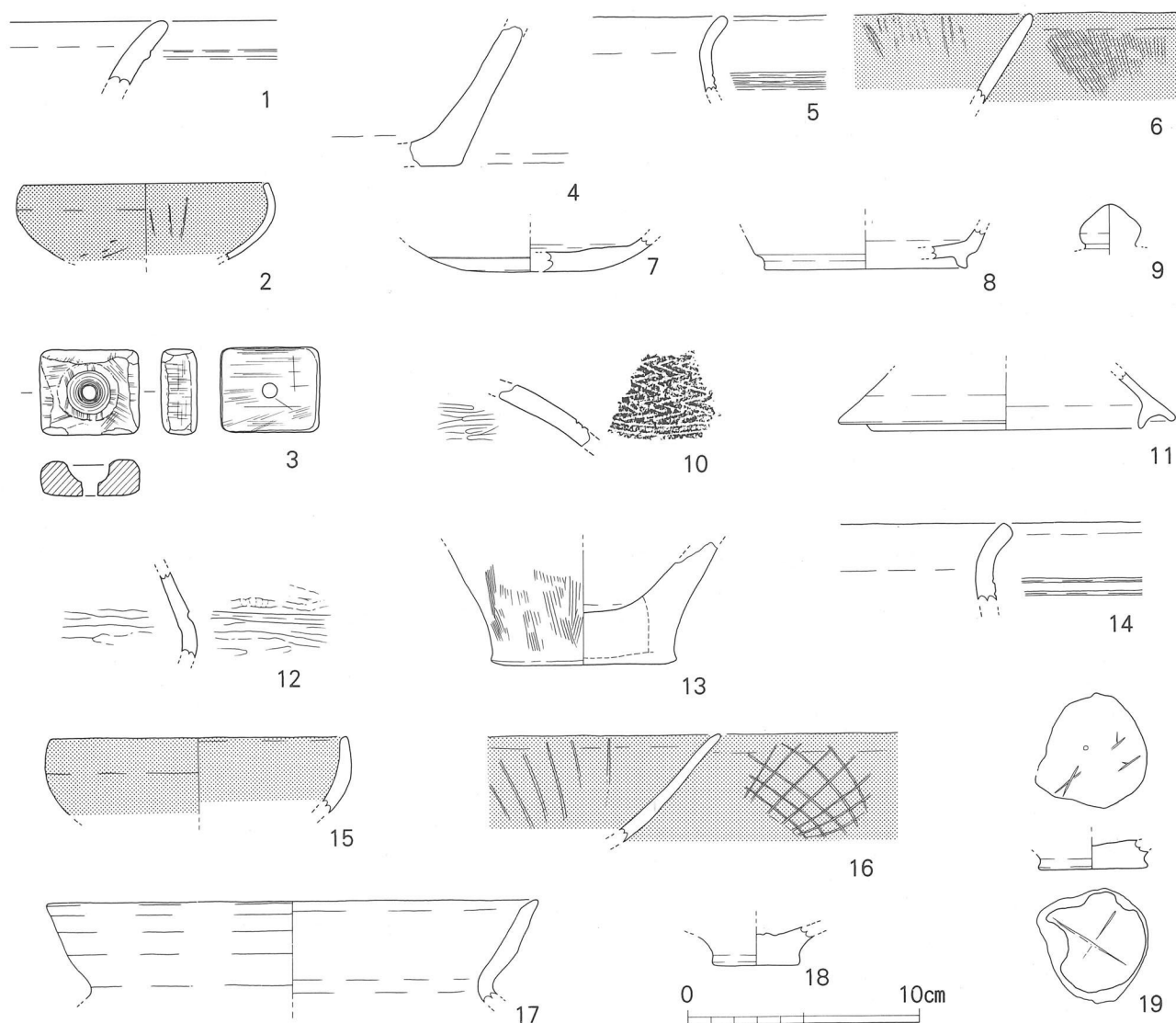
5層からは土師器・須恵器の小片が出土している。その中に1点弥生前期土器(10-10)が出土している。胴肩部付近の破片と思われ、貝殻による4組の羽状文・平行沈線文を施す。



第8図 SX02実測図 (S=1/40)



第9图 杭列实测图 (S = 1/40)



第10图 a区出土遺物实测图 (S = 1/3)

4・6・10層からは須恵器の小片が出土している。10-11はかえりを有する坏蓋である。口径が13.0 cmで、かえりが口縁部から下に伸び出ている。

14層からは縄文土器・弥生土器・土師器などの小片が出土している。10-12は縄文土器の浅鉢である。胴部最大径付近のものと考えられ、それよりやや上に1条のしっかりした沈線を施す。内外面とも横位のヘラミガキ調整を行っている。10-13は弥生前期土器である。極厚の平底で、胎土に7 mm大の砂粒子を含み、底部は円盤を成形したのち粘土を横に貼り付けて器壁を立ち上げている。10-15～17は土師器である。15は坏で、やや厚手の丸みをもって内湾するもので、内外面とも朱塗りを施している。16は高坏である。外反する坏部で、内外面とも暗文を入れた朱塗りを施す。外面は格子状、内面は放射状である。17は甕のやや長めの口縁部である。頸部から口縁部へは外側へ膨らみをもたせて湾曲させ、端部は外反してシャープなおえる。複合口縁の名残りと思われる。

10-14はB・C-2 Gr付近の旧河道（14・15・20～22層）を掘削した廃土中で見つけたものである。弥生前期土器である。やや厚手で直立ぎみの胴部に外反する口縁部へと続き、端部は断面矩形で平坦面をもつ。頸部には現状で2条のヘラ描き平行沈線文を施す。形態的には5と同じである。

13・21層からは土師器の小片が出土している。10-18は坏の底部である。厚手で径が小さく、回転糸切り技法を使用し、内面中央にはきついナデのために粘土が盛り上がっている。

18層からは土師器・須恵器の小片が出土している。

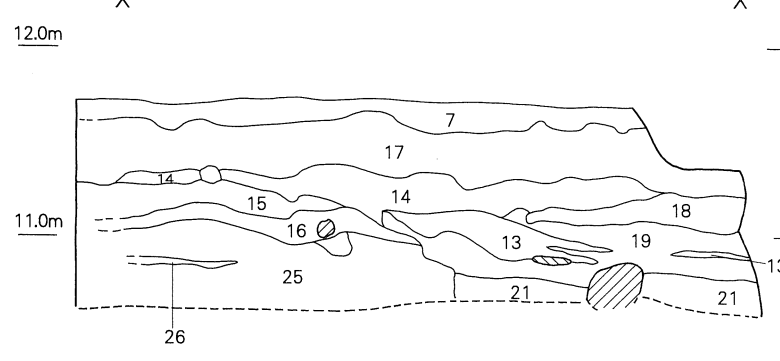
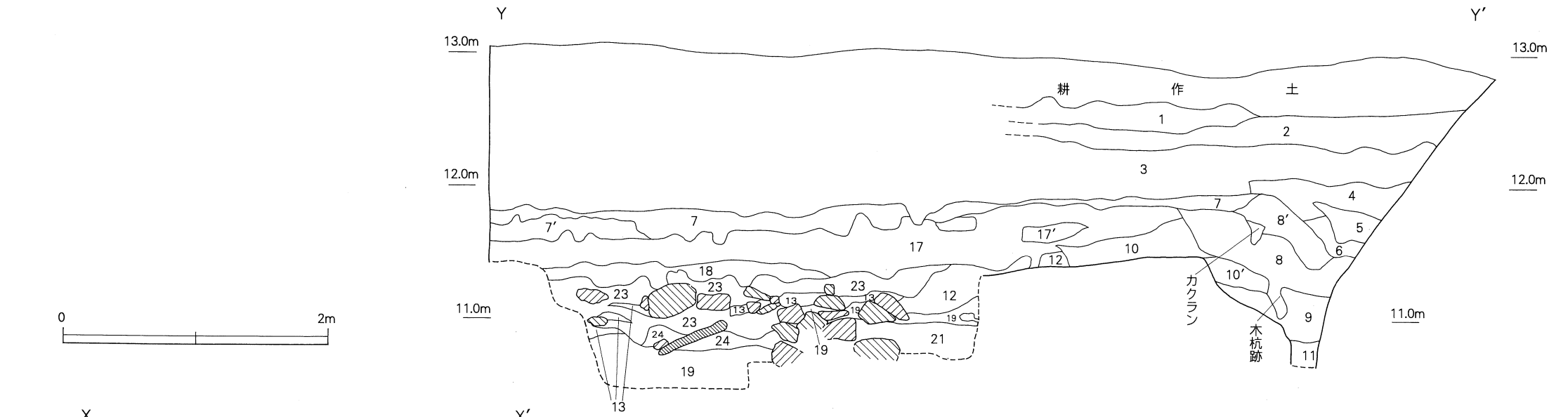
また廃土中から見つかった10-19は土師器の坏底部であるが、内外面ともヘラキズが観察される。

注1 「第6章 c区の調査」

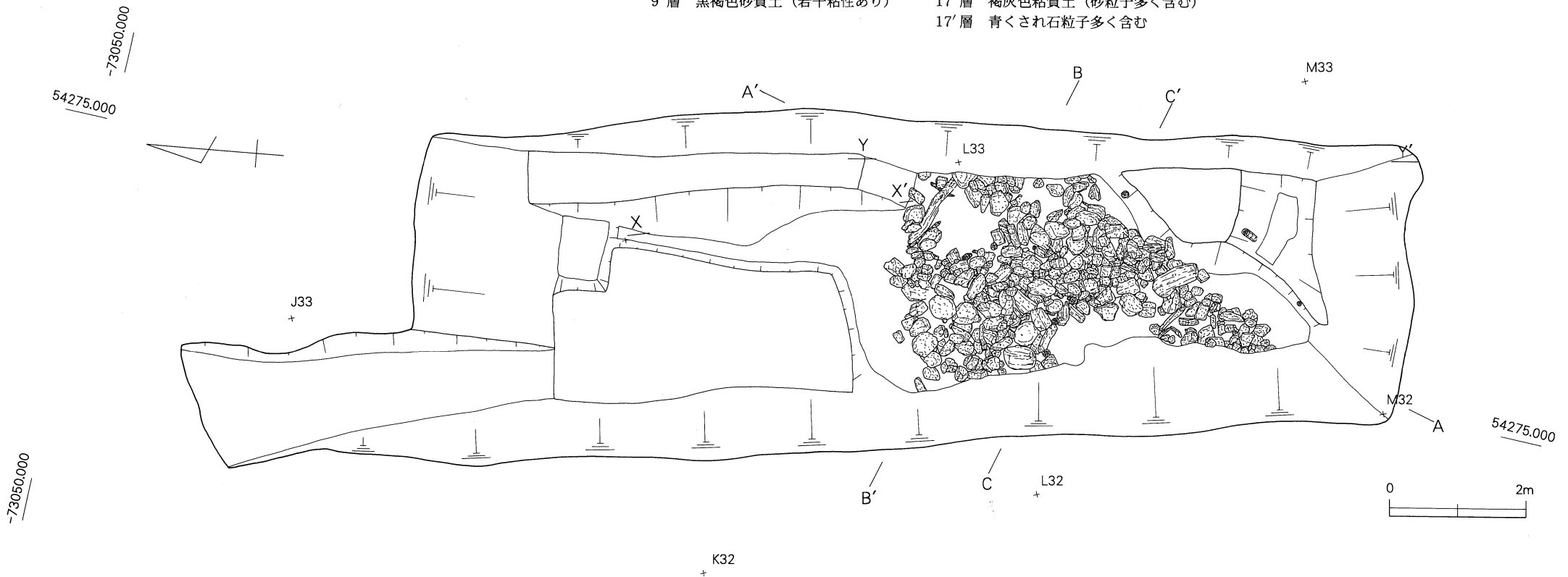
表1 a区出土遺物観察表（文章表現を特にしない内容：「調整」が、2種類以上で併書してあるものは上位から下位への調整、「→」は新旧表現）

遺物No	出土地点	調整	胎土または石材	色調	焼成	残存率	計測値及び備考
10-1	B4Gr	外：ナデ 内：ナデ	極微砂粒子（石英など）含む	外：暗灰色 内：緑灰色	良好	4 cm角	
10-2	C10Gr	外：ナデ・ケズリ 内：ナデ	1 mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む	朱色 断面：淡黄褐色	普通	1 / 6	口径10.6cm 内外面朱塗り 内面暗文？
10-3	B9Gr	研磨	蠟石？			完形	4.2×3.6×1.5cm 重量49g
10-4	B5Gr	外：ナデ 内：ナデ	1～2 mm大の砂粒子（石英・長石・黒色粒子など）多く、また若干の4 mm大の砂粒子含む	外：黄橙褐色 内：暗黄褐色	普通	4×6 cm角	
10-5	B5Gr	外：ナデ 内：ナデ	1～2 mm大の砂粒子（石英・長石など）含む	淡橙褐色	普通	4 cm角	
10-6	B5Gr	外：ナデ・ハケ目 内：ナデ	1 mm以下の砂粒子（石英など）含む	朱色 断面：淡黄褐色	普通	6 cm角	内外面朱塗り 内面暗文
10-7	C6Gr	外：回転ナデ 底部：ヘラ起こし 内：回転ナデ・不定ナデ	微砂粒子（長石など）含む	灰色	良好	底部 1 / 2	底径5.8cm
10-8	C6Gr	外：ナデ 底部：不明 内：ナデ	微砂粒子（石英・長石・黒灰色粒子など）含む	灰白色	不良	底部 1 / 6	底径8.6cm

遺物No	出土地点	調整	胎土または石材	色調	焼成	残存率	計測値及び備考
10-9	C 6 Gr	外：ナデ	微砂粒子（長石など）含む	灰色	良好	つまみ部分 完形	最大径2.6cm つまみ高1.9cm
10-10	B 8 Gr	外：文様 内：ヘラミガキ	微砂粒子（石英・長石など）含む	灰白色	普通	5 cm角	
10-11	C 6 Gr	外：回転ナデ 内：回転ナデ	微砂粒子（長石・石英など）含む	外：暗灰色 内：灰色	良好	口縁部 1/8	口径13.0cm
10-12	B・C-2Gr	外：ヘラミガキ 内：ナデ・ヘラミガキ	微砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む	淡黄褐色	普通	6×4 cm角	
10-13	B 2 Gr	外：ハケ目 底部：未調整 内：ナデ	1～2 mm大の砂粒子（石英・長石など）及び若干の7 mm大の砂粒子を含む	にぶい黄褐色	やや不良	底部 1/2	底径8.0cm
10-14	廃土中 (B・C-2Gr)	外：ナデ 内：不明	1 mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む	外：淡黄褐色 内：灰白色	普通	4 cm角	
10-15	C 2 Gr	外：不明 内：ナデ	若干の微砂粒子（石英・角閃石など）含み、緻密で粉っぽい	朱色 断面：淡黄褐色	普通	口縁部 1/10	口径12.8cm 内外面朱塗り
10-16	C 2 Gr	外：横位の細かいハケ目 内：横位の細かいハケ目	微砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む	朱色 断面：淡黄褐色	普通	8×5 cm角	内外面 朱塗り・暗文
10-17	B・C-2Gr	外：ナデ 内：ナデ	1 mm以下の砂粒子（石英・角閃石・長石など）含む	淡黄褐色	普通	口縁部 1/13	口径21.0cm
10-18	C 3 Gr	外：ナデ 底部：回転糸切り 内：回転ナデ	1 mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む	淡黄褐色	普通	底部完形	底径3.6cm
10-19	廃土中	不明	若干の微砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む	淡黄褐色	普通	底部 ほぼ完形	底径4.7cm 底部内外面 ヘラキズ



- | | | |
|---------------------------------|-------------------------------|-----------------------------------|
| 1層 緑褐色粘質土 | 10層 暗黄褐色砂質土
(青くされ石砕含む) | 18層 灰褐色粘質土
(青くされ石砕多く含む) |
| 2層 黄緑褐色粘質土
(黄橙色粒子多く含む) | 10'層 10層より青くされ石砕多く含む | 19層 黒褐色粘土
(砂粒子ほとんど含まない、ソフトである) |
| 3層 褐灰色粘質土 | 11層 黒褐色粘質土 | 21層 褐灰色砂質土
(砂粒子含み、ソフト) |
| 4層 橙褐色粘質土
(橙褐色粒子多く含む) | 12層 青灰色粘質土
(砂粒子含み、ソフト) | 23層 褐灰色粘質土
(砂粒子含み、ソフトである) |
| 5層 淡褐灰色粘質土
(地山小ブロック含む、砂粒子含む) | 13層 青灰色砂質土
(青くされ石砕含む) | 24層 灰黄褐色粘質土
(砂粒子及び青くされ石砕多く含む) |
| 6層 暗褐色粘質土 | 14層 青褐色粘質土
(砂粒子含み、ソフト) | 25層 黄褐色砂層 |
| 7層 橙褐色粘質土
(橙色粒子・砂粒子多く含む) | 15層 黄灰褐色砂質土
(所々帯状に青灰色粘土含む) | 26層 淡黄灰色シルト |
| 7'層 7層より橙色粒子少ない | 16層 暗褐色粘質土 ※第13図と同一土層 | |
| 8層 黄褐色シルト質土 | 17層 褐灰色粘質土 (砂粒子多く含む) | |
| 8'層 8層に比して粒子が若干荒い | 17'層 青くされ石粒子多く含む | |
| 9層 黒褐色砂質土 (若干粘性あり) | | |



第11図 b区遺構配置図 (S=1/80) 及び土層断面図 (S=1/40)

第5章 b区の調査

b区(第11図)は、東側の権現山と西側の浄福寺のある丘陵との谷間の最も狭まった位置にあたる。トレンチ調査(T9)により人頭大の礫が積み重なった状況で検出されたため、b区として調査した。東西幅は道路予定地内の3m、南は権現山への山道まで、北は施設が確実になくなるところまでの範囲とした。

Y Y' 土層断面図の4~6・8~11層は、調査区南東隅に排水坑を掘ったために、荒堀をしてしまい遺構であるのか未確認である。その北側は黄褐色のしまった地山のような土であったために掘り残した。

18層は堰堤状施設の上部の礫間に堆積した層で、それ以上は後世の堆積土及び耕作土である。また20・21層はc区で旧河道と確認した層と、19層はc区で沼地状と確認した層と対比すると考えられる。以下、堰堤状施設の詳細と出土遺物について述べる。

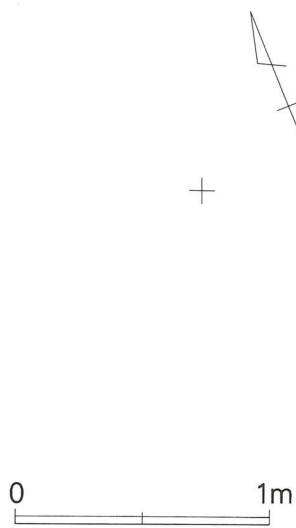
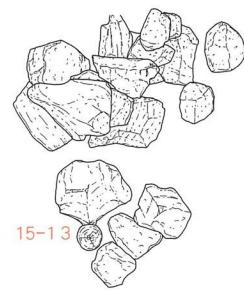
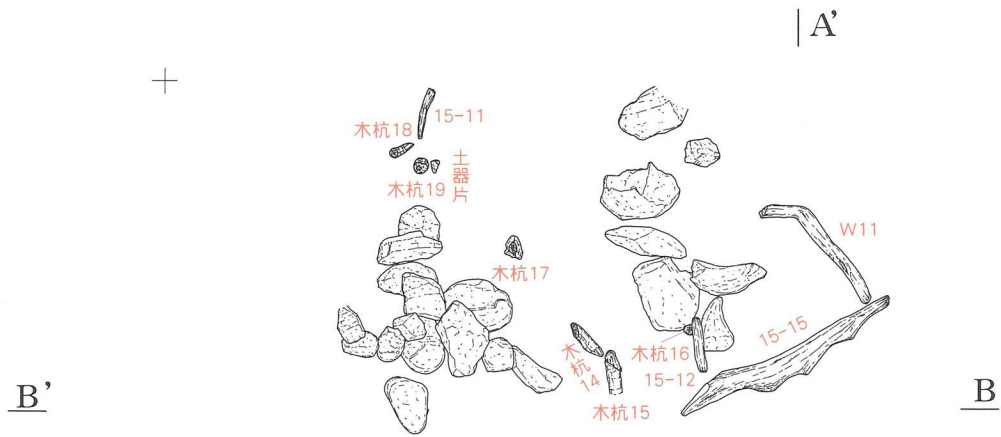
堰堤状施設(第12~15図)

K・L-32Gr内、南北約6m、東西調査区幅約3m範囲内で検出された。標高11.5mで最初の礫を確認し、最終的に10.6mまでは確認したが、東側の調査区外へまだ深く置かれているようであった。長径8~53cmで平均25.4cm大^{注1}の礫が積み並べたような状況で検出された。平面図上軸にした^{注2}径9cm級の木杭(木杭1~4)の列はN-69°-Wの方向に位置する。

B B' 土層断面図の22層は、人工的にコンクリートを作るようにローリングして作られた^{注3}ような青くされ石砕を均一に多く含んだ緑褐灰色粘質土である。この22層の範囲はB B' 土層断面図で東側範囲を確認できたのみで、西側は調査区外へ、北側は人工的な層として認識する以前に掘り下げてしまったことと土層断面に当たらなかったために正確な確認を行っていないが、北側出土の礫が傾斜した状況で検出されているので、ほぼそのラインに当たると考えられる。また南側に関しては北側と同じ状況下で調査をしており、未確認のままである。ただし南西隅方向に検出している礫はやや小さく出土状況も同一レベルであるため、後から崩れて流れてきたもののように感じられる。そのため前記した軸となる9cm級の木杭列のライン辺りではなかったかと想定される。

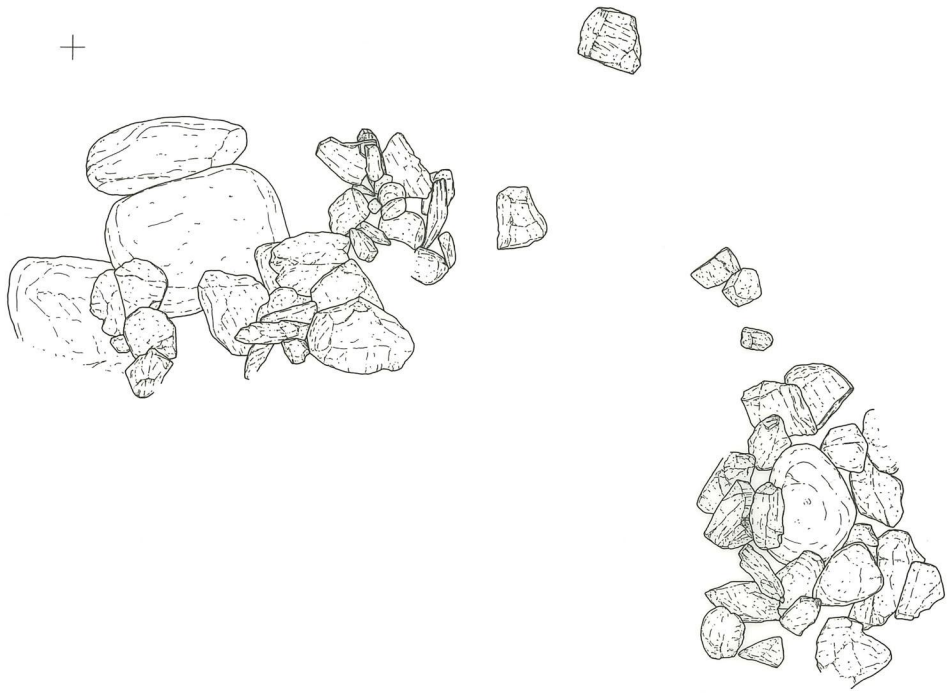
多数出土している木杭はほとんどを直立状態で検出しているので打ち込まれた当時のままの状況と考えられる。傾斜して検出されたものでは、先端加工が施されている方が下に位置しているものは、人為的に斜めに打ち込まれたものと考えられる。

この堰堤状施設は、22層を旧河道の上に盛り上げ、前記した木杭をこの施設の骨組みとして打ち込み、そののちに22層の盛土の上及び盛土の周りに盛土を押さえるように礫を積み上げたようである。径9cm級の軸となるような木杭は、礫と接するようにお互いが押さえ合うように設置してある。上部の礫は浮いたような状況で、礫と礫の間には18層が堆積している。南西隅方向に検出しているやや小さい礫は前記したように崩れて流れたものようである。その後、それらの礫の上部には上流から流れてきた木製品がひっかかったような状況で出土した。

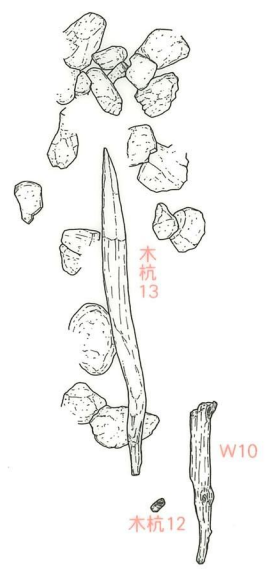


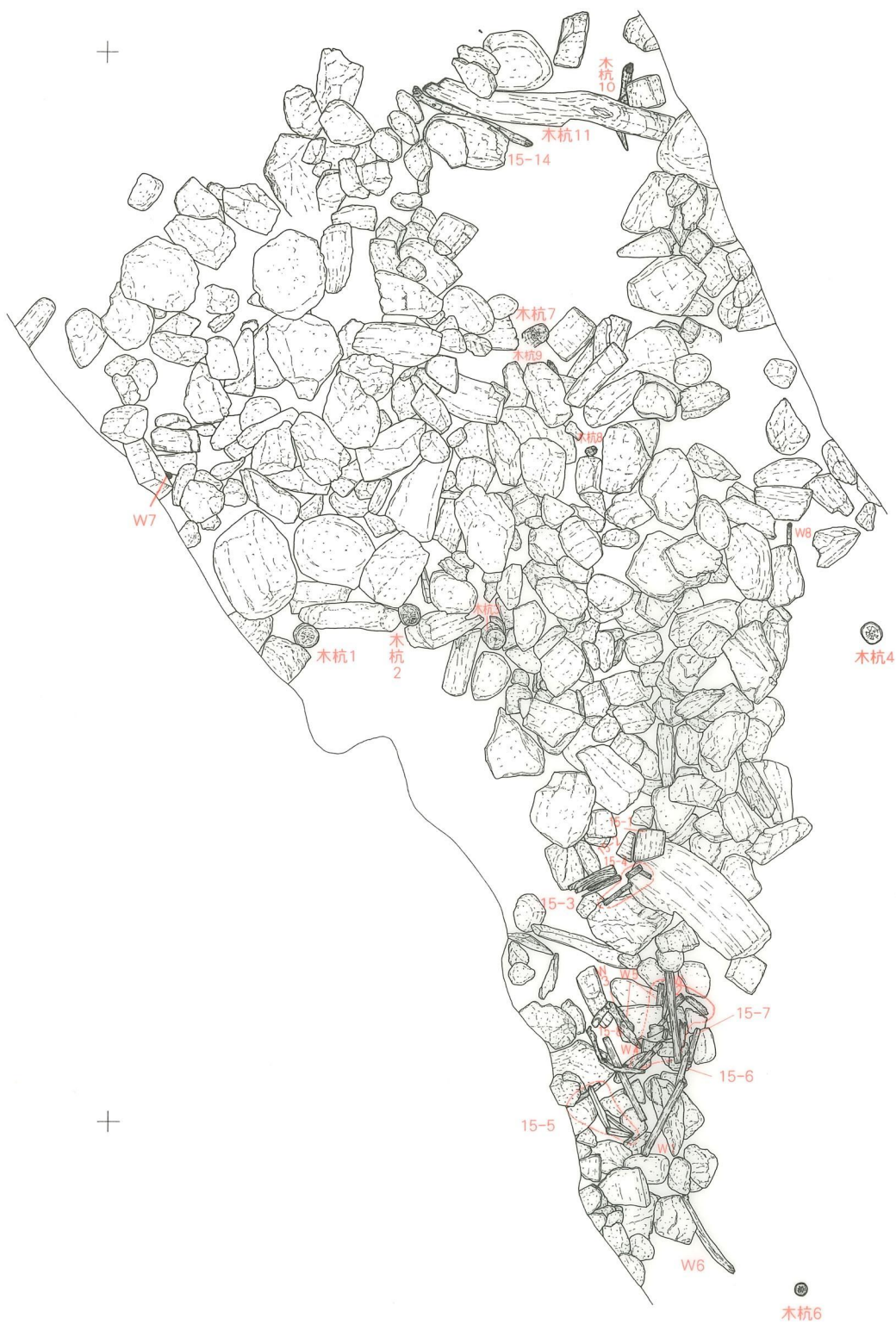
第12図 堰堤状施設実測図 (S = 1/30)

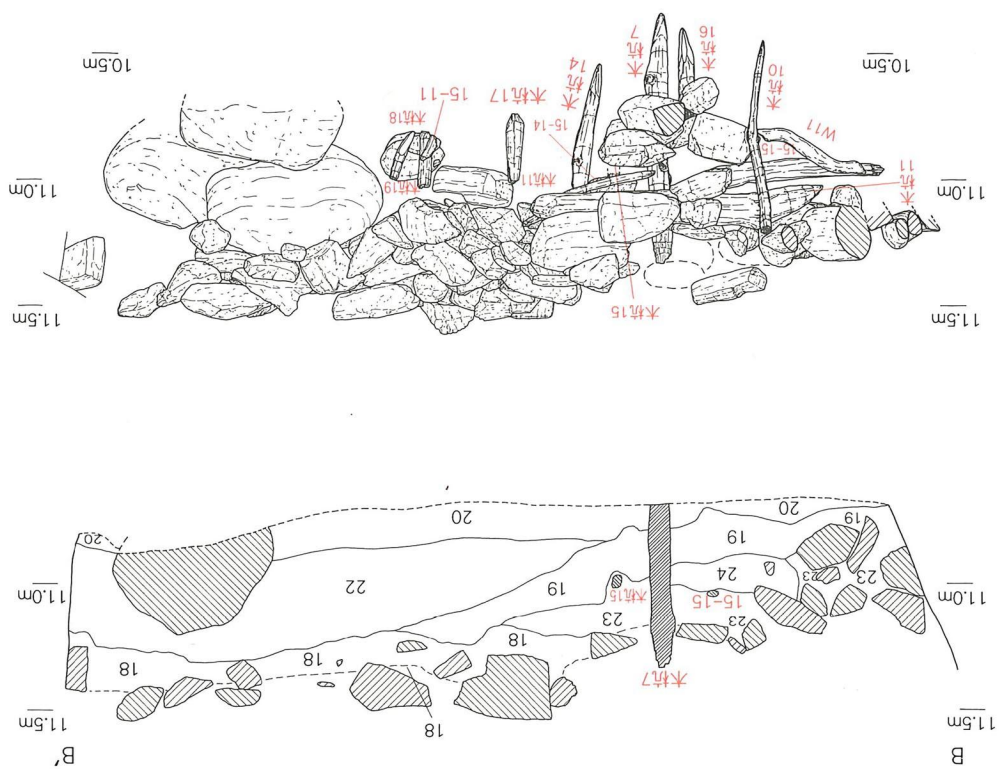
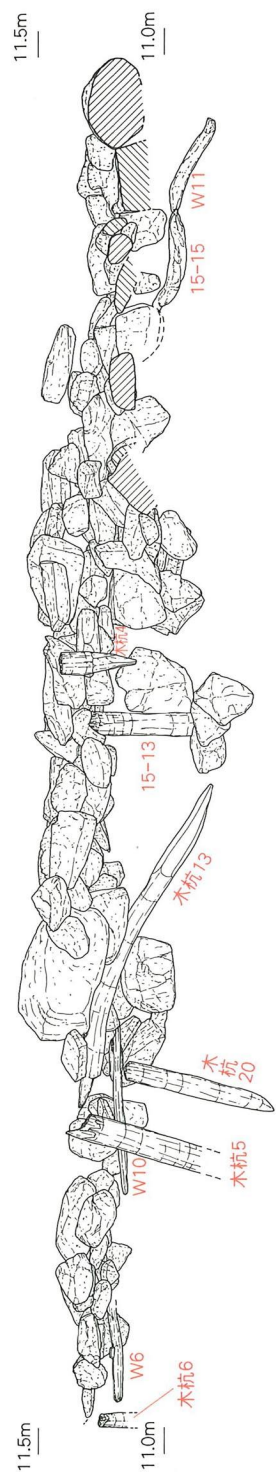
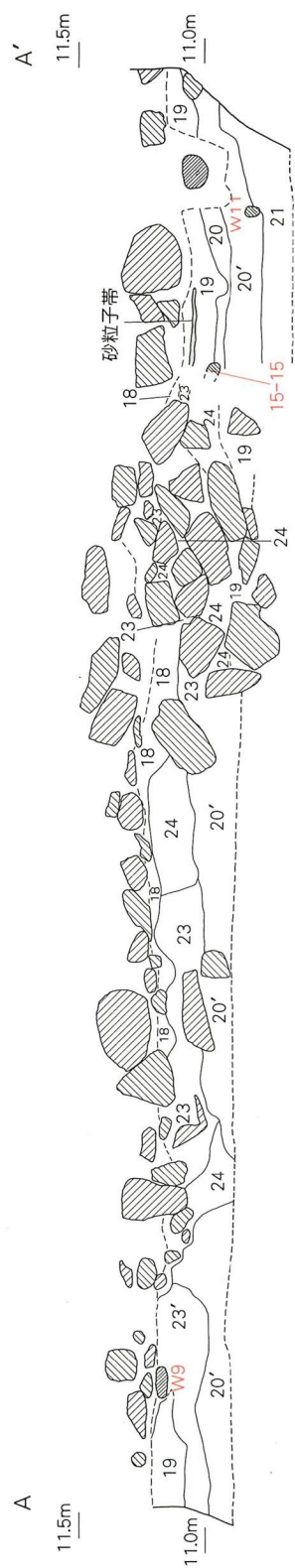
+



+

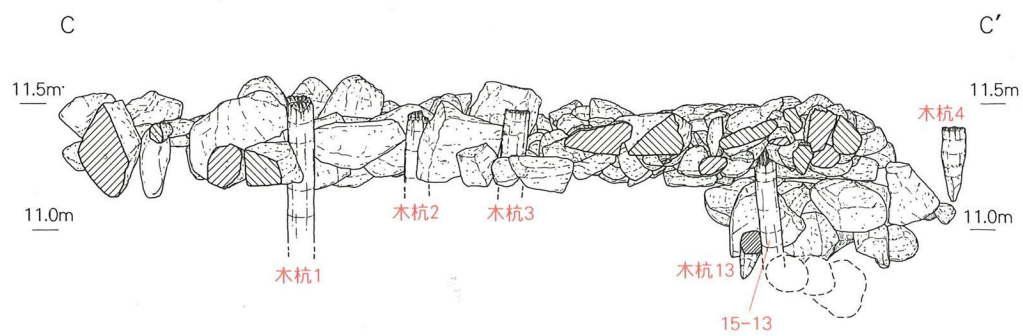




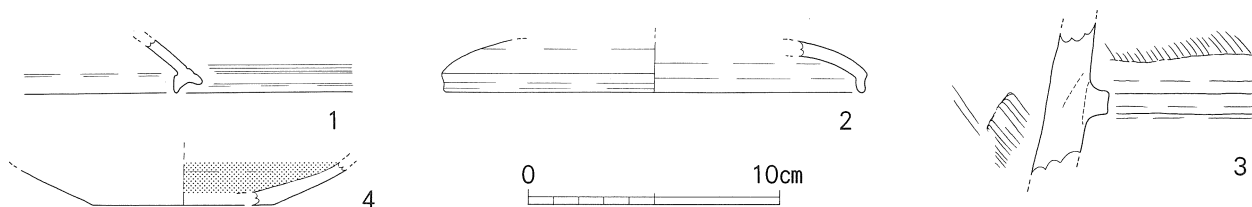


- 18層 灰褐色粘質土 (青くされ石碎多く含む)
- 19層 黒褐色粘土 (砂粒子ほとんど含まない、ソフトである)
- 20層 灰褐色粘質土 (砂粒子多く含む、粘性強)
- 20'層 灰褐色粘土 (20層の粘土部分)
- 21層 褐灰色砂質土
- 22層 緑褐灰色粘質土 (青くされ石碎を均一に多く含む)
- 23層 褐灰色粘質土 (砂粒子含み、ソフトである)
- 23'層 23層より砂粒子及び青くされ石碎多く含む
- 24層 灰黄褐色粘質土 (砂粒子及び青くされ石碎多く含む)

※第11図と同一土層



第13図 堰堤状施設立面図及び土層断面図 (S = 1/30)



第14図 b区出土遺物実測図 (S = 1/3)

堰堤状施設及び周辺からの遺物の出土量は少なかった。土器は12・17・18・21層から出土した。それぞれ小破片のみで図化できたものは14-1～3のみであり、他は全て数cm角の土師器の坏と思われる小片であった。1は21層からの出土で、須恵器の坏蓋である。かえりの付くもので、外面に2条の沈線を施す。2・3は17層からの出土である。2は須恵器の坏蓋で、かえりのなくなったタイプのものである。3は円筒埴輪の破片で、幅1cm、突出長8mmのタガを有するものである。14-4は表採で取り上げた土師器の坏である。堅緻な胎土で、底部からかなり傾斜して立ち上がる。内面に朱塗りが施してあり、底部は回転糸切りである。25-8と酷似する。

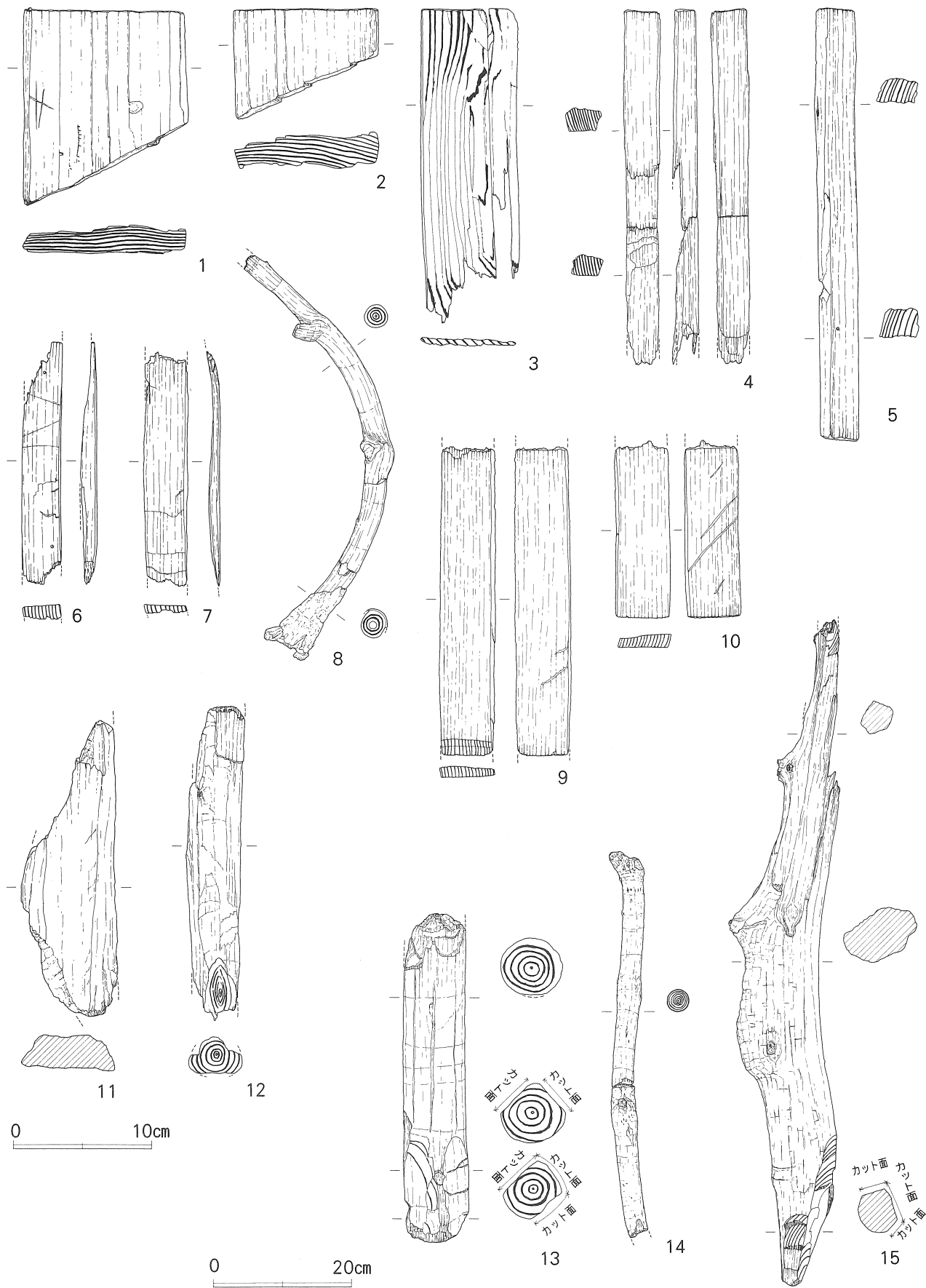
南西隅で出土した木製品及び施設内から出土した木製品と木杭のピックアップしたものを第15図に掲載した。

15-1～8は南西隅で出土した木製品である。上流から流れてきたような状況を呈しており、下流寄りには皆無であった。1・2は厚さが2cmある板材である。2点ともよく似ているので同一材かと思われる。3は現地では2分割した状況で出土していた。厚さ5mmほどの薄板である。4・5は幅2.5cmほどの棒状を呈する部材である。4は現地では3分割した状況で出土していた。また中央下の切断面は斜めにカットされている。5は現地では4分割した状況で出土していたが折り重なるように接合した。また直径2mm以下の小さな孔が裏面まで貫通している。6・7は裏面も上下も欠損している部材であるが、表面には刃物で削ったような稜線が確認できる。8は自然木である。自然の湾曲を利用して、タモのようなものとして使用されていたと想定される。

15-9・10はK-32・33Grから出土したものである。堰堤状施設の北東隅付近で23層を掘削時に出土した。幅4cm、厚さ0.9cmの板材である。各上の欠損部分で接合する可能性があるが、直接は接合しなかった。それぞれキズ痕をもつが、人工的なものか、自然なものかは判断しがたい。

15-11～15は堰堤状施設の木杭である。11は板状のもので、上下とも欠損しているが先端部は側面方向に一ヶ所カット面がある。12も上下とも欠損している。13は直径9cm級の当堰堤状施設内で基準となりうる木杭である。先端部は3面カットし、うち1面は途中で止めてしまっている。先は尖らず面をもつ。14は現地では完形品であったが、取り上げ時点で欠損してしまい、図のような先端部のない状態となってしまった。15は自然木を利用したもので、先端部を3面カットし、先は尖っている。

出土遺物から時期決定をするには資料不足の感があり、木杭14(第12・13図)の¹⁴C年代測定を行うこととした。川崎地質株式会社に委託し、その結果報告を第7章第2節に掲載した。



第15図 b区出土木製品実測図 (1~12: S=1/4、13~15: S=1/8)

堰堤状施設構築礫

島根大学汽水域研究センター客員研究員の中村唯史氏に378個の礫について岩種に関するコメントを頂いた。以下、若干改変して掲載する。

「遺構の構成礫は、表2に示すように、安山岩が80%近くを占め、その他に石英安山岩、花崗岩、流紋岩、砂岩、凝灰岩などがある。

安山岩の大部分と、砂岩は三田谷の基盤岩を構成するものと同質である。凝灰岩は三田谷に分布しているが、構成礫中の凝灰岩7個のうち、6個は三田谷に分布するものとは異なるもので、1個が同質であった。その他の岩石は三田谷の基盤岩中には含まれないものである。

岩種からみると、構成礫の70%以上は三田谷の中で採取可能なもので、その他の岩石は神戸川の河原で採取可能なものである。

岩種による使い分けは、遺構の下部に置かれている大きな礫は砂岩、上に敷かれた礫には砂岩は少ない。大きなものは最も手近にある砂岩を使い、上に敷くのには硬質な礫を使ったようである。」

現地では、50cm級の礫になるとかなりの重量があり、運び出すのに苦労した。70cm級ものは男手一人でも運ぶのが不可能であろうほど、びくともしなかった。かなりの労力であったことが想定される。

注1 調査時に個別の番号をふったものの約450個中374

個を計測。ただし、BB'ラインの北側から出土した長径70cm級の3個の大礫は省く。

注2 CC'ラインの北70cmに平行移動した軸

注3 中村氏よりご指摘いただいた。

表2 堰堤状施設構築礫の岩種

岩 種	個 数	%
安山岩	296	78.3
流紋岩	19	5.0
石英安山岩	19	5.0
花崗岩	17	4.5
砂岩	14	3.7
凝灰岩	7	1.8
細粒花崗岩	3	0.8
玄武岩	1	0.3
石英斑岩	1	0.3
珪質岩	1	0.3

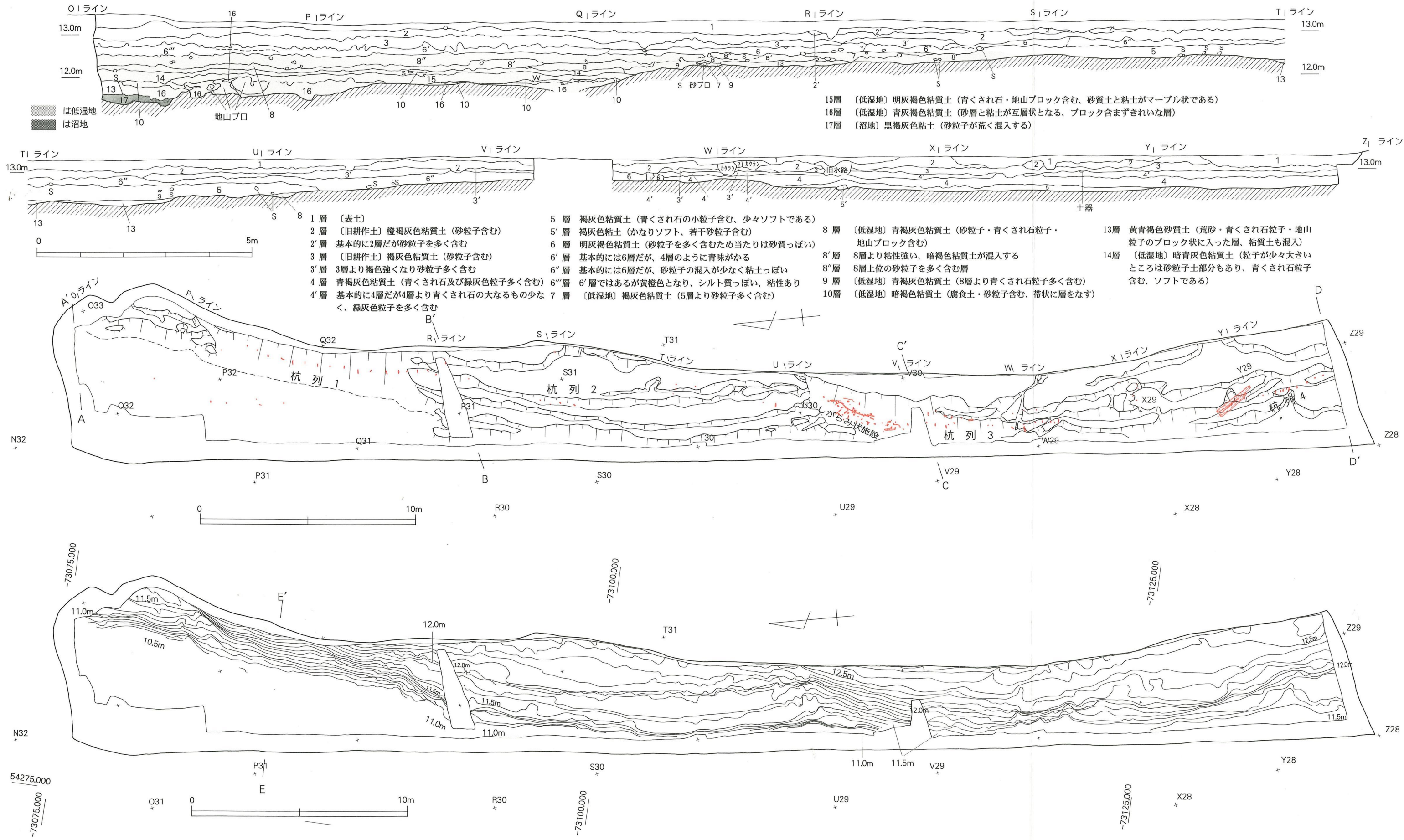
表3 b区出土遺物観察表（文章表現を特にしない内容：「調整」が、2種類以上で併書してあるものは上位から下位への調整、「→」は新旧表現）

遺物No	出土地点	調 整	胎 土	色 調	焼成	残存率	計測値及び備考
14-1	K33Gr	外：回転ナデ 内：回転ナデ	若干の砂粒子（長石・石英など）含む	淡灰色	良好	2.5cm角	
14-2	L32Gr	外：ヘラケズリ・回転ナデ 内：不定形ナデ・回転ナデ	若干の微砂粒子（長石など）含む	灰色	良好	口縁部 1/14	口径16.4cm

遺物No	出土地点	調整	胎土	色調	焼成	残存率	計測値及び備考
14-3	L32Gr	外：タテハケ目・ナデ 内：ナデの上に部分的 にハケ目 (ハケ目単位5本/1cm)	1mm以下の砂粒子(長 石・石英など)及び若 干の2mm大の砂粒子含 む	橙褐色	普通	7cm角	タガ突出長8mm
14-4	表採	外：回転ナデ 底部：回転糸切り 内：回転ナデ	若干の微砂粒子(石英 など)含み、堅緻	外：暗黄褐色 内：暗赤褐色	良好	底部 1/7	底径7.2cm 内面赤色顔料塗布

表4 b区出土木製品一覧表

No	出土地点	層位	レベル	種別・樹種	計測値	時期	備考
15-1	L32Gr 堰堤状施設		11.45m	板材 スギ	最大長：14.2cm 幅：11.8cm 厚さ：2.0cm	中世	
15-2	L32Gr 堰堤状施設		11.45m	板材 スギ	最大長：7.9cm 幅：10.5cm 厚さ：2.2cm	中世	
15-3	L32Gr 堰堤状施設		11.42m	薄板 スギ	現存長：22.7cm 幅：7.0cm 厚さ：0.5cm	中世	
15-4	L32Gr 堰堤状施設		11.43m	部材 スギ	現存長：25.6cm 幅：2.5cm 厚さ：1.7cm	中世	
15-5	L32Gr 堰堤状施設		11.385m	部材 スギ	長さ：31.2cm 幅：2.8cm 厚さ：2.0cm	中世	
15-6	L32Gr 堰堤状施設		11.385m	板材 スギ	現存長：17.5cm 幅：2.8cm 現存厚：1.1cm	中世	2枚あり
15-7	L32Gr 堰堤状施設		11.385m	板材 スギ	現存長：16.9cm 幅：3.2cm 現存厚：0.8cm	中世	2枚あり
15-8	L32Gr 堰堤状施設		11.385m	タモ？ ツルウメモドキ属	長さ：34.5cm 直径：1.2～3.3cm	中世	自然の湾曲を利用した物
15-9	K-32・33Gr 堰堤状施設		不明	板材 スギ	現存長：22.3cm 幅：4.0cm 厚さ：0.8cm	中世	15-10と同一個体？
15-10	K33Gr 堰堤状施設		不明	板材 スギ	現存長：12.9cm 幅：3.9cm 厚さ：0.9cm	中世	15-9と同一個体？
15-11	K32Gr 堰堤状施設		上10.93m 下10.82m	板状杭？ クリ	現存長：21.5cm 幅：6.7cm 厚さ：2.3cm	中世	
15-12	L32Gr 堰堤状施設		上10.83m 下10.8m	木杭 カヤ	現存長：22.7cm 径：3.9cm	中世	
15-13	L32Gr 堰堤状施設		上11.32m 下10.85m	木杭 ハイノキ属ハイノキ節	現存長：47.5cm 径：9.0cm	中世	
15-14	K32Gr 堰堤状施設		上11.18m 下10.96m	木杭 コナラ属コナラ亜属 コナラ節	現存長：55.7cm 径：3.2cm	中世	
15-15	L32Gr 堰堤状施設		10.97m	木杭 カヤ	現存長：96.3cm 幅：3.5～13.0cm 厚さ：4.5～8.0cm	中世	



第16図 c区遺構配置図及びピコンタ図 (S = 1/60)、土層断面図 (S = 1/80)

第6章 c 区の調査

c 区（第16～18図）は、権現山の山裾に位置しており、現在の耕作土である1層、旧耕作土である2・3層、その下に堆積している4層は権現山の岩盤が崩落したいわゆる青くされ石を多く含んだ層である。またその下に堆積している5層までが、調査区全体を覆っている。7層以下からは杭列、しがらみ状施設、木クズ集中箇所などを検出しており、低湿地であったろうと想定している。17層は砂粒子が粗く混入しているが、基本的には混ざりのない粘土である。かなりソフトで、当時はよどんだ状態の沼地であったと想定される。今回掘り下げ最終的に検出した18・19層は砂を基調とした砂質土であり、これが三田谷の旧河道に当たる層である。

遺物は17層から徐々に増え始め、18層以下から多く出土するようになる。須恵器のヘラ記号、土師器の墨書土器も17～19層から出土した。

以下、遺構と出土遺物の詳細について述べる。

杭列1（第19図）

P-32、P～R-31Gr内、標高12.36mで検出し始めた。8・9・13～15層中に打ち込まれた状況で検出した。ほぼ南北方位で権現山に沿って湾曲し列をなしている。杭の現存長は16～74cmで直径2～3cmのほぼ同規格である。南寄りの杭は権現山からのわずかな地山の縁に沿って並んでいるが北へゆくにつれて地山から離れていくようである。この様子は図版15-2でよくわかる。杭列が打ち込まれている堆積土を掘削すると、権現山からの地山が急激に落ち込み、杭は地山までは到達していなかった。

杭列1に関連すると思われる遺物は皆無である。

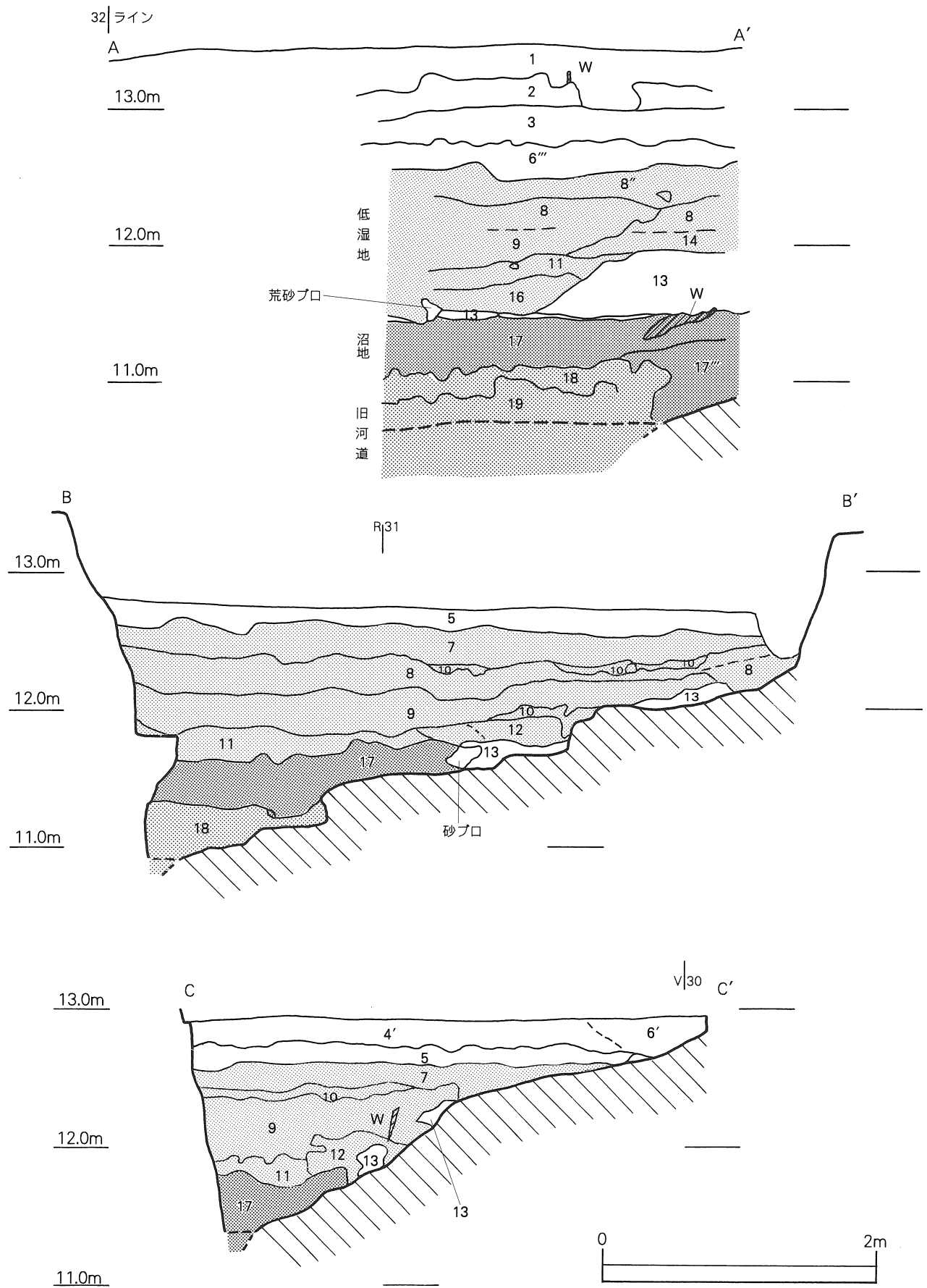
杭列2（第20図）

R・S-30Gr内、標高11.99mで検出し始めた。権現山から段々状に緩やかな地形を呈する位置にあたり、ステップから次のステップへ落ちる付近に平行して4本の杭が並んでいる。地上への出現長は15～20cmで直径約3cmのほぼ同規格である。12・13層中を貫通して地山にしっかりと打ち込まれている。その12層は、Q・R-31、R～T-30Gr内付近で、段々状の地形のステップが次のステップへ落ちる位置にほぼ南北方向で地山の縁に沿って幅1m、深さ20cmの溝状を呈している。11層が堆積したのちに山水の流れによりできたものか。

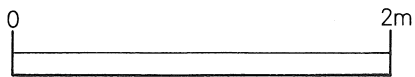
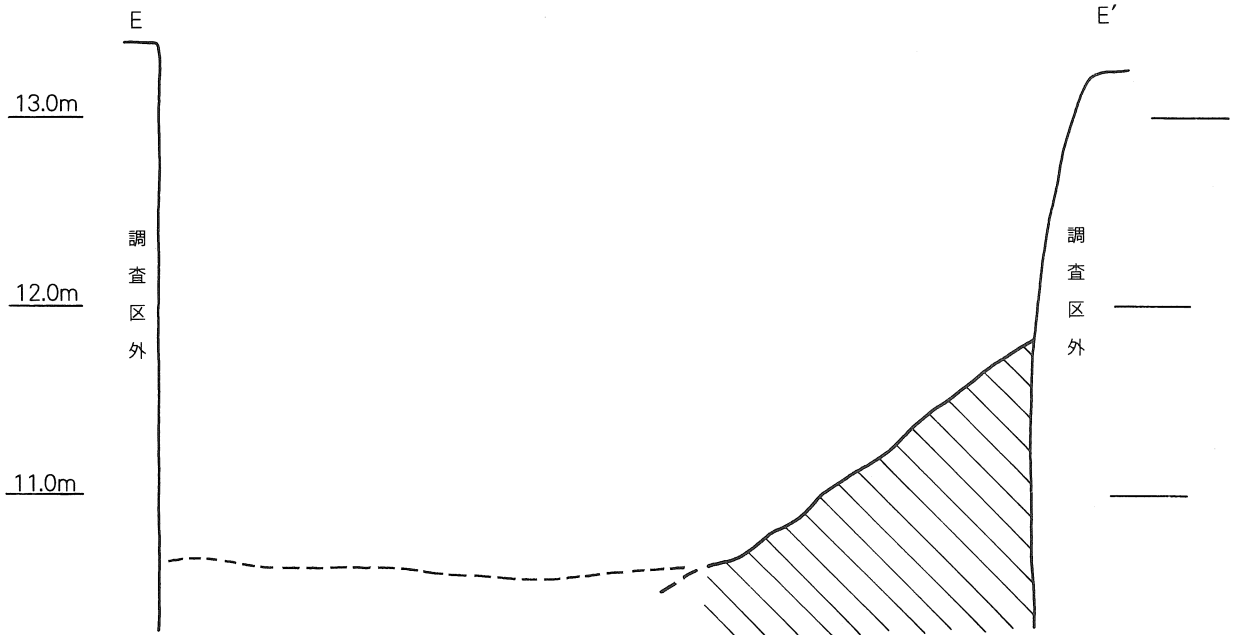
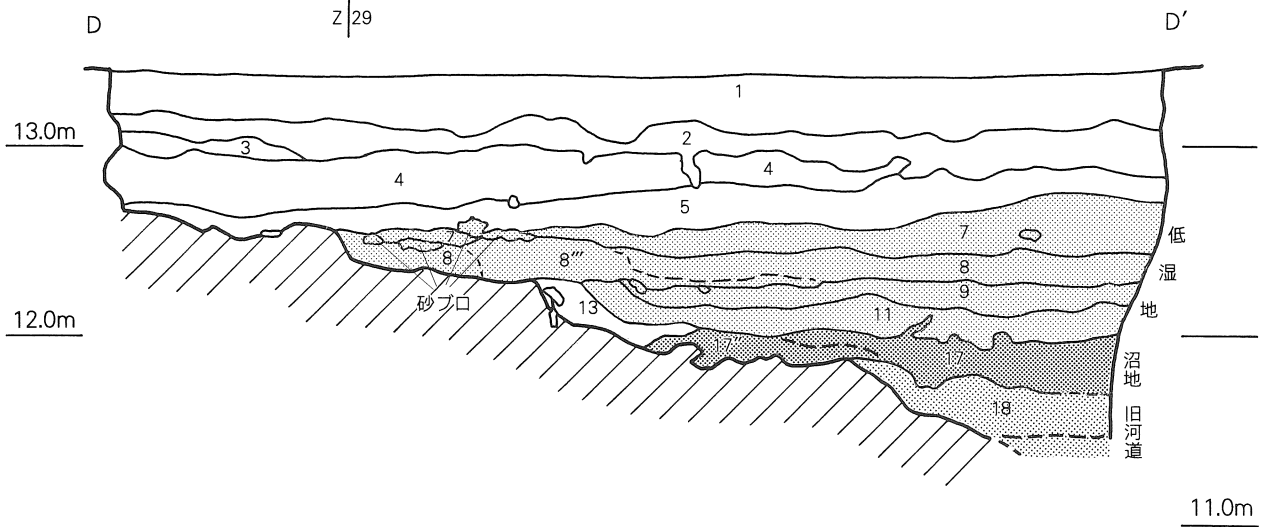
杭列2に関連すると思われる遺物は皆無である。

杭列3（第19・23・30図）

V・W-29Gr内、標高12.4mで検出し始めた。規則的ではないが検出レベルがほぼ同一であるのと権現山に沿って2～3列に並ぶような状況を呈するため同じ杭列とした。現存長11～24cm、地上への出現長1～67cmで直径2cm級と3、4cm級のものがある。全ての杭は9層から検出され、出土位置



第17図 c区土層断面図1 (S=1/40)

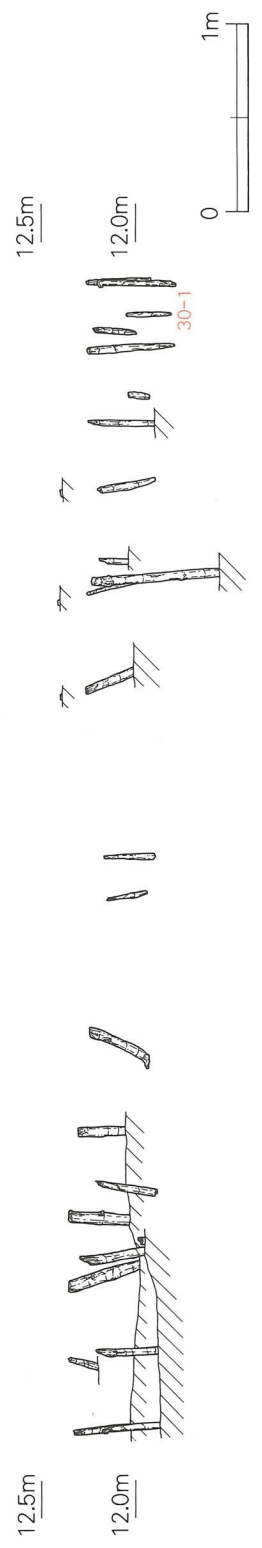
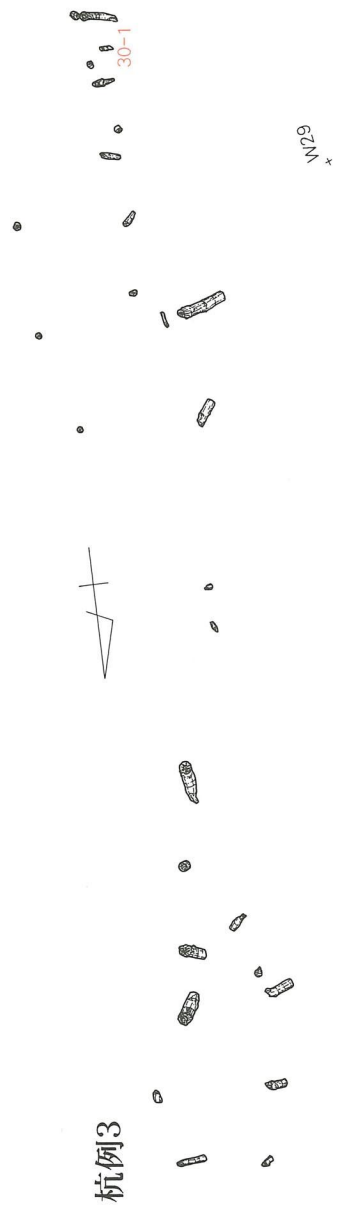
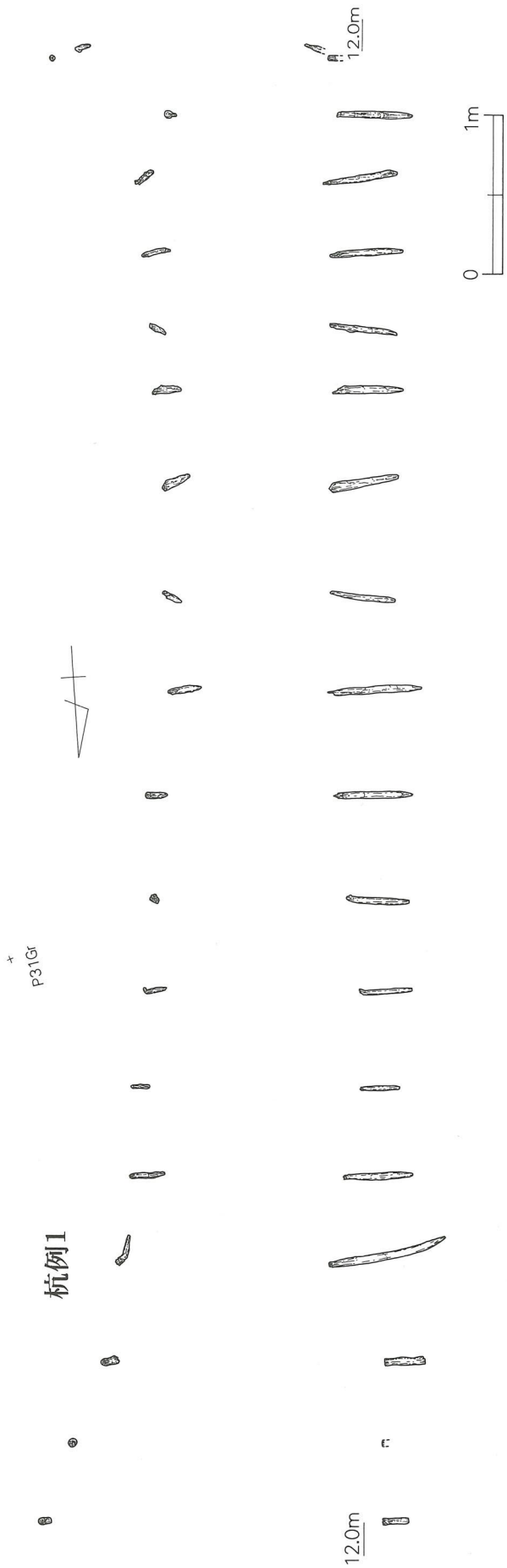


- 8'''層 8層中に地山ブロック混入層
- 11層 〔低湿地〕暗褐灰色粘質土（砂粒子あまり含まない、上層よりソフトである）
- 12層 〔低湿地〕青褐灰色粘質土（青くされ石粒子・褐灰色粘土が帯状に入りこむ）

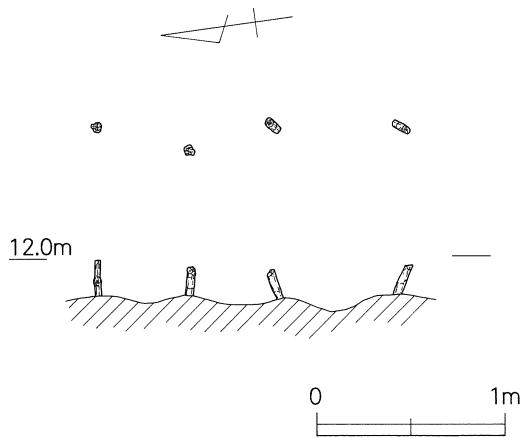
- 17''層 17層に青くされ石小ブロックが混入する層
- 17'''層 17層に炭化物を多めに含む層
- 18層 〔最終旧河道〕灰褐色粘質土（砂粒子多く含む、粘性強）
- 19層 〔旧河道〕褐灰色砂質土（ただし18層に似た粘質土がかなり混入する）

※第16図と同一土層

第18図 c区土層断面図2 (S=1/40)



第19图 杭列1・3実測图 (S=1/40)



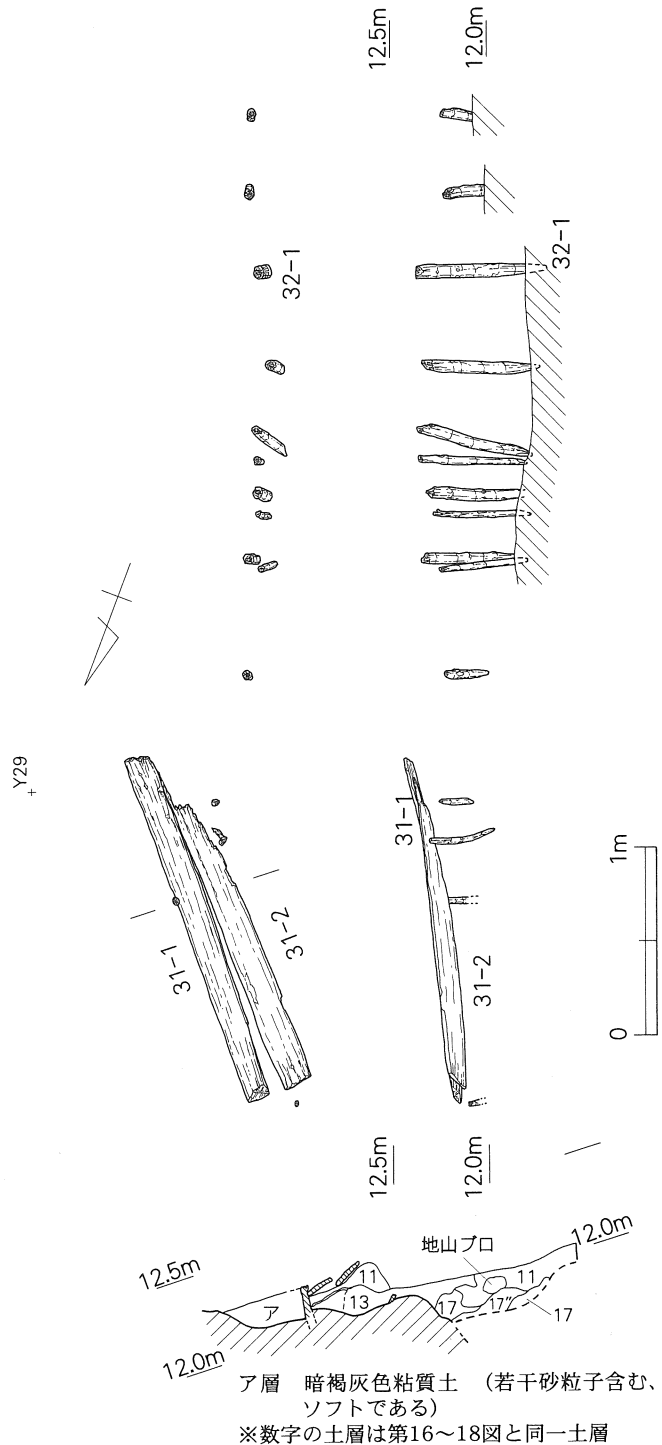
第20図 杭列2実測図 (S = 1/40)

によって11・12・17層をそれぞれ貫通し、地山まで到達しないもの、地山に打ち込まれたものがあり、後者はしっかりと打ち込まれていた。30-1は当杭列の中で唯一竹であったため掲載した。上下とも欠損しているが、基部の一ヶ所カットをした面は残存している。直径2cm級の仲間であるが、なぜここに竹が使用されているのかは不明である。

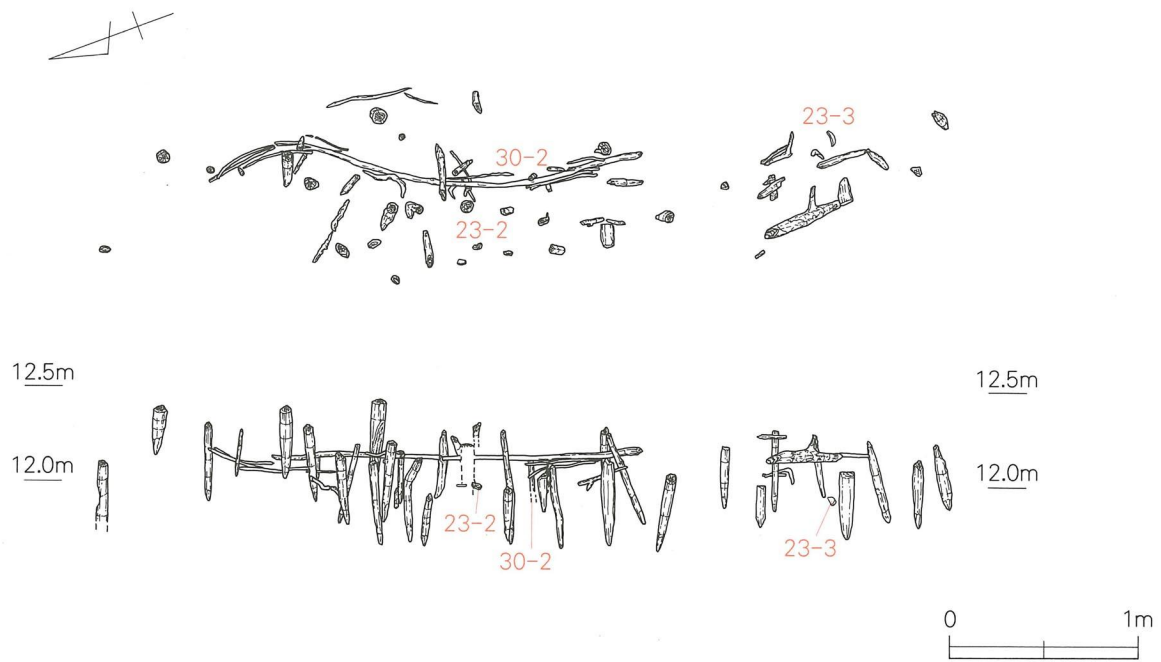
杭列3に関連すると思われる遺物は、V・W-29Grの9層から須恵器・土師器の破片が十数点出土しており、それが時期決定に有効であろう。うち1点のみ実測可能であった(第23図)。23-1は土師器の坏の底部破片である。底部は回転糸切りで、底径が小さく外へ開く立ち上がりを呈する。胎土はかなり堅緻で粉っぽい。

杭列4 (第21・31・32図)

X・Y-28Gr内、標高12.44mで板材31-1・2を、それより若干低い標高12.36mから杭を検出し始めた。8・11・13・17層中に杭は打ち込まれ、一段下のものは地山にわずかに入り込んでいるだけで、南寄りの2本は一段高い地山にしっかりと打ち込まれている。板材は標高12.12~12.44mの範囲内に約10度の傾斜をもって横たわっている。杭列は31-1の東側に接している杭からN-16°-Wの方向で権現山に沿って湾曲して1 or 2列に並び、板材はそれより24°西に振っている。杭の現存長は17~68cm、地上への出現長5~51cmで直径2~6cmとあまり一定していないが、同じ地山に打ち込んである。32-1周囲の5本は太めで規格的であり、その周囲に交互に打ち込んである2cm級の3本はそれな



第21図 杭列4実測図 (S = 1/40)



第22図 しがらみ状施設実測図 (S = 1/40)

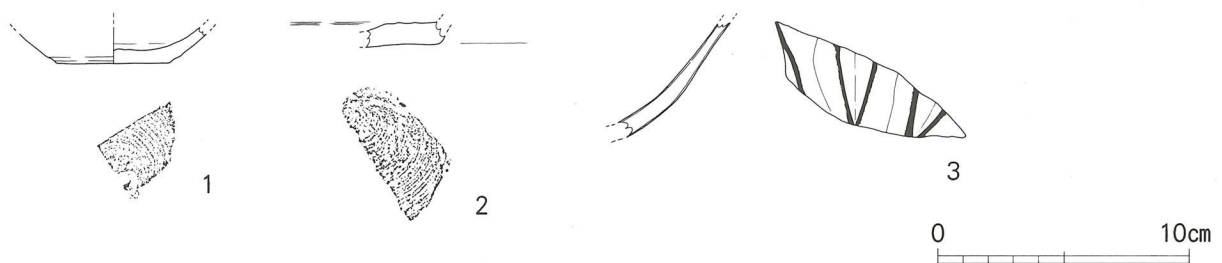
りに規格的である。杭列中最もしっかりしている32-1を掲載した。自然木を利用して基部を3面カットしている。

板材31-1・2は長さ193.3cmと174.8cm(現存長)、幅14.5cmと17.0cm、厚さ2.8cmと2.5cmを測り、ほぼ同規模の板である。1は一方は直角にカットしてあるがもう一方は斜めにカットされている。2は一方は欠損しているがもう一方は直角にカットしてある。1・2ともほぞ穴らしき人工的な孔が数カ所あけてあり、1は斜めにあけてあるものもある。

杭列4に関連すると思われる遺物は、Y28Gr、11層出土の土師器の坏の小片のみであり、時期設定するような遺物はない。

しがらみ状施設 (第22・23・30図)

U-29・30Gr内、標高12.44mで検出し始めた。標高12.2m付近から直径2、3cmの自然木が杭の間をぬうように置かれていた。杭の位置もランダムに打ち込んだような状況を呈しているが、権現



第23図 c区遺構内出土遺物実測図 (S = 1/3)



第24図 木クズ集中1～3 出土状況図 (S = 1/8)

山の山縁に沿ったN-23°-Eの方向に統一性をもつようである。このような状況から、単なる杭列とは区別し、しがらみ状の施設とすることとした。ほぼ9層中にあるが、位置によっては長いものでは11・12・17層まで打ち込まれたものもある。横に置いてある自然木は、北寄りでは長さ3、40cmものが数本、次ぎに長さ220cmの本体があり、その南寄りの横木は消失したようで欠損しているが、最も南寄りには長さ2、30cmの横木が存在する。杭はその横木の両側に現存長20~60cm、直径2~8cmとあまり規格性のない丸杭を中心とし、7×2cm角規模の板状杭3本、その半分規模の板状杭3本、直径2cmの竹の杭が1本ある。30-2はそのうち小さいながらも端正な杭なので掲載した。現存長21.4cm、直径2cmで、先端部は一面のみカットしてある。

しがらみ状施設と関連すると考えられる出土遺物は、9層から出土した23-2・3である。2は土師器の坏の底部破片である。底部は回転糸切りで、砂粒子を含んでいる割には堅緻である。3は龍泉窯系青磁の特徴をもつ破片である。碗の胴部であろう。外面には鎬のある連弁文様を施す。濃淡があり連弁文様がよく活きている。

木クズ集中箇所 (第24図)

11層中には木クズの集中する箇所が3ヶ所あった。V29Gr内の杭列3付近、W・X-28Gr内、Y28Gr内の杭列4付近である。それぞれ木クズ集中1~3とする。それぞれの標高は1が12.0~11.925m、2が12.09~11.97m、3が12.1~12.02mで、その範囲内で木クズが集中して検出された。この周囲の土層は、砂を含み流水して流されたような状況を呈していた。木クズ集中3では板状の木クズが切断されたように小さく、積み重なっている。

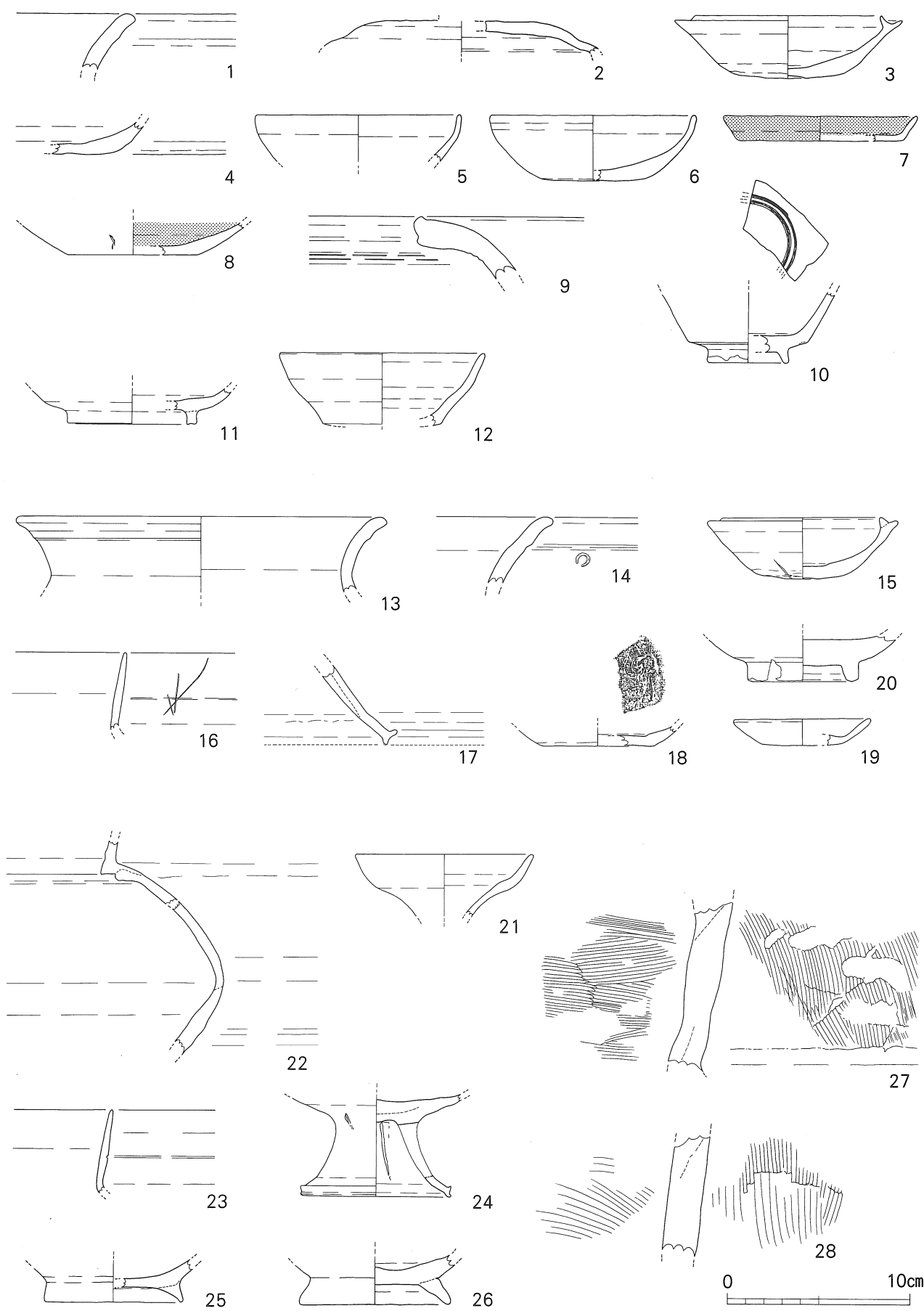
木クズ集中1~3に関連すると考えられる出土遺物は、第24図木クズ集中1範囲内出土の須恵器が確実である。図化するまでもなく実測していないが、10cm角の須恵器の大甕の胴部破片である。あまり湾曲せず、厚さが1.3cmあり、外面平行タタキ目、内面同心円タタキ目である。その他、同検出Gr内出土の遺物には同様な須恵器の小破片を中心に土師器の小破片が数点ある。木クズ集中2は同検出Gr内出土遺物に須恵器の小破片を中心に土師器の小破片が数点ある。また素焼きの播鉢らしき小破片が1点出土している。木クズ集中3は同検出Gr内出土遺物に土師器の小破片が数点と須恵器の壺の頸部の小破片が1点出土している。

遺構外出土遺物 (第25~30図)

遺構外からの出土土器及び土製品を旧耕作土(4~6層)と地山直上の層(13層)、低湿地(7~9・11・12層)、沼地(17層)、旧河道(18・19層)、出土地不明に分けて記載する。また鉄製品・石製品・木製品はその後へ記載する。全体的には下層から上層にゆくに従い、古いものから新しいものへと移ってゆくが、同じ土層中でも時期幅がかなりある。

旧耕作土(4~6層)と地山直上の層(13層)

25-1~6は須恵器である。1は壺の口縁部で、口縁端部はやや平坦な面をもって外に引き出し、その下方には沈線を利用してつくった擬突帯を施す。2は坏蓋である。天井が低く平坦な面をもち屈



第25图 c区遺構外出土遺物実測図1 (1~10: 旧耕作土、11~12: 13層、13~20: 低湿地、21~28: 沼地) S=1/3

曲して端部へと続く。かえりはなく垂下するものであろう。現状ではつまみはないが付いていたと思われる。3～6は坏身である。3はかえりのあるもので、口縁部からわずかに見えている。底部はやや厚みがあるが口縁部にゆくにつれ薄手となる。5・6はかえりのなくなったタイプで、6は底部から器壁に移行するところが厚くなり、緩やかに立ち上がる。口縁部は5・6ともに薄手で直立ぎみにおえる。

25-7・8は土師器である。7は須恵器模倣としての皿である。小ぶりのもので、底部からの立ち上がりは「く」の字状に屈曲している。内外面とも朱塗りを施す。8は坏である。堅緻な焼きで、底部から器壁も直線的である。内外面には赤色顔料を塗布し、外面はその上に煤が付着している。14-4と酷似する。

25-9は備前焼の無頸壺である。口縁部はわずかに立ち上がり、内面に丸みを帯び幅をもち、凹凸をつけて器壁に至る。外面は平坦ぎみから丸みをもって湾曲する。25-10は磁器の碗である。やや高めの高台付きで、畳付部分は露胎で砂目積み痕があり、外面は青緑釉、内面は平行2本線の染付けが施されている。

13層は地山直上の層であり、青くされ石の崩れたもの、地山ブロックなどを多く含んだ層を一括して13層とした。出土遺物は、25-11・12である。11は須恵器の坏で、中央寄りに断面矩形の高台がしっかり貼り付き、器壁は外へゆるやかに立ち上がる。12は土師器の坏である。底部は静止糸切りで、外反ぎみに立ち上がった器壁が中ほどより内湾ぎみに変化して口縁部に至る。

低湿地（7～9・11・12層）

堆積が厚く、杭列などの構築がなされているにもかかわらず、遺物量が少ない。

25-13～17は須恵器である。13・14は壺で、小さな突帯をもつ外反する口縁部で端部は丸くおさめる。小さな突帯はそれぞれ下を強くナデ出したものである。14はその下に現状で1個の竹管文が施されている。15は坏身である。口径が最も小さくなるもので、かえりも小さく、底部から器壁へはゆるやかに直立ぎみに立ち上がる。底部付近に「×」のヘラ記号あり。16は直口壺の口縁部で、器壁は薄くすーっと伸びるものである。外面には3本のヘラ記号あり。17は高坏の脚部である。その裾部は断面形が「T」の字状を呈し、脚部の断面には透かしの跡らしいきれいな面が確認される。

25-18・19は土師器である。18は坏の底部で、回転糸切りにより切り離してある。19は小皿で、底部から器壁に開きかげんに立ち上がる。内面に朱塗りの痕跡が観察される。

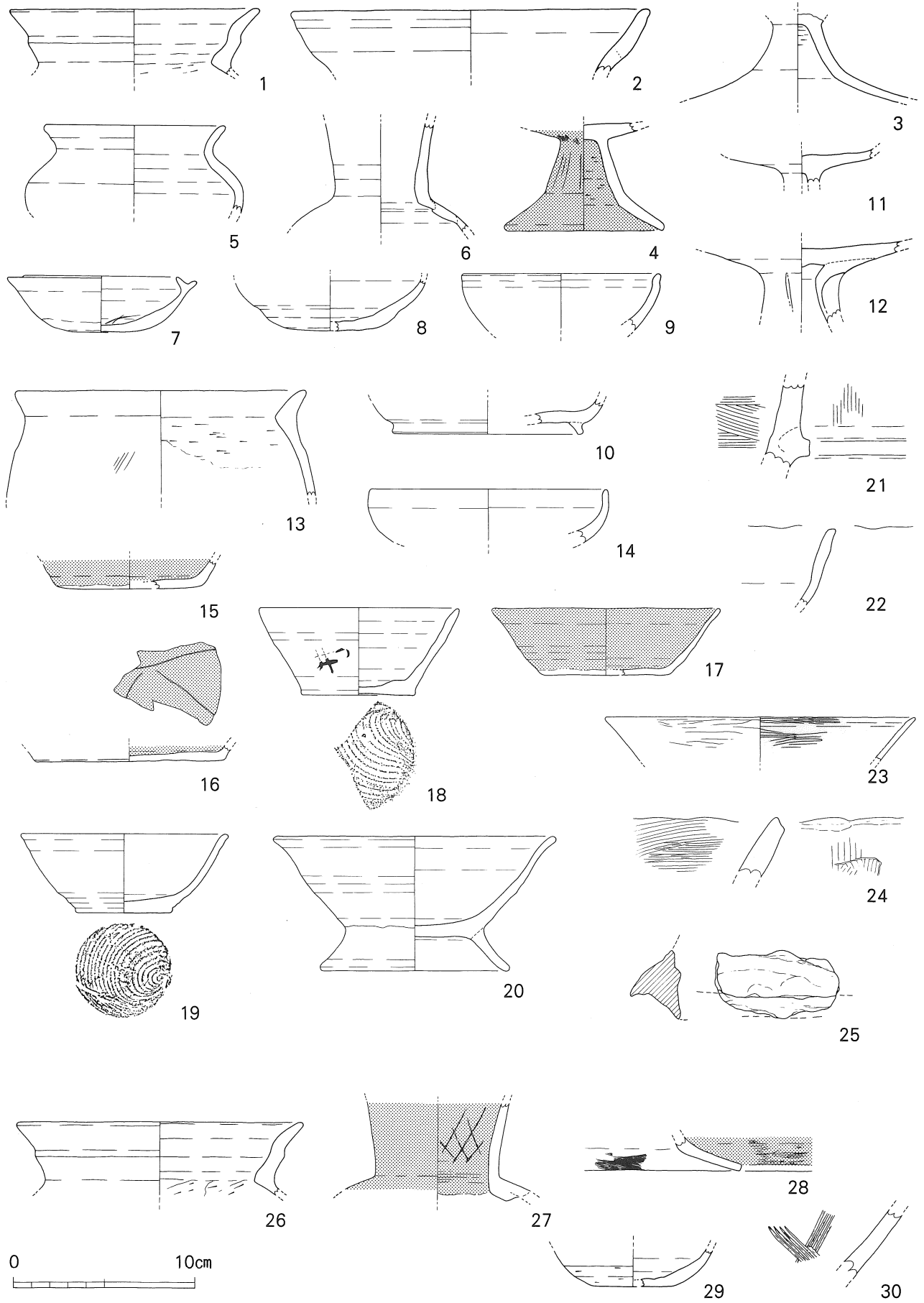
25-20は龍泉窯系青磁の高台付碗である。厚手で長めの高台が内寄りに付き、畳付け及び高台内面以外に釉が施してある。見込部分にわずかに印花文らしき痕跡あるが、不明瞭である。

29-1は9層出土の土錘で、長さ7cm、直径3cm弱、口径7mm、重量50gを測り、上長浜貝塚分類^{注1}の管状紡錘形A2に属する。

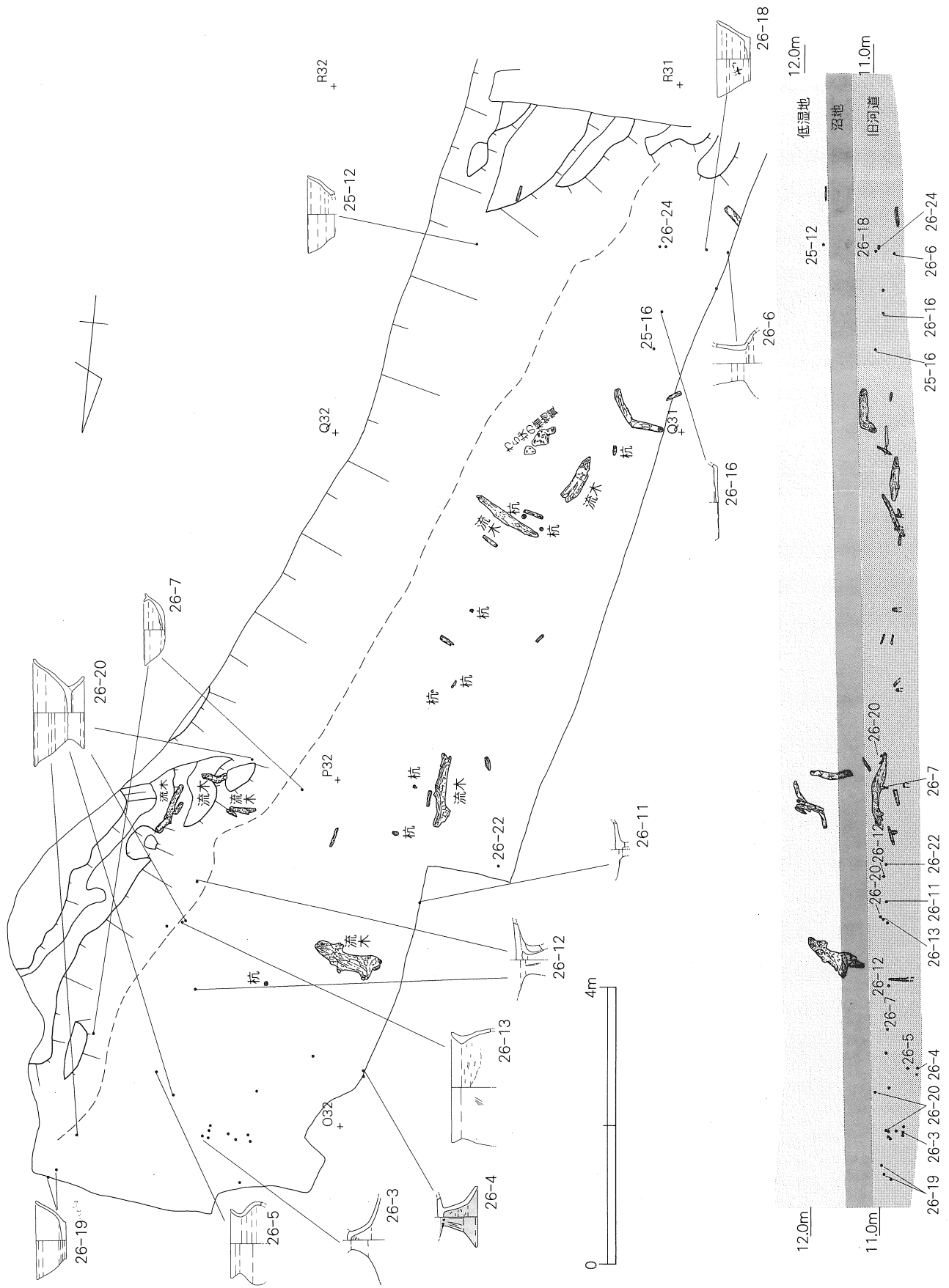
沼地（17層）

上層に比べると若干遺物量が増える。

25-21～24は須恵器である。21は子持ち壺の子壺のひとつではないかと考えられるものである。薄く



第26图 c区遺構外出土遺物実測図2 (1~25: 旧河道、26~30: 出土地不明) S = 1/3



第27图 N ~ Q-30~32Gr内遺物出土状況図 (S = 1/80)

て軽い焼成、開いた口縁部から細くしまった頸部へとつづく。22は長径壺で、ふたつの破片が直接接合はしないが同一個体となる。胴部が張るタイプで、頸部には明瞭な、段違いに接合してある接合痕が観察される。胴部の接合痕の上と下では回転ナデの方向が逆向きである。23は直口壺の口縁部で、25-16と同タイプである。中央に回転ナデによる沈線状のものあり。24は高坏で、接合部径と底径の差が少なく安定感のある低めの脚柱部で、坏部がなだらかに立ち上がる。スカシは2ヶ所あるが、一方は逆三角形のスカシ、もう一方は切れ込みのようである。

25-25・26は土師器の高台付きの坏である。風化が著しく調整痕及び高台端部の残存が不明瞭であるが、25はやや長めの内湾した高台で、立ち上がりが深い。26の高台部はさらに足長となり、接合した後に胴部と一体となるような調整を施していないので、足高高台となるひとつ前の段階のものであろう。

25-27・28は円筒埴輪の破片である。タガのない部分であるが、27の下端が外反しているのとヨコナデ調整を行っているので、下へタガが付くものと思われる。27と28は調整（27は細かいが、28は荒い）と色調（27は灰橙褐色、28は橙褐色）に差異があり、別個体の可能性が高い。

旧河道（18・19層）

旧河道からは遺物の出土量が増えるばかりでなく、残存率も良くなってきた。

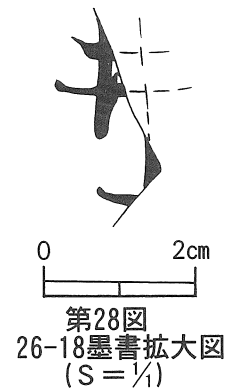
26-1～3は古式土師器である。1・2は甕の口縁部で、1は外反し複合口縁としての段が中央に残る。2は内湾した口縁部で、外面には複合口縁の残影としてのわずかな膨らみをみせる。口縁端部は平坦ぎみで外へ出る。3は低脚高坏と考えられる脚部である。径の小さな接合部からラップ状に広がり、中央部から裾広がりとなる。

26-4は土師器の高坏の脚部である。接合部からスカート状に開く脚柱部で、中央よりやや下から屈折し直線的に裾広がりとなる。内外面とも朱塗りが施されている。

26-5～12は須恵器である。5は子持ち壺の子壺ではないかと考えられるものである。丸みを帯びたプロポーションで口径に比して胴部が張る。内外面とも調整が口縁部から胴部にかけて連続して行われており、口縁部としての丁寧な調整ではない。同じ子壺でも25-21とは形態が違う。6は長頸壺で、やや外傾する頸部をもち、差し込み状で段ができている頸部と胴部の接合痕がよく観察できる。7～10は坏である。7は坏身にかえりの付く最終段階で、最も径の小さなタイプである。丸みを帯びた底部から内湾して立ち上がり口縁端部は外傾する。底部はヘラ起こしである。8は口縁部が欠損したものであるが、底部はヘラ起こしで、器壁に立ち上がる位置に回転ナデによる凹みを施し、屈曲しながら立ち上がる。9は器壁の直立ぎみのもので、口縁部はゆるく屈曲する。10は小さめの高台が外寄りに付くもので、器壁は内湾ぎみに立ち上がる。11・12は高坏であるが、11の接合部径は2.3cmしかなくかなり小さいため、長脚無蓋高坏を想定している。12は坏部と脚部を別々に成形して接合している。一對2ヶ所の切れ込み状のスカシがある。

26-13～20は土師器で、13は甕、他は坏である。13は胴部のあまり張らないプロポーションを呈し、内面頸部は「く」の字状に屈曲し厚みのある短めの口縁部へと続く。14は内湾して立ち上がり口縁部はゆるく屈曲する。15～17は底径のやや広い坏である。底部ヘラ起こしで、16には凹凸がある。17は

底部から直線的に立ち上がるが、薄手なのでナデの圧力により器壁が波打っている。15・17は底面以外に朱塗りを、16は内面に暗褐色状のものを外面に煤を塗りつけている。また16の内面には3本のヘラ描きが認められる。18は今回の調査にて唯一の墨書土器である。底部は回転糸切りで、器壁へは角張った直線的な立ち上がりを見せる。墨書は外面胴部中央付近に横方向で「井」（第28図）と読みとれる。島根県教育委員会調査区にて同様な土器^{注2}に横方向で「上井」と書かれた墨書土器が出土しており、あるいは「井」の上にも文字が書いてあった可能性もある。19は口径に比してやや小さい底部で、内湾ぎみに立ち上がり口縁端部はそのままおさめる。底部回転糸切りである。20は足高高台と呼ばれるもので、高台が2.5cm以上ある。外湾してのびる坏部は内湾ぎみに深く立ち上がり、口縁部は外傾する。底部は中央に回転跡がわずかに残るが、周囲はナデにより消されている。



26-22は製塩土器ではないかと想定される小破片である。手捏なので口縁部は波打ち胴部は凹凸しているが、砲弾状のプロポーションを呈すると考えられる。胎土には小豆色の粒子を含み、粉っぽい。26-23は黒色土器で、内面のみ黒くしたものである。かなりの薄手で直線的にのび、口縁端部は外傾する。26-24は土師器のこね鉢であろう。内面に荒い横位のハケ目が施されている。口縁端部は断面矩形の平坦面をもつが、作りが粗雑なため一定の幅をもたない。外面胴部に貼り付けしたものが取れたような痕跡がある。

26-21は18層出土の円筒埴輪の破片で、幅9mm、突出長4mmのタガを有するものである。26-25は19層出土の竈の庇の一部で、接合部分から剥ぎ取れたものである。庇の長さは残存部分でも0.7~2.1cmと不揃いである。

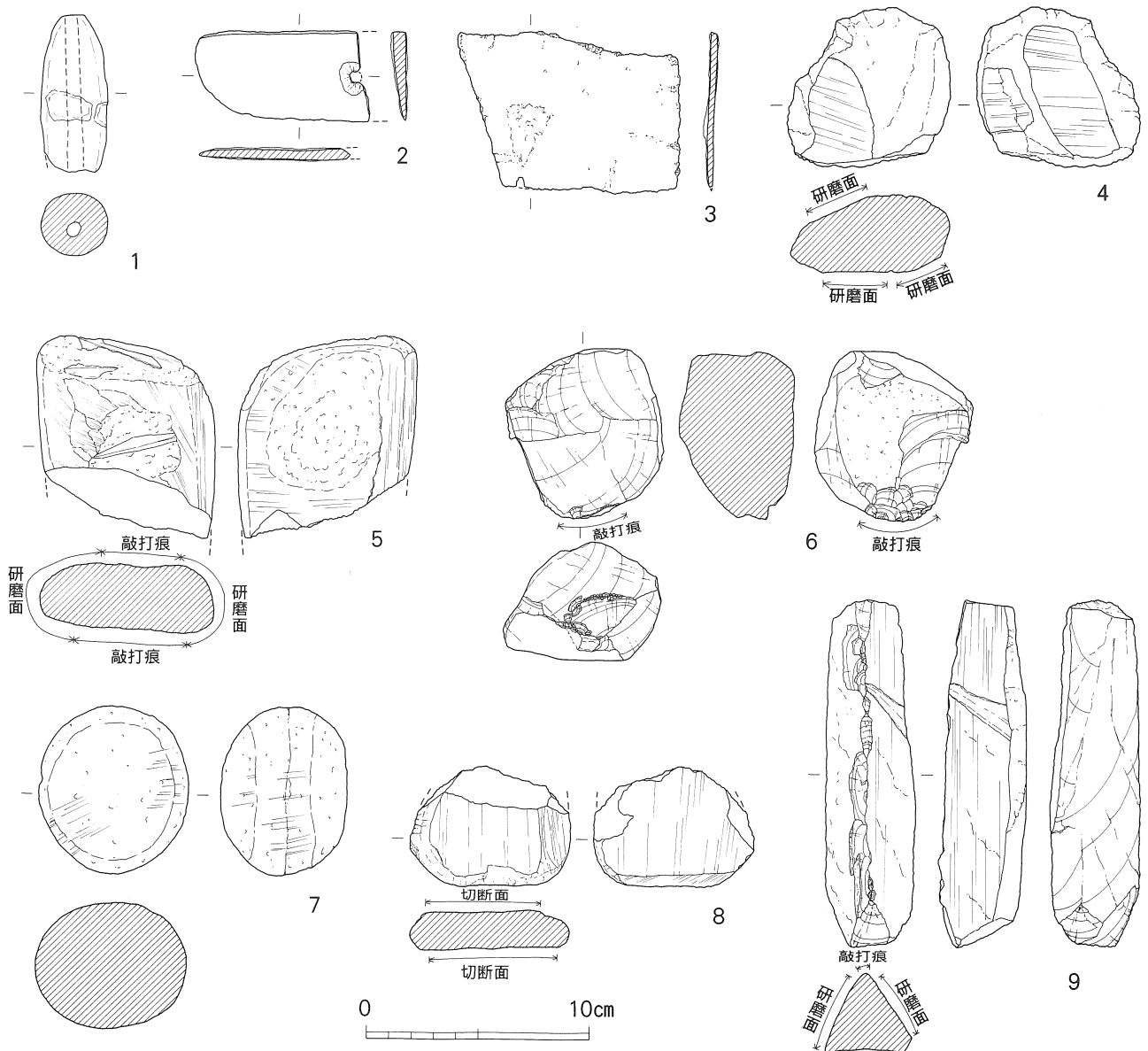
出土地不明

26-26・27・29はN~Q Gr内の旧河道として18・19層を掘削して出た廃土中から取り上げたもので不正確ではあるが、ほぼこの層に相当すると考えられる。26-30はP 32 Gr内の調査区東壁に沿って排水溝を掘削中に8層以下から出土したものである。26-28に関してはc区を掘削して出た廃土中から取り上げたものという以外は不明である。

26~28は土師器である。26は甕で、26-1と同形態のものである。27は直口壺である。よく張った肩部からやや外傾して立ち上がる直口を呈する。外面及び内面頸部以上に朱塗りが施してあり、口縁部内面には格子状の暗文が観察できる。おそらく外面にも施されていたであろうが剥落のために不明である。28は高坏の脚裾部である。端部は断面矩形で、直線的に平たく立ち上がり、屈曲した部分まで残存する。外面に朱塗りが施してある。29は須恵器の坏で、底径が小さく立ち上がり早い小ぶりのものである。30は備前焼の播鉢で、外面の器壁が凹凸の荒い調整である。使い込んだようで滑らかである。

鉄製品

29-2は刀状の鉄器である。峰があり片刃であるので刀状とはしたが、ちょうど欠損した部分にかけて

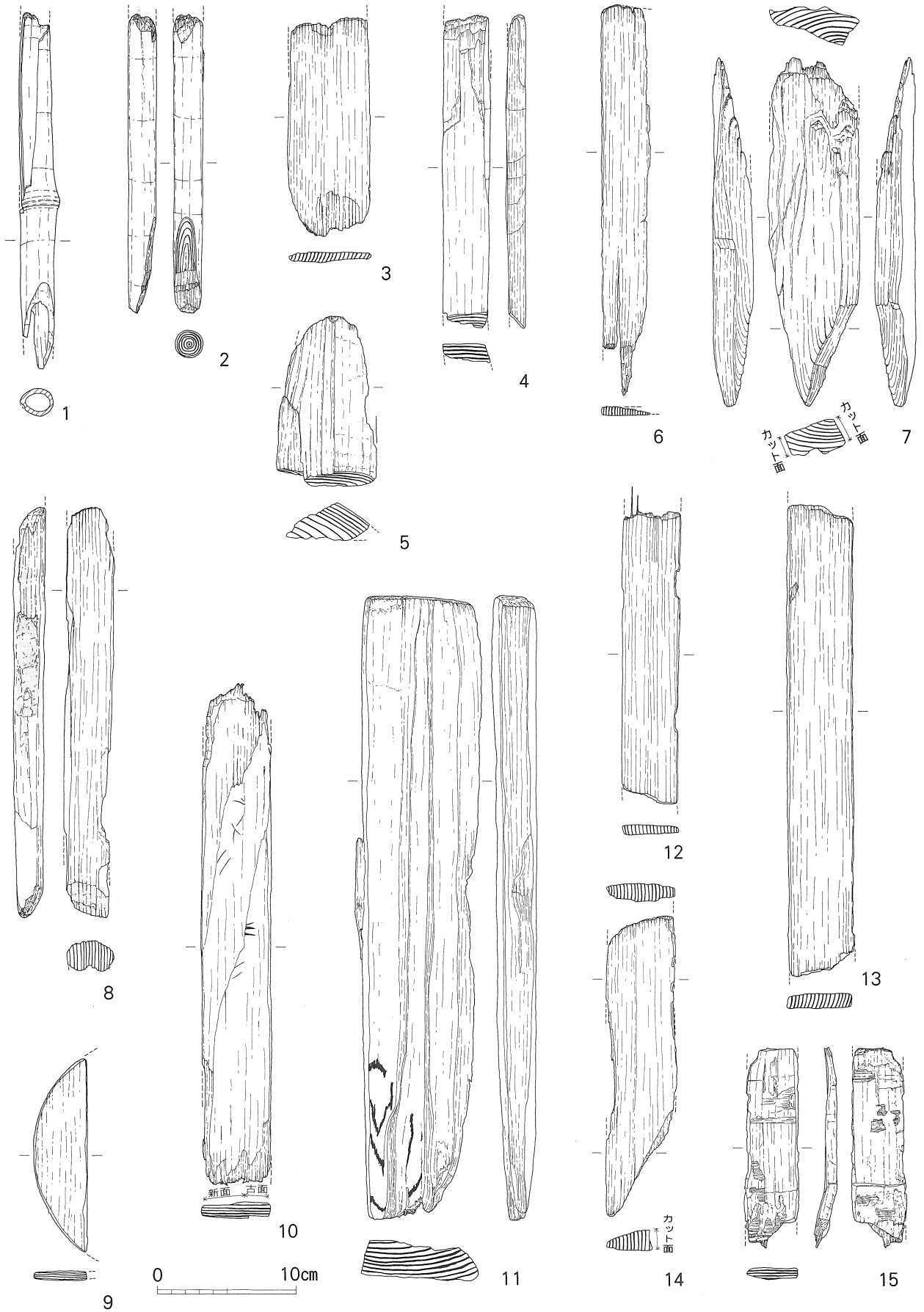


第29図 c区遺構外出土遺物実測図3 (S=1/3)

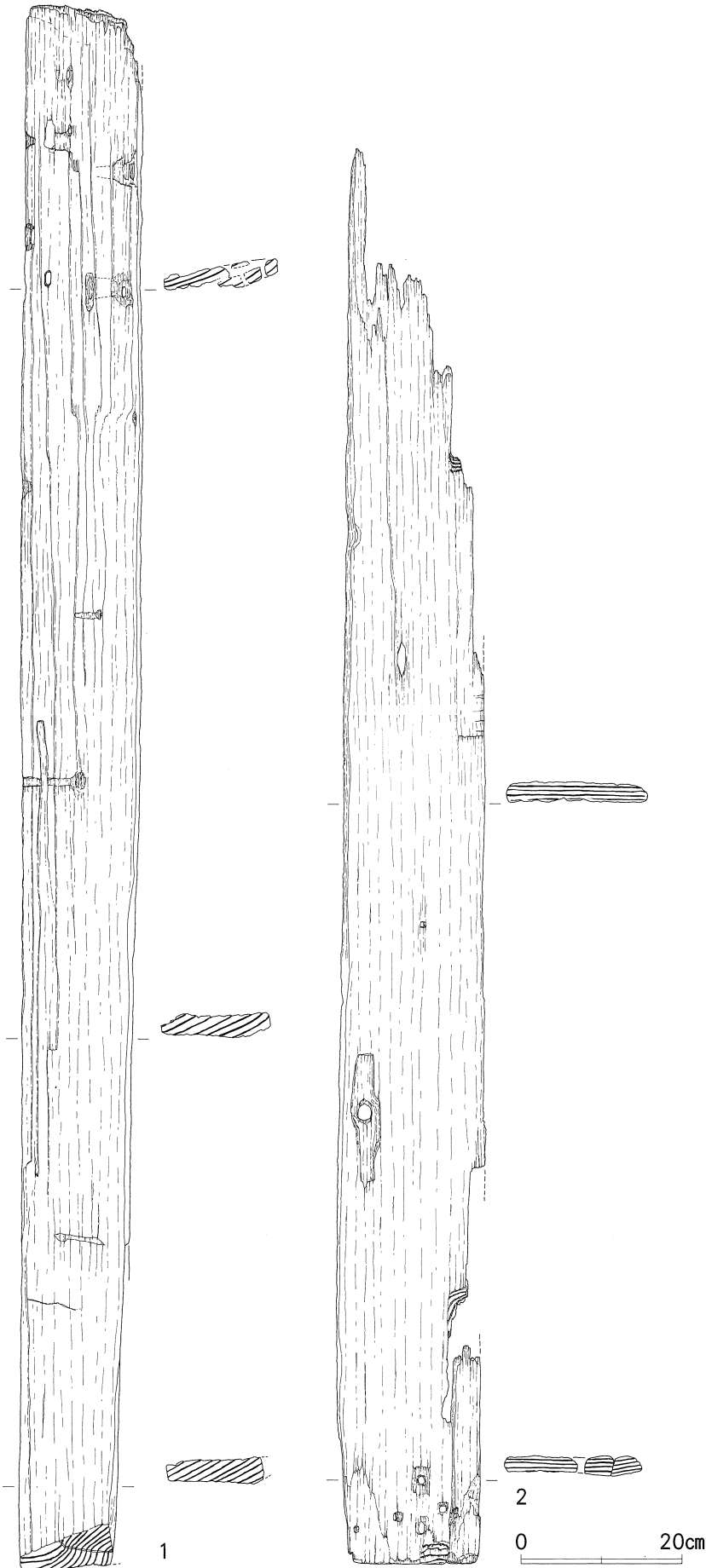
孔が穿ってあるため、他の器種も想定できよう。29-3は厚さ0.3cmと薄く板状のものであるが、厚さの割に錆の付着が多く実際の鉄の表面が観察しにくい、わずかに観察できる辺が刃部状になっているので、3も刃物の一種である可能性がある。

石製品

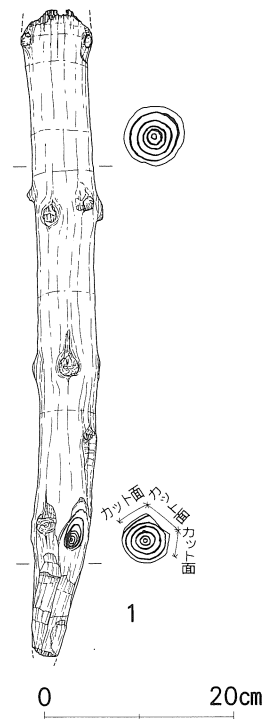
石製品として6点(29-4~9)を出土層位順に掲載した。4は砥石である。風化著しく表裏面の一部に研磨面を残すのみである。5も砥石の一種である。全体に研磨してあり、表裏面中央に凹んだ敲打痕、表面に3ヶ所刃傷らしき痕跡あり。6は礫を打ち欠いて握りやすくし尖った縁辺部を敲打している。剥離面の稜線は鋭く残るため残核の可能性もある。7は磨石と考えられるもので、片手で握るのに良い大きさの丸石である。8は表裏面にカットを入れ、平坦面を作るものである。何かの未成



第30図 c区出土木製品実測図 (S = 1/4)



第31図 杭列4出土木製品実測図1 (S=1/8)



第32図 杭列4出土
木製品実測図2 (S=1/8)

品か。9も未成品と考えられるもので、断面三角形に作り出した棒状のものである。一縁辺に敲打痕、2面に研磨痕が確認できる。

木製品

遺構内出土以外のものとして、4・9層からは10cm角までの小さな板クズ数点、11・13層からは30-3・4、17層からは30-5～7、18・19層からは30-8～15がそれぞれ出土している。

9は曲物の底板の一部である。縁辺部などに木釘の痕跡は確認できない。10は板状のものであるが、表面を刃物で2回削り取ったような痕跡があり、木筒を想定し、X線カメラで観察したが、墨書はなかった。8は幅のある棒状のもので、両側縁と先端部を焼いて強化している。7・14は木杭である。丸い自然木を利用したものではなく、板状のもの、14は一側縁を7は二側縁をカットして先端部を作り出している。3・4・6・11～13は板材である。3はわりと幅のある薄手のもの、4・6・12・13は幅に比してやや長めのものである。4の一側縁には細かくカットした稜線が観察できる。これは表面に丁寧な加工を行っているので、その一環のものであろう。11は他のものと比すると厚みもあるしっかりしたものであるため、建築部材の可能性もある。5・15は部材である。5は上下端ともに人工的にカットしてあるので、廃材の可能性もある。15は切れ込みがあることと木自体の柔軟な性質を利用した何かの部材と考えられる。

注1 川上 稔『上長浜貝塚』1996 出雲市教育委員会

注2 島根県教育委員会で平成10年度調査区から出土している。熱田氏のご厚意により実見させていただいた。

表5 c区出土遺物観察表（文章表現を特にしない内容：「調整」が、2種類以上で併書してあるものは上位から下位への調整、「→」は新旧表現）

遺物No	出土地点	調整	胎土	色調	焼成	残存率	計測値及び備考
23-1	V29Gr 9層	外：回転ナデ 底部：回転糸切り 内：回転ナデ	微砂粒子（石英・長石など）含み、緻密	淡橙褐色	良好	底部 1/4	底径4.4cm
23-2	U29Gr 9層	底部：回転糸切り 内：強い回転ナデ	1mm以下の砂粒子（長石・石英など）含む	灰橙褐色	普通	5.5×3cm 角	
23-3	U29Gr 9層	施釉	暗褐色微細粒子含み、緻密	青緑灰色	良好	8×2.5cm 角	
25-1	U30Gr 5層	外：回転ナデ 内：回転ナデ	微砂粒子（長石・石英など）含む	灰色	良好	5×3cm角	
25-2	X28Gr 5層 7層	外：ナデ 内：ナデ	1mm以下の砂粒子（長石・石英など）含む	淡灰色	普通	1/4	
25-3	U29Gr 5層 7層	外：回転ナデ 底部：ヘラ起こし 内：回転ナデ・ナデ	1mm以下の砂粒子（長石・石英など）及び若干の1～2mm大の砂粒子含む	暗灰色	良好	1/2	口径11.3cm 器高3.4cm 底径6.0cm

遺物No	出土地点	調整	胎土	色調	焼成	残存率	計測値及び備考
25-4	U30Gr 4層	外：回転ナデ・ヘラケズリ 底部：ヘラ起こし 内：回転ナデ・ナデ	微砂粒子（長石・石英など）含む	外：灰色 内：暗灰色	良好	5 cm角	
25-5	U30Gr 5層	外：回転ナデ 内：回転ナデ	微砂粒子（長石など）含む	暗灰色	良好	口縁部 1 / 6	口径11.0cm
25-6	U29Gr 5層 6層	外：回転ナデ 底部：ヘラ起こし 内：回転ナデ・ナデ	微砂粒子（長石・石英など）及び若干の1 mm大の砂粒子含む	灰色	良好	口縁部 1 / 7	口径11.2cm 器高3.6cm 底径5.8cm
25-7	Y29Gr 4層	外：回転ナデ 底部：不明 内：回転ナデ	若干の微砂粒子（石英・長石など）含む	淡黄褐色	普通	底部 1 / 9	口径10.5cm 器高1.35cm 底径9.0cm 内外面とも朱塗り
25-8	U29Gr 4層	外：回転ナデ 底部：回転糸切り 内：回転ナデ	微砂粒子ほとんど含まず、堅緻	外：黒褐色 内：暗赤褐色	良好	底部 1 / 4	底径7.2cm 内面赤色顔料塗布のち外面煤付着
25-9	N31Gr 5層	外：ナデ 内：強いナデ	1 mm以下の砂粒子（長石・石英など）含む	外：暗赤褐色 断面：暗赤褐色	良好	6 cm角	
25-10	Y29Gr 5層	外：施釉 内：施釉	緻密	淡緑灰色	良好	底部 1 / 4	内面平行2本線の染付あり 畳付部分は、露胎で砂目積み痕あり
25-11	T30Gr 13層	外：ナデ・回転ナデ 底部：回転糸切り 内：ナデ	微砂粒子（長石・石英など）及び若干の1～2 mm大の砂粒子含む	褐灰色	良好	底部 1 / 4	底径7.0cm
25-12	Q31Gr 13層	外：回転ナデ 底部：静止糸切り 内：回転ナデ	微砂粒子（石英・赤褐色粒子など）及び若干の2～4 mm大の砂粒子含む	淡灰色	普通	口縁部 1 / 10 底部 1 / 7	口径11.2cm 器高4.0cm 底径6.4cm
25-13	X28Gr 7層	外：回転ナデ 内：回転ナデ	若干の微砂粒子（石英など）含む	暗灰色	良好	口縁部 1 / 13	口径19.8cm
25-14	U29Gr 7層	外：ナデ 内：ナデ	1 mm以下の砂粒子（石英・長石など）含む	灰色～褐灰色	良好	9 × 4 cm角	外面突帯下に竹管文あり
25-15	O31Gr 9層	外：回転ナデ 底部：ヘラ起こし 内：回転ナデ	微砂粒子（長石など）含む	灰色	良好	口縁部 1 / 2	口径9.4cm 器高3.35cm 底径5.0cm 底面に「×」のヘラ記号あり
25-16	Q31Gr 11層 18層	外：回転ナデ 内：回転ナデ	微砂粒子（長石・石英など）含む	灰色	良好	4 cm角	外面にヘラ記号あり
25-17	Q31Gr 11層	外：回転ナデ 内：回転ナデ	微砂粒子（長石・石英など）含む	灰色	良好	5 cm角	
25-18	W28Gr 11層	外：ナデ 底部：回転糸切り 内：ナデ	微砂粒子（石英・長石など）及び1 mm大の砂粒子を若干含む	暗黄褐色	普通	底部 1 / 4	底径6.2cm

遺物No	出土地点	調 整	胎 土	色 調	焼成	残存率	計測値及び備考
25-19	P32Gr 12層	不明	微砂粒子（石英・長石・ 角閃石など）含む	淡橙褐色	普通	1 / 7	口径7.4cm 器高1.4cm 底径4.4cm 内面に朱塗りらしき 痕跡あり
25-20	R31Gr 8'層	外：施釉 底部：ヘラ切り 内：施釉	空気孔がありやや荒い	黄緑灰色 露胎：灰色	良好	底部 1 / 2	底径5.5cm
25-21	Y28Gr 17層	外：回転ナデ 内：回転ナデ	微砂粒子（長石など） 含む	灰色	良好	口縁部 1 / 6	口径9.6cm
25-22	Y-28・29Gr 17層	外：ナデ 内：ナデ・回転ナデ	微砂粒子（石英・長石 など）含む	外：赤灰色 内：灰色	良好	10×4cm角	
25-23	Q31Gr 17層	外：回転ナデ 内：回転ナデ	若干の微砂粒子（長石・ 石英など）含む	灰色	良好	5cm角	
25-24	Y28Gr 17層	外：ナデ 脚柱内部：ナデ 内：ナデ	微砂粒子（長石・石英 など）含む	灰色	良好	坏部 過半以下 1 / 3	底径8.0cm
25-25	O32Gr 17層	外：ナデ 他：不明	微砂粒子（石英・長石 など）及び若干の1～ 2mm大の砂粒子含む	灰黄褐色	普通	底部 1 / 4	底径7.4cm
25-26	Q31Gr 17層	外：ナデ 他：不明	1mm大の砂粒子（石英・ 長石・角閃石など）含 む	灰橙褐色	普通	底部 1 / 4	底径8.0cm
25-27	N32Gr 17層	外：荒いたてハケ目・ ヨコナデ 内：荒いヨコハケ目	1～2mm大の砂粒子 （長石・石英など）含む	灰橙褐色	普通	9cm角	
25-28	O31Gr 17層	外：荒いたてハケ目・ 板状工具による強いナデ 内：板状工具による強いナデ	1～3mm大の砂粒子 （長石・石英など）含む	橙褐色	普通	6cm角	
26-1	O31Gr 19層	外：ナデ 内：ナデ・ケズリ	微砂粒子（石英・長石・ 角閃石など）含む	暗黄褐色	普通	口縁部 1 / 8	口径13.6cm 外面及び内面口縁部 に朱塗りらしき痕跡 あり
26-2	O32Gr 19層	外：ナデ 内：ナデ	1mm以下の砂粒子（石 英・長石・角閃石・金 雲母など）含む	灰黄褐色	普通	口縁部 1 / 9	口径19.6cm
26-3	N32Gr 19層	脚柱内：ケズリ・ナデ 他：不明	1mm以下の砂粒子（石 英・長石・角閃石など） 多く含む	淡黄褐色	やや 不良	脚柱部完	脚注部径2.6cm
26-4	O31Gr 19層	外：ハケ目・ミガキ・ 不明 脚注内：ケズリ・ナデ	1mm以下の砂粒子（石 英・長石など）含む	暗橙褐色	普通	脚柱部完 裾部 1 / 3	底径8.6cm 内外面とも朱塗り痕 あり
26-5	O32Gr 19層	外：回転ナデ 内：回転ナデ	微砂粒子（長石・石英 など）及び若干の1mm 大の砂粒子含む	灰色	良好	口縁部 1 / 10	口径9.8cm

遺物No	出土地点	調整	胎土	色調	焼成	残存率	計測値及び備考
26-6	Q30Gr 19層	外：回転ナデ・ナデ 内：回転ナデ・ナデ・ 回転ナデ	微砂粒子（長石・石英 など）含む	暗灰色	良好	頸部完	頸部径5.3cm
26-7	032Gr 18層	外：回転ナデ 底部：へら起こし 内：回転ナデ	1mm以下の砂粒子（石 英・長石など）含む	灰色	良好	1/2	口径9.4cm 器高3.1cm 底径4.0cm 内面底部付近に「×」 のへら記号あり
26-8	Q31Gr 18層	外：回転ナデ 底部：へら起こし 内：回転ナデ	微砂粒子（長石・石英 など）含む	灰色	良好	底部 1/4	底径5.0cm
26-9	Q30Gr 19層	外：回転ナデ 内：回転ナデ	微砂粒子（長石など） 含む	暗灰色	良好	口縁部 1/8	口径10.8cm
26-10	Q31Gr 19層	外：回転ナデ 底部：板目→回転ナデ 内：回転ナデ	微砂粒子（長石・石英 など）含む	灰色	良好	底部 1/9	底径10.0cm
26-11	031Gr 18層	外：回転ナデ 内：回転ナデ	微砂粒子（石英・長石 など）含む	暗灰色	良好	接合部完	接合部径2.3cm
26-12	032Gr 18層 19層	外：回転ナデ 脚注内：ナデ 内：ナデ	微砂粒子（石英・長石 など）及び若干の1～ 2mm大の砂粒子含む	灰色	良好	坏底部 3/4	接合部径4.0cm
26-13	032Gr 18層	外：不明 内：ナデ・ケズリ・ナデ	1mm以下の砂粒子（石 英・長石・黒色粒子な ど）を多く、また若干 の角閃石と金雲母を含 む	灰黄褐色	普通	口縁部 1/9	口径15.8cm
26-14	R30Gr 18層	外：回転ナデ 内：回転ナデ	微砂粒子（長石・石英 など）含む、緻密	橙褐色	良好	口縁部 1/8	口径13.0cm
26-15	032Gr N32Gr 19層	外：ナデ 底部：へら起こし 内：回転ナデ・ナデ	少量の微砂粒子（長石・ 石英など）含む	橙褐色	普通	底部 1/4	底径8.1cm 底面以外朱塗り
26-16	Q31Gr 19層	外：ナデ？ 底部：へら起こし 内：ナデ	若干の微砂粒子（石英・ 長石など）含む、やや 緻密	外：煤 内：暗褐色	普通	底部 1/6	底径10.0cm 底部内面へら描き 外面煤・内面暗褐色 状のもの塗布
26-17	Q31Gr 19層	外：回転ナデ 底部：へら起こし 内：回転ナデ・ナデ・ 指押さえ	微砂粒子（石英・長石・ 角閃石など）含む	暗黄褐色	普通	1/8	口径12.4cm 器高3.7cm 底径7.2cm 底面以外朱塗り
26-18	Q30Gr 18層	外：回転ナデ 底部：回転糸切り 内：回転ナデ	微砂粒子（石英・長石 など）含む	灰黄褐色	普通	1/4	口径10.8cm 器高4.8cm 底径6.2cm 外面に「井」の墨書 あり
26-19	N32Gr 18層 19層	外：回転ナデ 底部：回転糸切り 内：回転ナデ	若干の微砂粒子（石英・ 長石・角閃石・赤褐色 粒子など）及び1～2 mm大の砂粒子含む	淡黄橙褐色	良好	2/3	口径11.3cm 器高4.35cm 底径5.2cm

遺物No	出土地点	調整	胎土	色調	焼成	残存率	計測値及び備考
26-20	O32Gr P32Gr 18層 N32Gr 19層	外：回転ナデ 底部：糸切り→回転ナデ 内：回転ナデ	1 mm以下の砂粒子（石英・長石など）及び若干の角閃石を含む	にぶい淡黄褐色	普通	2 / 3	口径15.2cm 器高7.4cm 底径10.2cm 高台長2.4cm
26-21	P31Gr 18層	外：荒いタテハケ目・ナデ 内：荒いヨコハケ目（ハケ目単位6本 / 1cm）	1 ~ 3 mm大の砂粒子（長石・石英など）含む	橙褐色	普通	3.5 × 5 cm 角	タガ突出長4 mm
26-22	O31Gr 18層	外：指ナデ 内：指ナデ	1 mm以下の砂粒子（小豆色粒子、丸みのある石英・長石など）含む	にぶい橙褐色	普通	2 × 4 cm角	手捏ね
26-23	Q30Gr 19層	外：ヘラミガキ 内：ヘラミガキ	1 mm以下の砂粒子（石英・長石など）を含む	外：暗黄褐色～黒色 内：黒色	普通	口縁部 1 / 9	口径17.0cm 内黒のもの
26-24	Q31Gr 18層	外：ナデ 内：ヨコハケ目	微砂粒子（石英・長石など）をやや多く、また若干の角閃石を含む	黄灰色	普通	6 × 3 cm角	
26-25	Q31Gr 19層		1 mm以下の砂粒子（長石・石英・角閃石など）含む	黄灰色	普通	7 × 3 × 3 cm	庇長0.7~2.1cm 庇部分
26-26	O31Gr 廃土中	外：ナデ 内：ナデ・ケズリ	微砂粒子（石英・長石・角閃石など）をやや多く含む	にぶい黄褐色	普通	口縁部 1 / 6	口径15.6cm
26-27	N~QGr 廃土中	外：ナデ 内：ハケ目?・ケズリ	微砂粒子（石英・長石など）含む	朱色 他：黄褐色	普通	頸部 1 / 4	頸部径6.8cm 外面及び内面頸部に朱塗り 頸部内面に格子の暗文あり
26-28	不明	外：ヘラミガキ 内：ナデ・ハケ目	微砂粒子（石英・長石など）含む	外：朱色 内：黄橙褐色	普通	4 cm角	外面朱塗り
26-29	N~QGr 廃土中	外：ナデ・ヘラケズリ 底部：ヘラ切り 内：ナデ	微砂粒子（長石・石英など）含む	灰色	良好	底部 1 / 4	底径4.4cm
26-30	P32Gr 排水溝	外：ナデ 内：ナデ→搦目	1 mm大の砂粒子（長石・石英など）をやや多く含む	暗褐灰色	普通	5 cm角	
29-1	Y28Gr 9層	表面の凹凸は成形時または紐かけによるもの?	1 mm以下の砂粒子（長石・石英・角閃石など）含む、土師器の胎土に酷似	淡橙褐色	普通	ほぼ完形	最大長7.05cm 最大径2.9cm 孔径6~7 mm 重量51g
29-2	W29Gr 4層 4'層					右側欠損	現存長7.7cm 幅4.0cm 厚さ1~5 mm 重量73g 穿孔あり
29-3	T30Gr 5層 7層					錆付着のため不明	長さ7.2cm 幅10.0cm 厚さ3 mm 重量86g

遺物No	出土地点	調整	石材	色調	焼成	残存率	計測値及び備考
29-4	U29Gr 4'層 5層		凝灰岩			表裏面部分的に剥落	現存長7.1cm 現存幅7.2cm 厚さ3.5cm 重量185g
29-5	Y28Gr 7層		凝灰岩			片側欠損	現存長9.1cm 最大幅7.8cm 重量275g
29-6	V29Gr 7層		流紋岩			完形	最大長7.6cm 最大幅6.7cm 厚さ5.3cm 重量355g
29-7	W29Gr 9層		凝灰岩			完形	最大長7.5cm 最大幅6.7cm 厚さ5.6cm 重量365g
29-8	W28Gr 12層		凝灰岩			一部欠損	現存長5.3cm 最大幅7.2cm 厚さ1.6cm 重量72.5g
29-9	W28Gr 17層		流紋岩			完形	最大長15.5cm 幅4.0cm 厚さ3.7cm 重量240g

表6 c区出土木製品一覧表

No	出土地点	層位	レベル	種別・樹種	計測値	時期	備考
30-1	W29Gr 杭列3		上12.06m 下11.82m	竹杭 竹	現存長：25.5cm 直径：2.3cm	中世	
30-2	U29Gr しがらみ状 施設		上12.15m 下11.96m	木杭 マツ属複雑管束亜属	現存長：21.4cm 直径：2.0cm	中世	
30-3	U29Gr	11層	11.9m	板材 スギ	現存長：15.7cm 幅：5.9cm 厚さ：0.8cm～1.0cm	中世	
30-4	Q31Gr	13層	11.71m	板材 スギ	現存長：22.5cm 幅：3.4cm 厚さ：1.3cm	中世	
30-5	S30Gr	17層	不明	部材 マツ属複雑管束亜属	現存長：12.1cm 幅：7.2cm 厚さ：2.7cm	中世	
30-6	S30Gr	17層	不明	板材 スギ	現存長：28.0cm 現存幅：3.4cm 厚さ：0.7cm	中世	
30-7	P31Gr	17層	11.15m	板杭 スギ	現存長：25.0cm 幅：6.5cm 厚さ：2.8cm	中世	
30-8	O32Gr	18層	10.8m	偏平棒 スギ	現存長：29.5cm 幅：3.2cm 厚さ：2.1cm	中世	焼いて強化

No	出土地点	層位	レベル	種別・樹種	計測値	時期	備考
30-9	Q31Gr	18層	10.71m	曲げ物底板 ヒノキ	復元直径：17.4cm 厚さ：6.5cm	中世	
30-10	0~QGr内	18or19層	不明	木札か？ スギ	現存長：36.0cm 幅：5.0cm 厚さ：1.2cm	中世	ナイフ状の物で削った面あり 人工的キズ痕らしき跡あり
30-11	Q30Gr	19層	10.67m	板材 スギ	現存長：45.0cm 幅：8.6cm 厚さ：3.2cm	中世	
30-12	P31Gr	19層	10.66m	板材 スギ	現存長：21.1cm 幅：4.0cm 厚さ：0.7cm	中世	
30-13	P31Gr	19層	10.67m	板材 スギ	現存長：34.0cm 幅：4.7cm 厚さ：1.0cm	中世	
30-14	Q31Gr	19層	10.77m	板杭 スギ	現存長：21.5cm 幅：4.8cm 厚さ：1.4cm	中世	
30-15	P31Gr	19層	10.77m	部材 コナラ属アカガシ亜属	現存長：14.3cm 幅：3.7cm 厚さ：0.8cm	中世	
31-1	X・Y-28Gr 杭列4		12.44～ 12.14m	板材 スギ	長さ：193.3cm 幅：14.5cm 厚さ：2.8cm	中世	
31-2	X・Y-28Gr 杭列4		12.39～ 12.12m	板材 スギ	現存長：174.8cm 幅：17.0cm 厚さ：2.5cm	中世	
32-1	Y28Gr 杭列4		上12.36m 下11.67m	木杭 マツ属複雑維管束亜属	現存長：68.3cm 直径：6.0～6.3cm	中世	

第7章 自然科学分析等結果報告

第1節 樹種同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

三田谷 I 遺跡では、中世の河道跡が検出されている。河道の幅が最も狭くなっていると予想される地点では、杭や石を使って構築した堰堤状の遺構が確認されている。

本報告では、堰堤状施設の構築に利用された部材などを中心に、出土した木材の樹種同定を行い、用材選択に関する資料を得る。

1. 試料

試料は、堰堤状施設の部材など32点（試料番号 1～32）である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表 1 に記した。

2. 方法

各試料から 5 mm 角程度のブロックを採取し、同定用試料とした。試料は、剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

3. 結果

樹種同定結果を表 1 に示す。32 点の試料は針葉樹 4 種類（マツ属複維管束亜属・スギ・ヒノキ・カヤ）、広葉樹 5 種類（コナラ属コナラ亜属コナラ節・コナラ属アカガシ亜属・クリ・ツルウメモドキ属・ハイノキ属ハイノキ節）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・マツ属複維管束亜属 (*Pinus subgen. Diploxylon*) マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道及び水平樹脂道が認められる。分野壁孔は窓状となり、放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1～10細胞高。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞がほぼ晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、1分野に2～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、

表1 樹種同定結果

番号	出土地点	層位	時期	種別	樹種	遺物No
1	L32Gr堰堤状施設		中世	板材	スギ	15- 1
2	L32Gr堰堤状施設		中世	板材	スギ	15- 2
3	L32Gr堰堤状施設		中世	薄板	スギ	15- 3
4	L32Gr堰堤状施設		中世	部材	スギ	15- 4
5	L32Gr堰堤状施設		中世	タモ?	ツルウメモドキ属	15- 8
6	L32Gr堰堤状施設		中世	部材	スギ	15- 5
7	L32Gr堰堤状施設		中世	板材	スギ	15- 6
8	L32Gr堰堤状施設		中世	板材	スギ	15- 7
9	L32Gr堰堤状施設		中世	木杭	カヤ	15-15
10	K32Gr堰堤状施設		中世	板状杭?	クリ	15-11
11	K32Gr堰堤状施設		中世	木杭	コナラ属コナラ亜属コナラ節	15-14
12	L32Gr堰堤状施設		中世	木杭	ハイノキ属ハイノキ節	15-13
13	L32Gr堰堤状施設		中世	木杭	カヤ	15-12
14	K32・33Gr堰堤状施設		中世	板材	スギ	15- 9
15	K33Gr堰堤状施設		中世	板材	スギ	15-10
16	X・Y-28Gr杭列4		中世	板材	スギ	31- 1
17	X・Y-28Gr杭列4		中世	板材	スギ	31- 2
18	Y28Gr杭列4		中世	木杭	マツ属複雑管束亜属	32- 1
19	U29Grしがらみ状施設		中世	木杭	マツ属複雑管束亜属	30- 2
20	O32Gr	18層	中世	扁平棒	スギ	30- 8
21	P31Gr	17層	中世	板杭	スギ	30- 7
22	P31Gr	19層	中世	部材	コナラ属アカガシ亜属	30-15
23	P31Gr	19層	中世	板材	スギ	30-12
24	P31Gr	19層	中世	板材	スギ	30-13
25	Q30Gr	19層	中世	板材	スギ	30-11
26	Q31Gr	18層	中世	曲げ物底板	ヒノキ	30- 9
27	Q31Gr	13層	中世	板材	スギ	30- 4
28	Q31Gr	19層	中世	板杭	スギ	30-14
29	S30Gr	17層	中世	板材	スギ	30- 6
30	S30Gr	17層	中世	部材	マツ属複雑管束亜属	30- 5
31	0~QGr内	18or19層	中世	木杭か?	スギ	30-10
32	U29Gr	11層	中世	板材	スギ	30- 3

1分野に1～3個。放射組織は単列、1～15細胞高。

- カヤ (*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.) イチイ科カヤ属

軸方向組織は仮道管のみで構成され、早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で、1分野に1～4個。放射組織は単列、1～10細胞高。仮道管内壁には対をなしたらせん肥厚が認められる。

- コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で孔圏部は1～4列、孔圏外で急激～緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものとの複合放射組織とがある。

- コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

年輪界を含む切片は作製できなかつたが、作製前の実体顕微鏡による観察ではブロックの端部に年輪界が認められ、その道管径の変化から放射孔材と判断できる。管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものゝ複合放射組織とがある。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

試料は、年輪界を含む僅かな部分の観察で、年輪界を挟んだ道管径の変化から環孔材と判断できる。小道管は、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

・ツルウメモドキ属 (*Celastrus*) ニシキギ科

環孔材で、孔圏部は1列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じて、漸減しながらほぼ単独で散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管の内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型～同性、単列で10細胞高前後のものゝ、8～10細胞幅、100細胞高以上のものがある。

・ハイノキ属ハイノキ節 (*Symplocos* sect. *Lodhra*) ハイノキ科

散孔材で管壁は薄く、横断面では多角形～角張った楕円形、単独および2～5個が複合して散在し、分布密度は高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性Ⅱ～Ⅰ型、1～3細胞幅、1～20細胞高で、時に上下に連結する。

4. 考 察

堰堤状施設の構築部材は、その多くがスギであり、他に針葉樹のカヤ、広葉樹のコナラ節、ハイノキ節が認められた。このことから、堰堤状施設の構築材は、建築・土木材として優れた材質を有するスギを中心とした種類構成であったことが推定される。スギは、各層から出土した木材にも多数認められていることから、本遺跡周辺で最もよく利用された木材の一つであったことが推定される。

これまでにしがらみ状遺構や堰構築材について樹種同定を行った例(島地・伊東, 1988; 伊東, 1991)を見ると、雑多な種類構成が確認されることが多い。また、時代は古くなるが、松江市西川津遺跡で行われた杭材の樹種同定結果を見ると、全体で20種類以上の木材が認められ、遺跡周辺で入手可能な様々な木材を利用していたことが指摘されている(パリノ・サーヴェイ株式会社, 1999)。これらの結果と比較すると、今回の結果はスギが多くを占めており、スギを選択的に利用していた可能性がある。しかし、コナラ節、ハイノキ節、カヤ、クリなども混じることから、周辺で最も入手が容易な木材がスギであり、その結果としてスギが多くなっている可能性もある。

スギは、日本海沿岸地域では、福井県三方低地の埋没林に多く認められ、湿地林を形成していたことが報告されている(辻ほか, 1995; 植田・辻, 1990, 1995)。この結果から、松江市西川津遺跡では、海退に伴って形成された低湿地にスギが生育していた可能性が指摘されている(パリノ・サーヴェイ株式会社, 1999)。出雲地域においても、3600～2700yBPの海面低下期に形成された三角州によって島根半島が陸続きとなり、それ以降宍道湖と神門水海に向かって三角州が前進する形で平野が広がっていったことが指摘されている(林, 1991)。したがって、本地域でもこれらの低湿地にスギが生育していたことが推定される。しかし、西川津遺跡では、稲作による低地の開発と共にスギが減少する

可能性が指摘されている（パリノ・サーヴェイ株式会社，1999）。そのため、本地域でも稲作などによりスギ林が減少した可能性があり、中世においてどの程度残存していたかは不明である。一方、万葉集巻十の春の雑歌には、「古の人の植えけむスギが枝に、霞たなびく春は来ぬらし」という歌があり、少なくとも8世紀初頭には奈良・飛鳥地方で植林されたスギが大きく成長していたことが指摘されている（島地，1986）。この結果から、本地域周辺でもスギの植林が行われ、その結果スギ材が容易に入手できた可能性も考えられる。今後、花粉分析の結果から推定される古植生とも比較して用材選択を検討したい。

また、タモ？はツルウメモドキ属であった。ツルウメモドキ属のうち、ツルウメモドキは、山野に多く生育するつる性木本で、繊維が強いことから薪などを束ねるのに用いられることがある（柴田，1957）。この事例を考慮すれば、今回の試料もツルウメモドキであり、部材を縛る際に利用されたことが推定される。

18層から出土した曲げ物底板と考えられる試料はヒノキであった。同様の事例は、各地で報告されており（島地・伊東，1988；伊東，1991；能城・高橋，1996）、現在の民俗事例（成田，1996）とも一致する。ヒノキが多く利用されている背景には、薄い板材への加工が容易であること、耐水性や防虫効果が高いこと等が考えられる。今回の結果で、他にヒノキが認められないことを考慮すれば、ヒノキ材は曲げ物等に選択的に利用され、土木材としてはあまり利用されていなかったことが推定される。

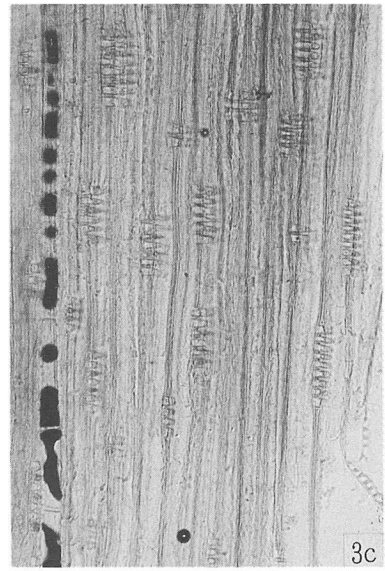
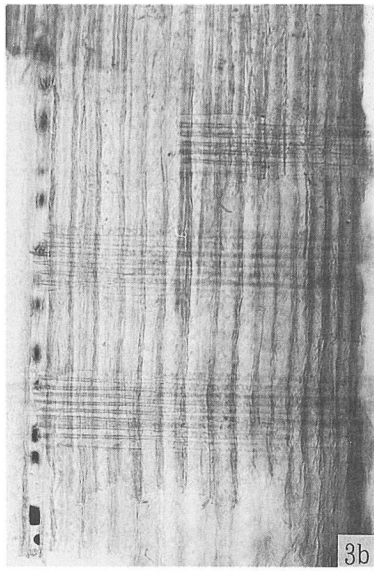
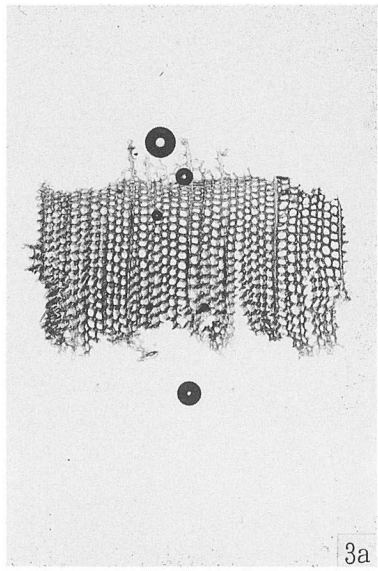
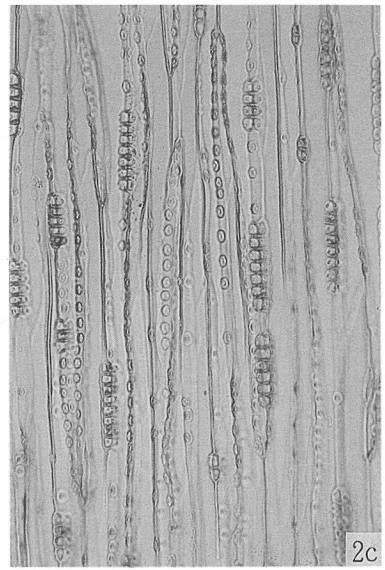
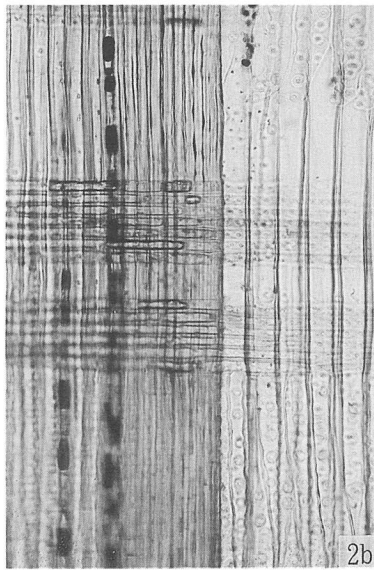
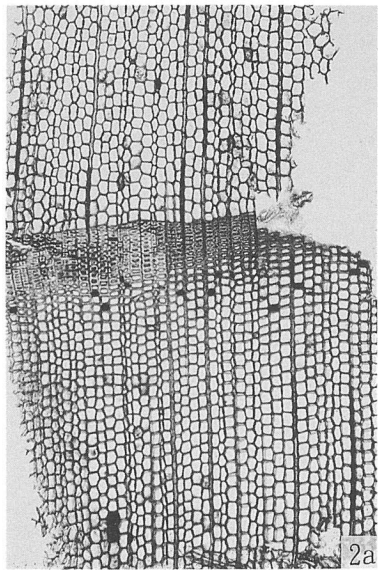
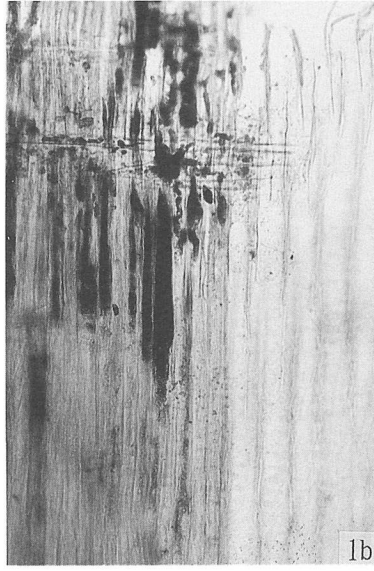
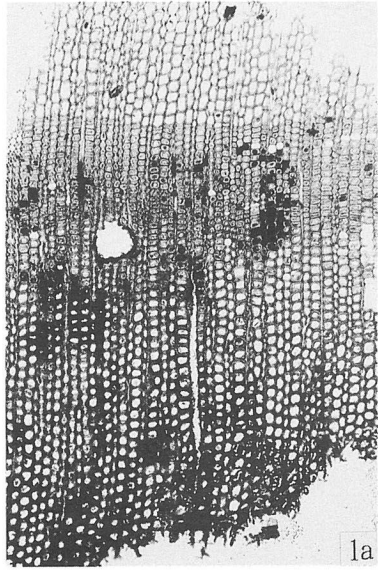
島根県では、西川津遺跡などを中心に、縄文時代～平安時代の木製品については多くの樹種同定が行われている（古野，1982，1983；渡辺，1987，1988，1990）。しかし、中世の木材について樹種同定を行った例は少なく、今後さらに用材選択に関する資料を蓄積し、より詳細な木材利用を明らかにしたい。

引用文献

- 古野 毅（1983）松江・オノ峠遺跡および西川津遺跡出土木製品の樹種識別。「島根県埋蔵文化財調査報告書 第X集」，p.51-57，島根県教育委員会。
- 古野 毅（1982）西川津遺跡出土木製品の樹種識別。「朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅱ」，p.44-46，島根県土木部河川課・島根県教育委員会。
- 林 正久（1991）出雲平野の地形発達。地理学評論，64A，p.24-46。
- 伊東隆夫（1991）日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途Ⅱ。木材研究・資料，26，p.91-189，京都大学木材研究所。
- 成田壽一郎（1996）曲物・箍物。205p.，理工学社。
- 能城修一・高橋 敦（1996）中・近世における木材利用。第11回植生史学会大会シンポジウム「中世・近世の植生史」発表要旨。p.7-11。
- パリノ・サーヴェイ株式会社（1999）西川津遺跡Ⅱ区・Ⅲ区・Ⅴ区から出土した木材の樹種。「西川津遺跡Ⅵ 朝酌川広域河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第11冊」，p.329-342，島根県土木部河川課・島根県教育委員会。

- 柴田桂太 (1957) 資源植物事典 (増補改訂版). 904p., 北隆館.
- 島地 謙 (1986) 木は語る. 「島地 謙教授 研究業績および定年退官講義録」, p.10-36, 島地 謙教授定年退官記念事業会.
- 島地 謙・伊東隆夫編 (1988) 日本の遺跡出土木製品総覧. 296p., 雄山閣.
- 辻 誠一郎・植田弥生・木村勝彦 (1995) 福井県三方低地帯南部における完新世湿地林の復元と古生 態. 植生史研究, 3 (2), p.61-70.
- 植田弥生・辻 誠一郎 (1990) 福井県三方町牛屋遺跡から出土した弥生時代以降の木材遺体群. 植物 地理・分類研究, 38, p.43-50.
- 植田弥生・辻 誠一郎 (1995) 三方低地帯北部、中山のスギ埋没林とその放射性炭素年代. 植生史研 究, 3 (1), p.33-35.
- 渡辺正巳 (1987) 西川津遺跡より出土した縄文早期末～前期初頭銚型木製品の樹種について. 「朝酌 川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅲ (海崎地区Ⅰ)」, p.262-263, 島根県土木部河川 課・島根県教育委員会.
- 渡辺正巳 (1988) 松江市西川津遺跡出土木製品の樹種について. 「朝酌川河川改修工事に伴う西川津 遺跡発掘調査報告書Ⅳ (海崎地区Ⅱ)」, p.244-260, 島根県土木部河川課・島根県教育委員会.
- 渡辺正巳 (1990) 松江市タテチョウ遺跡出土木製品の樹種の記載ーその1ー. 「朝酌川河川改修工事 に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書Ⅲ」, p.458-462, 島根県土木部河川課・島根県教育委員会.

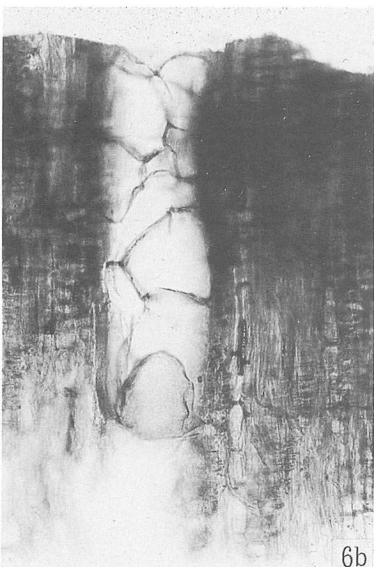
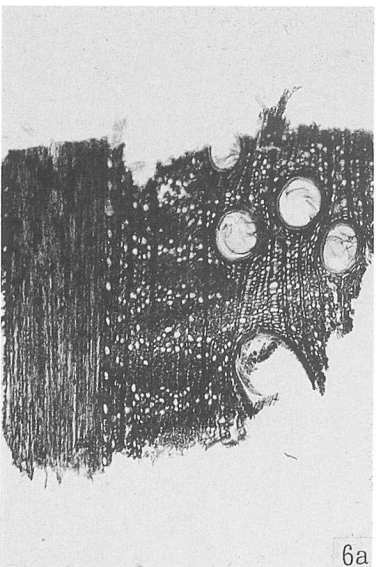
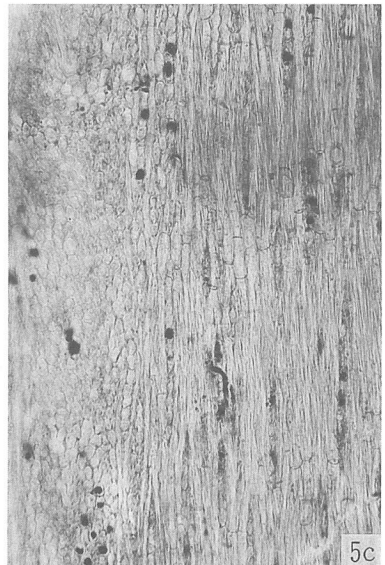
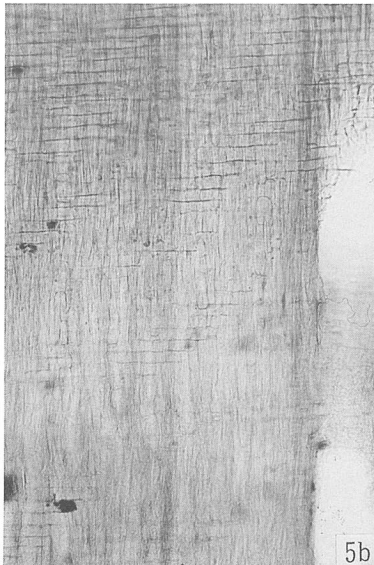
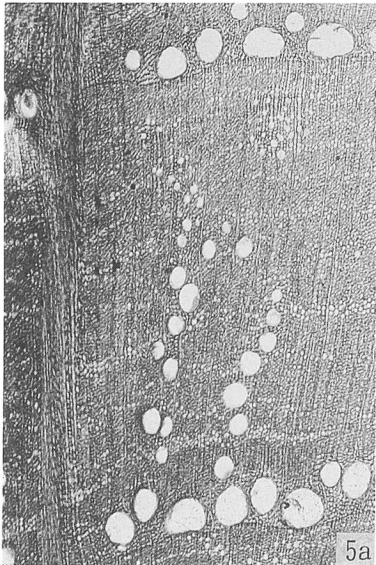
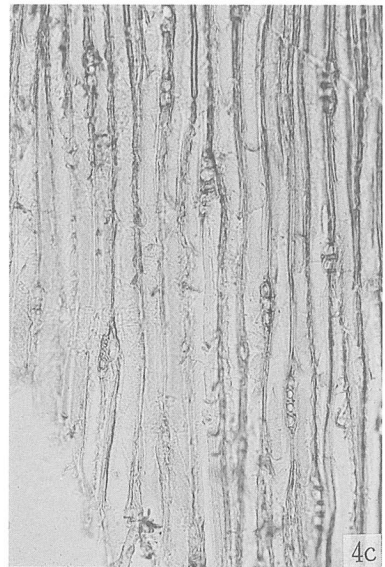
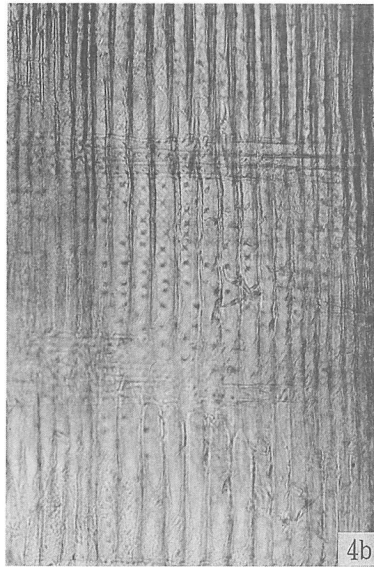
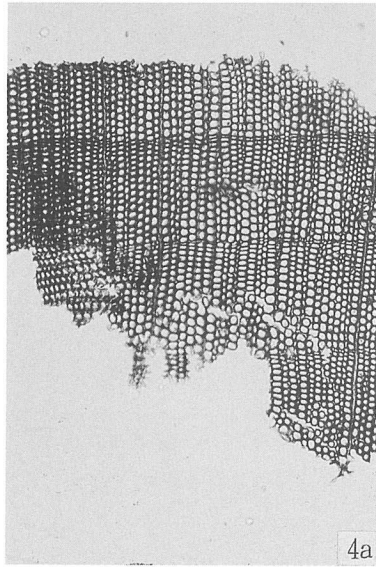
図版1 木材(1)



- 1. マツ属複維管束亜属 (試料番号30)
- 2. スギ (試料番号6)
- 3. ヒノキ (試料番号26)
- a: 木口, b: 柾目, c: 板目

200 μ m : a
 200 μ m : b, c

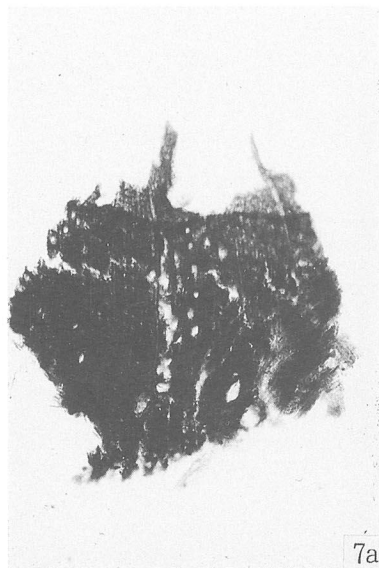
図版2 木材(2)



4. カヤ (試料番号9)
 5. コナラ属コナラ亜属コナラ節 (試料番号11)
 6. コナラ属アカガシ亜属 (試料番号22)
 a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 μ m : a
 200 μ m : b, c

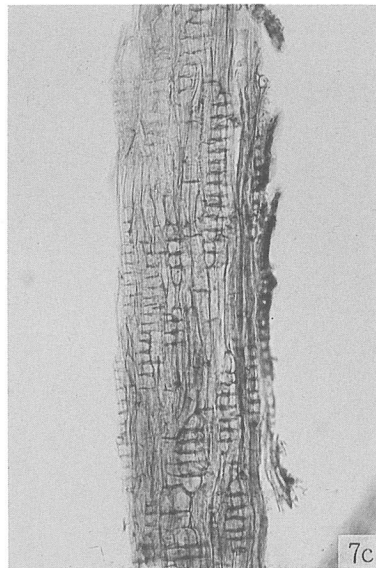
図版3 木材(3)



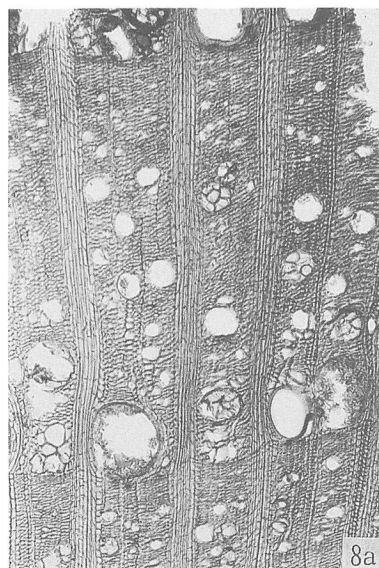
7a



7b



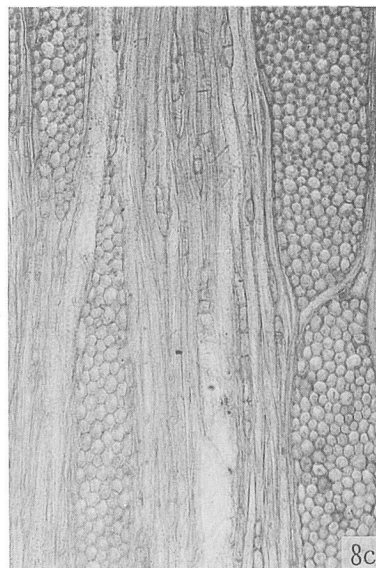
7c



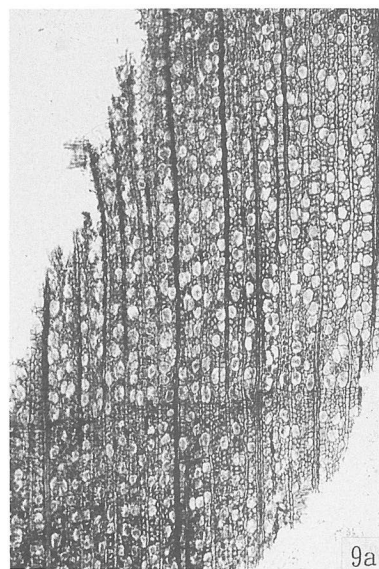
8a



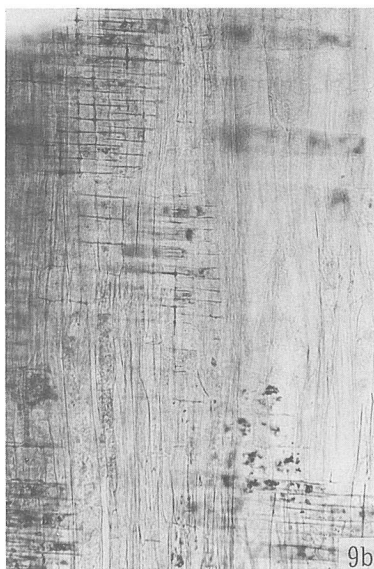
8b



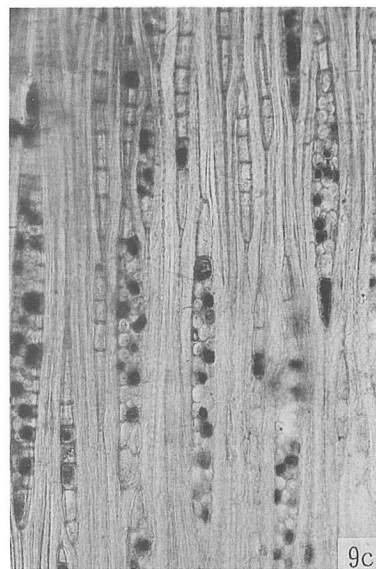
8c



9a



9b



9c

7. クリ (試料番号10)
 8. ツルウメモドキ属 (試料番号5)
 9. ハイノキ属ハイノキ節 (試料番号12)
 a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 μ m : a
 200 μ m : b, c

第2節 ^{14}C 年代測定

川崎地質 株式会社

分析試料について

図1中の矢印で示す木杭を測定試料とした。また、試料は出雲市教育委員会により採取・保管されていたものである。

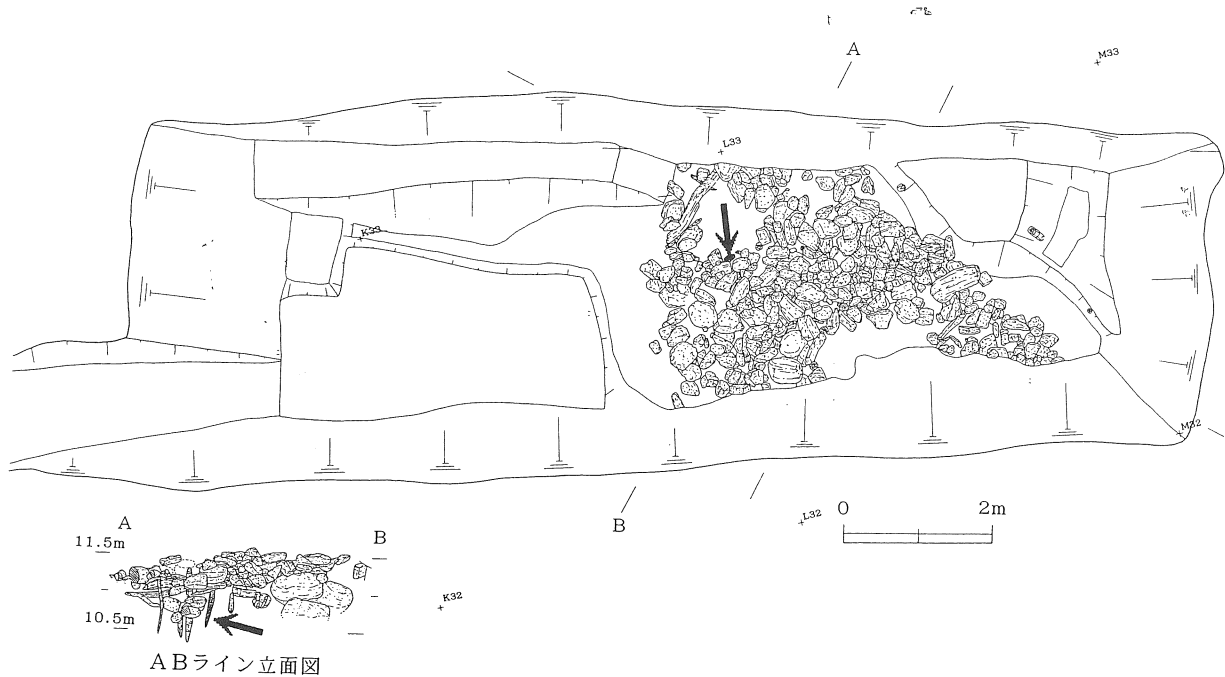


図1 測定試料の位置

年代測定結果

測定はAMS法により行った。測定結果を表1に示す。

表1 ^{14}C 年代

試料名	^{14}C 年代 (y. B. P.)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (y. B. P.)	暦年補正* ¹ (cal y.)	測定番号 (Bata-)
木杭 14	860±40	-27.9	810±40	AD1170~1280	133113

*¹: 2σ, 95%probability

第3節 三田谷 I 遺跡 c 区発掘調査に係る花粉分析

渡辺正巳（川崎地質株式会社）

はじめに

三田谷 I 遺跡は、島根県出雲市上塩冶町半分に位置する。また同遺跡は、出雲平野と中国山地縁辺が接し、中国山地奥に源を發する神戸川が出雲平野に流れ込む地域に立地する。同遺跡内では、斐伊川放水路建設に伴い発掘調査が進められており、遺跡の詳細は今後明らかになっていく。

本報告は遺跡周辺の古環境解明のために、c 区発掘調査に伴い花粉分析を行ったものである。

試料について

図1に示すc区において、試料を採取した。試料採取地点の層相、試料採取層準、および出土考古遺物よりの推定堆積年代は図2の花粉ダイアグラム左の柱状図に示すとおりである。

試料の分析処理は渡辺（1996）にしたがい行った。観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて行った。花粉分析では原則的に木本花粉総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本化石も同定した。

分析結果

図2の花粉ダイアグラムに各地点の分析結果を示す。花粉ダイアグラム中では、同定した木本花粉総数を基数にした百分率を各々の木本花粉、草本花粉について算出し、スペクトルで表した。

花粉分帯

花粉組成の特徴、および各層の対比から、以下のように地域花粉帯を設定した。以下に各花粉帯の特徴を示す。また、本文中では花粉組成の変遷を明らかにするために、下位から上位に向けて記載し、試料No. も下位から上位に向かって記した。

(1) III帯（試料No. 17～13）

マツ属（複維管束亜属）、スギ属が卓越し、アカガシ亜属、コナラ亜属を伴う。

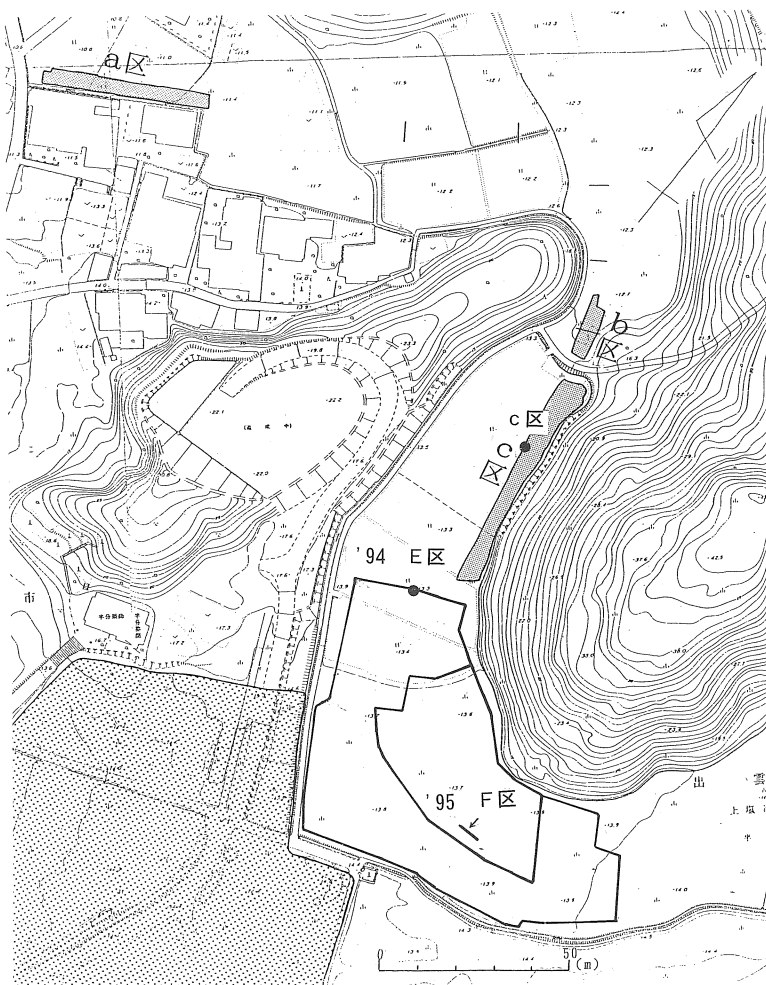


図1 試料採取位置図

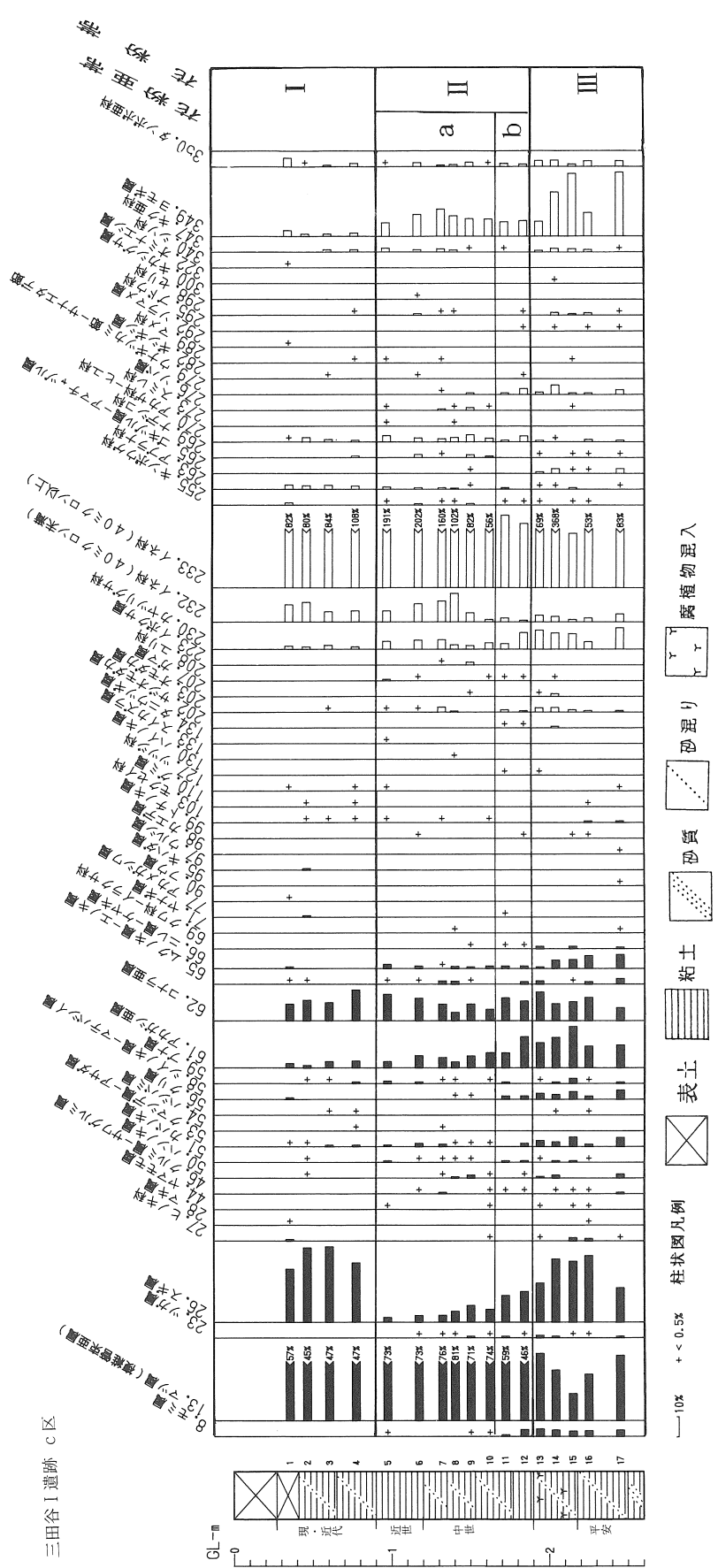


図2 花粉ダイアグラム

(2) II帯 (試料No. 12～5)

マツ属(複維管束亜属)が卓越し、スギ属、アカガシ亜属、コナラ亜属を伴う。これらのうち、試料No. 12～10ではマツ属(複維管束亜属)は顕著な増加傾向を示し、スギ属は顕著な減少傾向を示す。このことから、マツ属(複維管束亜属)、スギ属の出現率が増加・減少傾向を示すb帯(試料No. 12、11)と、出現率が安定するa帯(試料No. 10～5)に細分できる。

(3) I帯 (試料No. 4～1)

マツ属(複維管束亜属)が卓越し、スギ属を伴う。

既知の資料との比較

今回の調査地点に隣接する地区において、島根県教育委員会により発掘調査が行われており、'94 E区と'95 F区において花粉分析結果が報告されている(渡辺, 印刷中)。

図1に示すように、渡辺(印刷中)の調査地点は今回の調査地点の僅かに上流にあたり、谷の中心部に近い。また、出土遺物から古墳時代から中世にかけての堆積物が分析の対象であると考えられていた。一方、今回の分析地点は谷の中心から外れ、出土遺物から中世以降現代までの堆積物が分析の対象として考えられている。

'94 E区、'95 F区で分析を行った層準は、今回分析した層準の中部から下部および下位にあたる。'94 E区、'95 F区の分析結果では、堆積時代の一致する中世下部の層準はマツ属(複維管束亜属)およびスギ属の卓越で特徴付けられ、中世上部の層準は、マツ属(複維管束亜属)の卓越で特徴付けられていた。従って、これら花粉組成変遷と推定堆積時代の関係について'94 E区、'95 F区と今回の結果の間で矛盾はない。

一方、出雲市内では藤ヶ森南遺跡において弥生時代以降現代までの花粉分析が行われている(渡辺, 1999)。藤ヶ森南遺跡でも今回認められたスギが高率で出現する層準が認められる。渡辺(1999)はこの層準を大西(1993)との対比から奈良時代頃までに堆積したものと考えたが、その後高岡遺跡の分析結果から平安時代頃まで遡ると訂正した(渡辺, 2000)。このことは、今回得られた結果と良く一致する。

古植生変遷

ここでは、花粉分帯に対応する時期毎に、花粉分析結果より遺跡周辺の古植生を推定する。また、三田谷遺跡の概要を明確にするために、渡辺(印刷中)の内容も加味して古植生の推定を行う。また、III帯期に関しては、渡辺(印刷中)から転記する。

(1) III帯期 (古墳時代中期以前～中世)

調査地点近辺あるいは上流には谷地形を利用した水田が、またさらに上流や谷斜面にはスギ林が広がっていたと考えられる。一時的にヨモギ属、カヤツリグサ科が特徴的に検出されており、調査地点近辺にこれらの草本が密生する草地があったと考えられる。また周辺の丘陵にはアカマツやコナラ、

クヌギなどを要素とするいわゆる「里山」がひろがっていたと考えられる。また前～中期では調査地点近辺、あるいは上流の自然堤防上にエノキ属―ムクノキ属、ニレ属―ケヤキ属などを要素とする河畔林が広がっていたと考えられる。しかし、後期では、エノキ属―ムクノキ属、ニレ属―ケヤキ属などが認められなくなり、様相の変化が示唆される。

中海・宍道湖地域内の他地域（大西，1993）では、マツ属（複維管束亜属）の出現率が20%を越える時期は、シイ・ナラ亜帯（A.D. 700～1500）、あるいはマツ亜帯（A.D. 1500～1930）の時期になってからであり、今回の結果はこれよりやや早い。遺跡内、あるいは周辺の丘陵には横穴墓や古墳が多く発見されていることから、横穴墓や古墳造営のための森林伐採が、他地域に比べマツ属（複維管束亜属）の増加期が早かったことの一因と考えられる。

(2) II 帯期（中世～近世）

11、2世紀頃にはb区で堰堤状施設が構築され（出雲市教育委員会，2000）、やや遅れて15、6世紀頃には調査地点北東方権現山に半分城が存在する（西尾，1980）など、遺跡周辺の開発が急激に進む。I～II帯間での急激なスギ属花粉の減少と、堰堤状施設の構築部材にスギが多いこと（パリノ・サーヴェイ株式会社，2000）から、これらの開発のために谷奥に残っていたスギ林が伐採されたと考えられる。またスギ属花粉の急激な減少はほぼ同じ時期（中世）に出雲平野の多くの地点で観察されている。中世には塩冶氏（佐々木氏）が出雲守護として上塩冶に居館を置く（藤岡，1980）など、出雲平野周辺の開発がこの時期に一気に進んだ可能性がある。この結果、周辺の山々はアカマツ、クロマツを要素とする薪炭林へと変化したと考えられる。

一方調査地点近辺には水田が広がり、休耕田などではソバが栽培されていたと考えられる。

(3) I 帯期（近代以降）

スギ属花粉が再び高い出現率を示すが、近世以降の造林政策、特に1950年代以降の燃料革命に起因するスギ植林によると考えられる。この結果、薪炭林の広がっていた三田谷周辺には、スギ植林が広がっていったと考えられる。

また、引き続き調査地近辺には水田が広がったと考えられるが、休耕田や畦などではソバに変わりマメ類が作られたと考えられる。

まとめ

花粉分析を実施した結果、以下のことが明らかになった。

- (1) 花粉分析結果から、本地域の花粉化石群集をI～III帯の3花粉帯に分帯できた。
- (2) 渡辺（2000）の分析結果を加味することにより、古墳時代から現代にかけての遺跡周辺から中国山地にかけての古植生を推定した。特筆すべき事は、以下の事柄である。
 - ① 古墳時代以降、遺跡近辺で水田耕作が行われていた。
 - ② 中世には、遺跡内でソバ栽培が、近代以降マメ類の栽培が行われていた。
 - ③ 遺跡内あるいは上流部に分布したスギ林は、11、2世紀以降の周辺地域の開発に伴って伐採され、薪炭林へと変わっていった。

引用文献

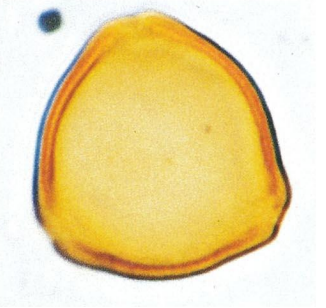
- 出雲市教育委員会（2000）「塩冶299号線道路新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－三田谷 I 遺跡」.
- 大西郁夫（1993）「中海・宍道湖周辺地域における過去2000年間の花粉分帯と植生変化」. 地質学論集, 39, 33-39.
- 西尾克己（1980）「中世城館跡」. 出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書, 150-171, 建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会編.
- パリノ・サーヴェイ株式会社（2000）「三田谷 I 遺跡から出土した木材の樹種」. 「塩冶299号線道路新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－三田谷 I 遺跡」, 55-62, 出雲市教育委員会編.
- 藤岡大拙（1980）「後塩冶氏について」. 出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書, 185-197, 建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会編.
- 渡辺正巳（1999）「藤ヶ森南遺跡の花粉、プラント・オパール分析」. 藤ヶ森南遺跡－出雲郵便局移転に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－, 31-37, 出雲市教育委員会編.
- 渡辺正巳（2000）「高岡遺跡における花粉およびプラント・オパール分析」. 「出雲ジュンテンドー敷地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－高岡遺跡」, 33-40, 出雲市教育委員会編.
- 渡辺正巳（印刷中）「三田谷 I 遺跡 '94 E 区・'95 F 区発掘調査に係る花粉分析」. 「斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ－三田谷 I 遺跡 (Vol. 3)」, 65-70, 建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会編.



マツ属：複維管束亜属



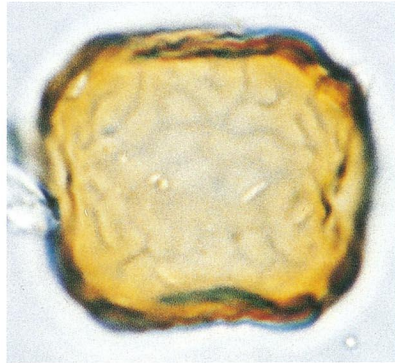
スギ属



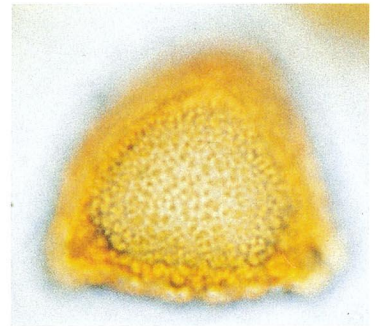
ハシバミ属



アカガシ亜属



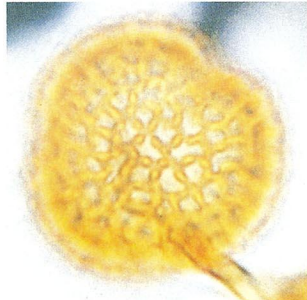
ニレ属-ケヤキ属



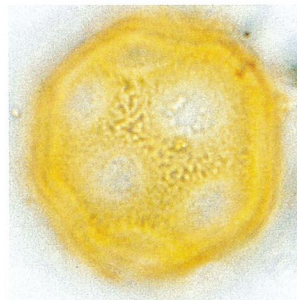
ハイノキ属



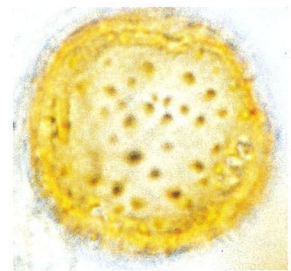
コナラ亜属



モクセイ科



サジオモダカ属



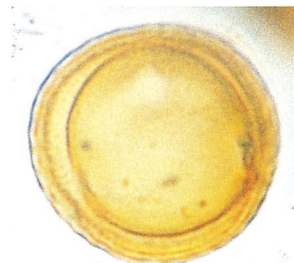
オモダカ属



ギシギシ属



ゴキヅル属-アマチャヅル属



キク亜科



ヨモギ属

花粉化石顕微鏡写真

第8章 まとめ

以上の報告より、まとめとして各項目を上げ、若干の考察をしたい。

出土縄文・弥生土器（各々は皆破片である）について

今回の調査で出土した最も古い遺物は、a区から出土した10-12の縄文時代晩期の精製された浅鉢の破片である。板屋Ⅲ^{注1}の突帯文土器に伴う精製された浅鉢Ⅷ類に類似する。出雲平野では、蔵小路西遺跡^{注2}でF1区火処出土の深鉢として紹介してある212-2が、内面はナデ調整ではあるが、同傾向の浅鉢と考えられる。また弥生時代前期の土器5点（10-4・5・10・13・14）も出土している。上記の10-12に確実に後出のものであり、松本Ⅰ-2～3期^{注3}に併行すると考えられるが、同系統の5と14では5よりも14の口唇部の方が矩型であるのと頸部のヘラ描きの平行沈線文が明瞭であるため、14の方がやや古いと判断した。

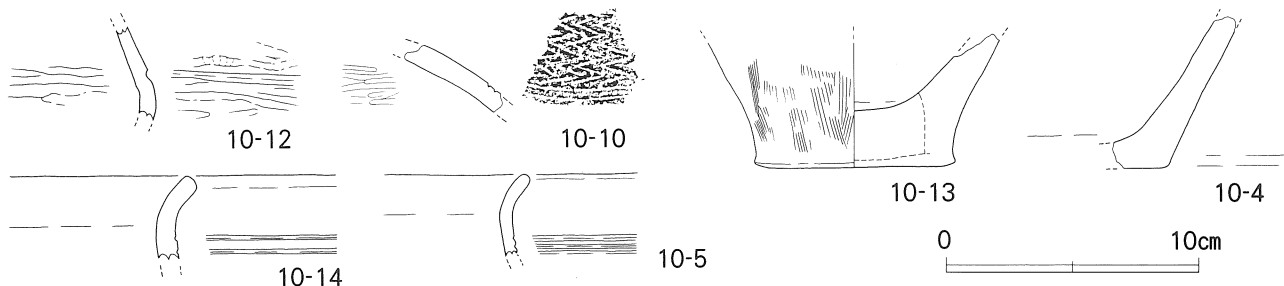
これらの遺物（第33図）はa区のみから出土している。県平成6年度調査区では旧河道から大量の縄文後晩期土器・弥生前期土器が出土している^{注4}が、今回の調査ではb・c区の旧河道上層（c区18・19層）で調査を終了しているため、b・c区では古い遺物は出土しなかったものと捉えられる。そして、上流にあった三田谷本体の集落から下流のa区へ流れてきたものと判断される。

出土円筒埴輪（各々は皆破片である）について

今回の調査で出土した円筒埴輪の破片は計8点（図版25-2）あり、図化したものは4点（第34図）である。図化できなかったものは上下方向も識別できないような破片であるが、焼成・調整などを観察すると他の4点とほぼ同様のものと思われる。1点のみ（14-3）がb区堰堤状施設上の低湿地出土であり、他の7点はc区低湿地・沼地・旧河道からと多岐にわたる。

図化した4点はともに外面調整がタテハケ目調整であり、タガを有する2点も同様であり、ヨコハケ目は確認できなかった。またタガを有する2点であるが、14-3は8mm、26-21は4mmとあまり突出した状況を呈していない。

これだけの資料ではあるが、藤永円筒埴輪編年^{注5}を参考に若干の時期設定を行いたい^{注6}。全資料とも焼成が須恵質であるので須恵器導入以後が想定される。また外面ヨコハケ無は全時期に共通しているため目安とはならないが、タガを有する資料から、4～8mmの突出度は比較的低い数値であり、藤永3新相以降（山本Ⅰ期末^{注7}以降）と大ざっぱではあるが示しておきたい。ただし、山本Ⅳ期まで下



第33図 三田谷Ⅰ遺跡出土縄文・弥生土器（S=1/3）



第34図 三田谷 I 遺跡出土円筒埴輪 (S = 1/3)



第35図 円筒埴輪出土分布図 (出雲市内)

ることはなさそうである。

次に周辺の円筒埴輪の出土状況を表7にまとめた。6古墳からの出土報告をみることができ、全て墳丘斜面などから破片として出土しているにすぎず、当時の復元を可能にするような出土状況は皆無である。今回出土した三田谷 I 遺跡のように古墳以外からの出土では、半分城跡西一郭^{注8}・下古志遺跡・浅柄遺跡などがある。半分城跡では、付近の三田谷 1・2号墳^{注9}が石室剥き出し状態で検出されており、また下古志遺跡の付近には宝塚古墳の存在、天神原古墳の破壊などの例があり、これらは元来付近に古墳の存在を想定させる。しかし全て小破片にすぎず、出雲市内地域における埴輪の貧弱さを確認することとなった。

また当調査地域周辺古墳の三田谷 1・2号墳 (山本Ⅲ期)、大井谷 1号墳 (山本Ⅳ期) 及び上塩冶横穴墓群^{注9} (山本Ⅲ～Ⅳ期) からの出土は認められず、かろうじて半分城西一郭を調査中に出土したにとどまる。また県調査区三田谷 I～Ⅲ遺跡からは円筒埴輪 1点、子持ち壺の破片^{注10}が確認されている。

表7 円筒埴輪出土一覧表（出雲市内）

遺跡名	円筒埴輪実測図 (S=1/10)	出土状況	共伴遺物	時期	備考
天神原古墳		墳丘周囲の溝状の凹地内	子持須恵器 	山本Ⅱ期	円墳？
妙蓮寺山古墳		墳丘		山本Ⅲ期	前方後円墳 (横穴式石室)
大念寺古墳		墳丘斜面		山本Ⅲ期	前方後円墳 (横穴式石室)
上塩冶築山古墳		墳丘周辺	子持須恵器	山本Ⅲ～Ⅳ期	円墳？ (横穴式石室)
宝塚古墳		墳丘周囲・石室内			外形不明 (横穴式石室)
大梶古墳		墳丘斜面			外形不明 (石棺式石室)
半分城西一郭 11K・8N 付近		包含層中	須恵器		半分城築城の際に破壊された古墳のもの？
下古志遺跡		攪乱土中（付近に古墳が存在していたものか）			下古志遺跡では古墳時代後期の遺構は検出されていない
浅柄遺跡		遺構外出土			

参考文献

- ・『中国電力高圧送電線鉄塔工事にともなう大井谷城跡・半分城跡発掘調査報告』1979 出雲市教育委員会
- ・『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』1980 島根県教育委員会
- ・藤永照隆「出雲の円筒埴輪編年と地域性」『島根考古学会誌 第14集』1997
- ・『上塩冶築山古墳の研究－島根県古代文化センター調査研究報告書4－』1999 島根県古代文化センター

未報告遺跡

- 下古志遺跡 平成7年度（1995）出雲市教育委員会調査
- 浅柄遺跡 平成10年度（1998）出雲市教育委員会調査、2000年3月報告書刊行予定
- 三田谷Ⅰ遺跡 平成6年度（1994）島根県教育委員会調査、2000年3月報告書刊行予定（掲載）

以上のように、今回出土した円筒埴輪がどのような古墳から流出したものは確認できなかった。出土状況より権現山上より落下または三田谷奥の丘陵上より流下してきたものと考えられるが、あまりに出土状況が貧弱である。当調査区からも子持ち壺の破片とおぼしき小破片も出土しているので、円筒埴輪が子持ち壺と供伴すること以外、知見を得ることはできなかった。

旧河道の埋没時期及び、堰堤状施設

今回の調査では、三田谷旧河道の層（c区18・19層）を約50cm掘削した。ここから出土した遺物から旧河道の埋没時期を設定したい。

26-1～25（第26図）が旧河道出土遺物である。時期幅がかなりあるが、その中で最も新しい遺物として、19・20がある。20はいわゆる足高高台の坏であり、19の器形はそれを踏襲している。さかのぼっても11世紀であろう。また埋没後に堰堤状施設が構築されており、それより下ることはない。

旧河道が埋没すると、三田谷では沼地であったと考えられる黒色粘土が全体に堆積する。これは流水していた旧河道の時とは違い、耐水状態を示している。

ここで考えられるのが、堰堤状施設である。調査範囲に限られてはいたが、この三田谷の最も狭い位置に築かれているということは、おそらく浄福寺のある丘陵まで延びていたものと想像され、そのため埋没し始めていた旧河道は耐水状態へと加速したのではないだろうか^{注11}。

堰堤状施設が築かれ機能していた時期であるが、時期設定できるような遺物は出土していない。そのため施設内の木杭14の年代測定を行った結果^{注12}、1170～1280年という値が出された。上記した旧河道の埋没時期とほぼ符号する^{注13}。

堰堤状施設としての報告例はほとんどないが、安来市陽徳寺遺跡^{注14}では奈良・平安時代（下限が12・13世紀）の堤と考えられる黒色粘質土が厚さ最大約2m、長さ45m以上にわたって堆積しており、調査担当者は、地形より自然の池とは考えがたく、調査区範囲外に堰堤状の施設があったと想定している。三田谷の堤も県平成9・10年度調査区からも黒色粘土を検出しているので、かなりの広範囲を堰堤状施設によって水流が堰き止められていたようである。

旧河道埋没後の谷状地形利用施設

三田谷は旧河道が埋没し、沼地となり、その後は低湿地となってゆく状況が層位より確認できた。c区ではその低湿地に権現山裾に対して、しがらみ状施設・杭列1～4を構築している。しがらみ状施設は9層、杭列1は8層、杭列2は12層、杭列3は9層、杭列4は8層からそれぞれ検出し始めており、その層位順より（堰堤状施設→）杭列2→しがらみ状施設・杭列3→杭列1・杭列4の順で下から上の段へ構築されている。堰堤状施設の時期と、23-3の鎬蓮弁の龍泉窯系青磁、25-19の土師器の小皿などが出土していることを考慮すると、これらの施設は12～13世紀を下った頃のものと考えられる。用途としては、土留め施設などが考えられるが、花粉分析の結果^{注15}からの「近辺あるいは上流には谷地形を利用した水田が・・・広がっていた」というご指摘より、水田耕作に関係する施設であることも考えられる。

上記の施設に用いられる木杭には、丸型のものの中に時折板状の杭、竹を利用した杭が見受けられ

表8 杭施設一覧表 (数字は本数)

Vol. 1

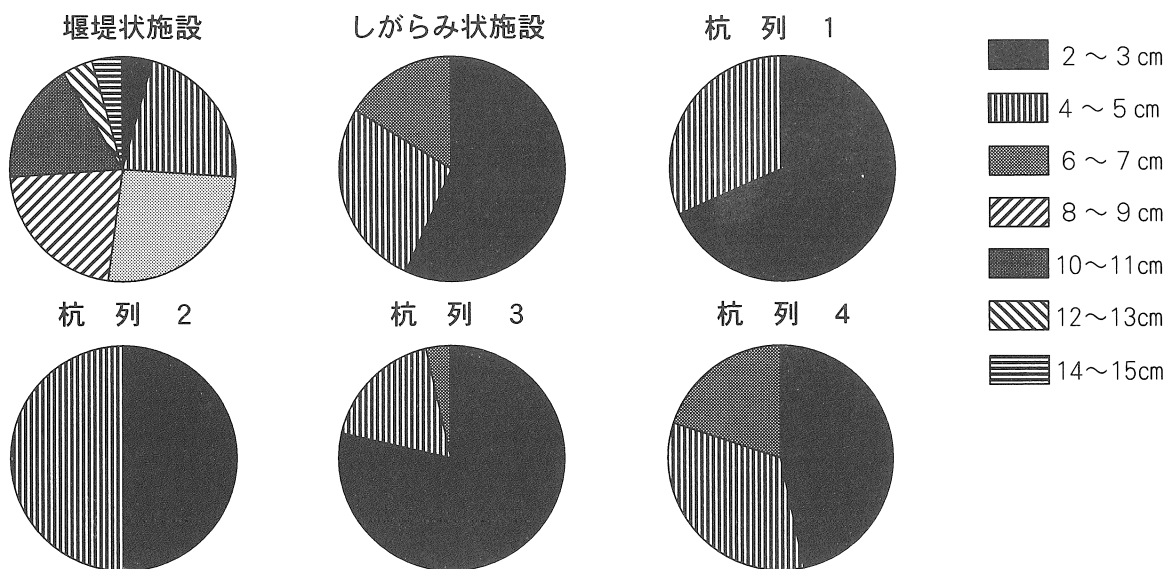
	堰堤状施設	しがらみ状施設	杭列1	杭列2	杭列3	杭列4
丸杭型	22	30	19	4	27	15
板状杭	1	6				
竹杭		1			1	
先端加工のみ	1					

Vol. 2

杭最大径	堰堤状施設	しがらみ状施設	杭列1	杭列2	杭列3	杭列4
2～3cm	1	21	13	2	22	7
4～5	5	10	6	2	5	5
6～7	6	6			1	3
8～9	5					
10～11	4					
12～13	1					
14～15	1					

グラフ1

杭施設最大径別使用状況 (表8-Vol. 2より作図)



た。表8に一覧表を載せる。竹を利用したものが2本あるが、出土状況からはなぜ竹が使われていたのかわからなかった。またしがらみ状施設には板状の杭が他を圧して多いが、それは施設を構築した意義の違いにあると考えられる。

グラフ1は表8-Vol. 2を百分率に表したものである。堰堤状施設には8～11cm級の太い杭が半数近くを占め、他の杭施設とは明らかに構造が違うことを示している。また杭列1～3の単純構造のものには2～5cmまでの細く一定の杭が使用されている。しがらみ状施設と板材を2枚使用している杭

表9 器種毎の樹種一覧表

	曲げ物	タモ	扁平棒	木札	板材	部材	木杭
ヒノキ	1						
ツルウメモドキ		1					
スギ			1	1	15	2	2
マツ						1	2
クリ							1
カヤ							2
アカガシ亜属						1	
コナラ亜属							1
ハイノキ							1

表10 天神遺跡7次調査出土木製品器種毎の樹種一覧表

	椀	杓子	四分枝	大足	鋤類	鋤類	柄	タモ	有頭棒	燃えさし	有孔板	板材	部材	木杭
ヒノキ										2		1		1
スギ				1			2			1	2	1	5	9
イヌガヤ			1											
アカガシ					4	3								
ケヤキ		1												
ヤマグワ	1													
イヌマキ									1					
ウバメガシ							1							
イタヤカエデ								1						

列4は、杭列1～3よりも太い杭を1/5程度使用している状況がよみとれる。ただし、しがらみ状施設の太めの杭は表8-Vol. 1からわかるように板状杭が占めている。

堰堤状施設も含めて32試料の木製品の樹種同定を行った。結果報告は第7章第1節に掲載してあるが、各器種による樹種の違いを一覧表(表9)にしてみた。特に板材の15試料全てがスギであること、それに反して木杭は樹種にバラエティーのあることがわかった。今回は平安から中世の遺物ではあるが、比較対照として、弥生時代中期の資料であり直線距離で2.5kmの天神遺跡第7次調査において出土した木製品の樹種同定を行っているもの38点の一覧表(表10)も作成した。同様にスギ材の利用が多い中、農耕具にアカガシを選択利用しているのがわかる。木杭の樹種にはバラエティーがみられなかった。また花粉分析の結果から、周辺の開発に伴いスギが伐採されたのちにマツが増えていくという現象が、両遺跡を比較するとよみとれる。

- 注1 角田徳幸「板屋Ⅲ遺跡」『志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5』1998 鳥根県教育委員会
- 注2 間野大丞「蔵小路西遺跡」『一般国道9号バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告2』1999 鳥根県教育委員会
- 注3 松本岩雄「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』1992 木耳社
- 注4 調査担当者である鳥谷氏よりご教示いただいた。
- 注5 藤永照隆「出雲の円筒埴輪編年と地域性」『鳥根考古学会誌 第14集』1997 鳥根考古学会
- 注6 出雲市教育委員会藤永に実見してもらい、助言を請う
- 注7 山本清「山陰の須恵器」『山陰古墳文化の研究』1971
- 注8 『中国電力高圧送電線鉄塔工事にともなう大井谷城跡・半分城跡発掘調査報告書』『中国電力高圧送電線鉄塔工事にともなう半分城跡横穴群発掘調査報告書』1979 出雲市教育委員会
- 注9 「三田谷Ⅱ遺跡」『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』1994 鳥根県教育委員会
- 「上塩冶横穴墓群」『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』1998 鳥根県教育委員会
- 注10 鳥谷氏及び鳥根県埋蔵文化財調査センター伊藤智氏のご教示による。
- 注11 中村氏からご助言あり
- 注12 第7章第2節に結果報告
- 注13 ただし後述するが、しがらみ状施設から鎬蓮弁の龍泉窯系青磁が1点出土しており、その時期を考慮すると、木杭14の時期は結果年代の古い方の時期に限りなく近いと考えられる。
- 注14 深田 浩「陽徳寺遺跡」『一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12』1996 鳥根県教育委員会
- 注15 第7章第3節に結果報告

参考文献

- ・ 広江耕史「鳥根県における中世土器について」『松江考古 第8号』1992 松江考古学談話会
- ・ 横田賢次郎・森田 勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心にして—」『研究論集4』1978 九州歴史資料館

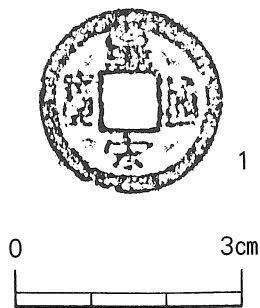
追 加 資 料

c区廃土中より古銭(36-1)が1個出土していた。整理作業不備のため脱稿後に見つかり、追加報告することとした。

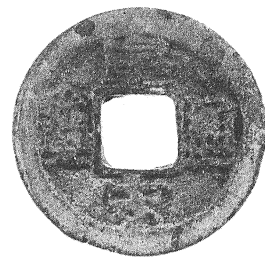
銅製で、外径2.45cm、厚さ1mm、重量3.3gで、真書体にて「皇宋通寶」と鑄だしてある。「府立大阪博物館旧蔵貨幣図録」^{注1}P.30-C-017に中国貨幣で真書体の「皇宋通寶」の資料があるが、外径2.49cm、厚さ1.03mm、重量3.46gであり、36-1に比較すると若干大きい、同類のものであろう。北宋時代の1038年に初鑄年のものである。

c区で旧河道が埋没した時期をおおよそ11世紀、堰堤状施設などがそれ以後13世紀頃のものとして捉えられるので、時期的にも合致する。

注1 『府立大阪博物館旧蔵貨幣図録 第一冊』1998 大阪府教育委員会

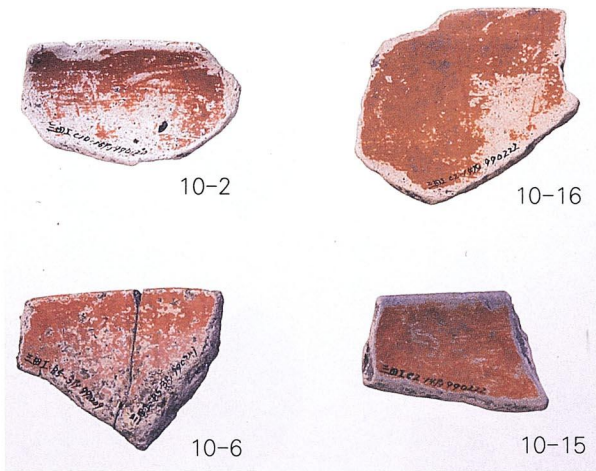


第36図 三田谷 I 遺跡出土
古銭拓影 (S=1/4)



三田谷 I 遺跡出土古銭

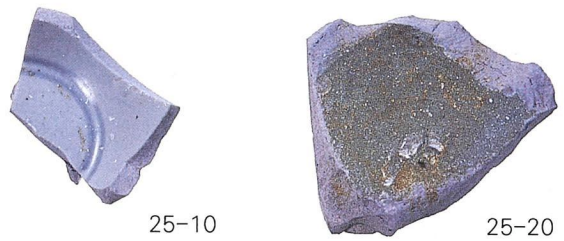
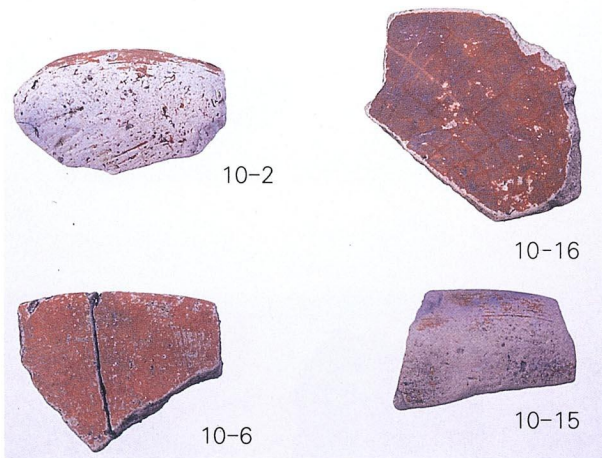
圖 版



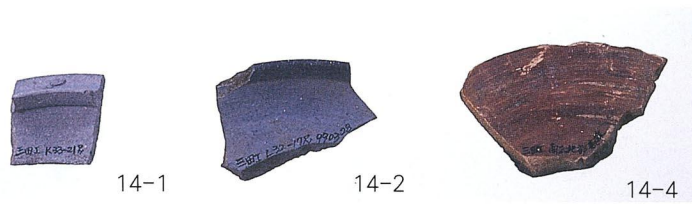
a 区 遺構外出土朱塗り土師器
内面
外面



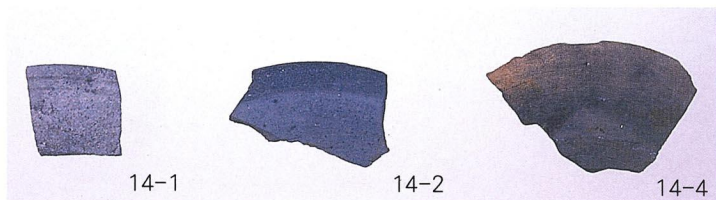
c 区 しがらみ状施設出土青磁

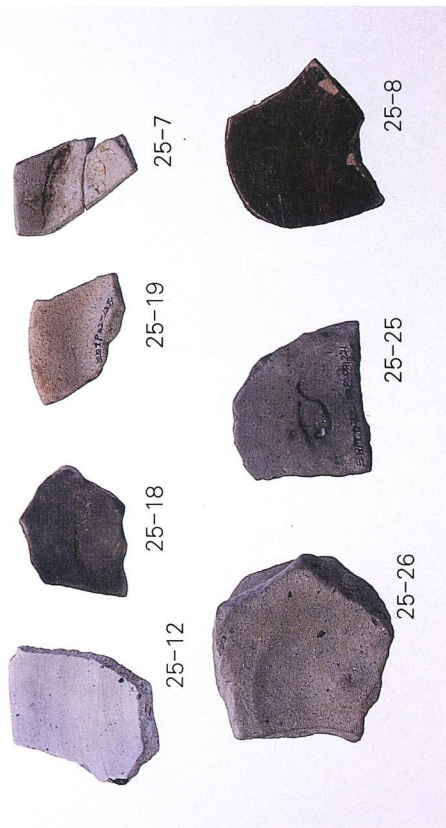


c 区 遺構外出土磁器及び青磁

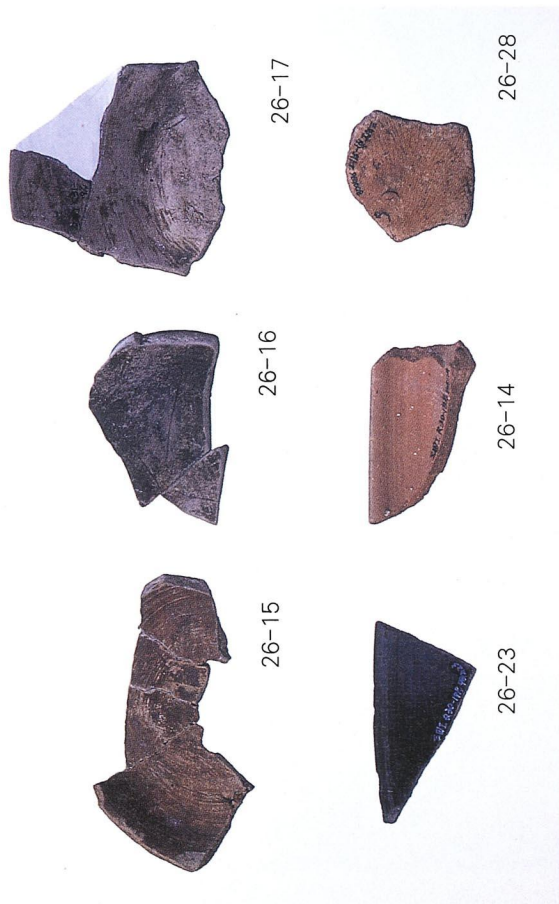
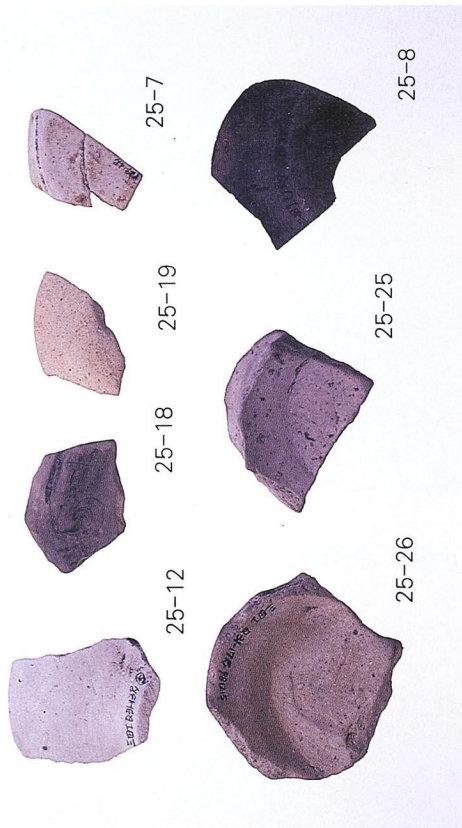


b 区 出土遺物
内面
外面

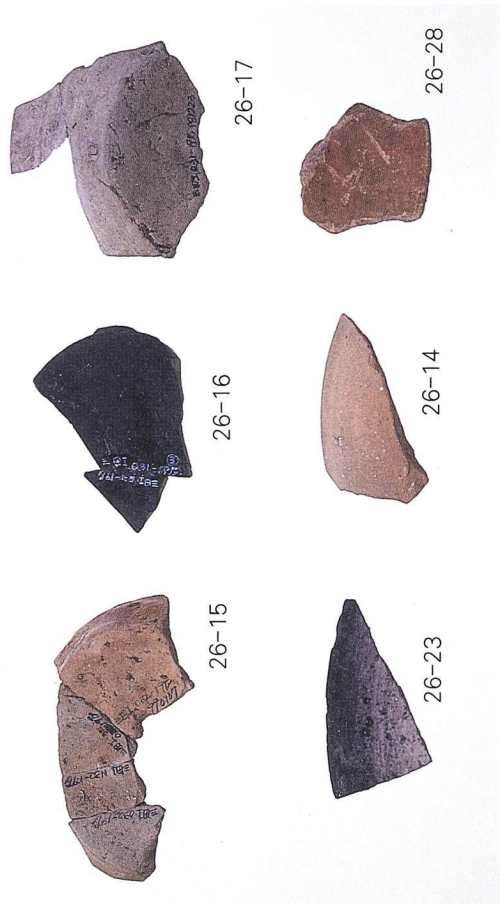




c 区 遺構外出土遺物 1 内面 外面



c 区 遺構外出土遺物 2 内面 外面





a 区 西壁 南北土層断面



a 区 東壁 南北土層断面



a 区 南壁 東西土層断面
(8-9ライン)